
名前のない街

nico

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名前のない街

【Nコード】

N8094D

【作者名】

n i c o

【あらすじ】

『緑が丘交差点』——偶然通りがかった12人の男女は、突然神隠しにあい、不思議な世界に迷い込んでしまう。そこで彼らが目にしたものは、そびえ立つ不気味な大鳥居。そしてその先にあるものは……めくるめく古事記の世界！

0000＊ はじまりのふることぶみ

黒。

そこは暗く、光はない。

永遠に続くと思われるほどの深い闇。

しゅくしゅくと身に染みる静寂と、太古の昔から留まり続ける重たい空気。

匂いは特に感じられない。

ただ、そこは寒かった。

「夜尊……おわしますか？」
よるみこと

声が聞こえる。

滑らかでいて、透き通る男の声。その上品な声色は、雅楽を連想させるもの。

現在男は片膝をつき、頭を下げて、目を伏せ返事を待っている。

漆黒の中、その姿、黒になじんで塗りつぶされており、見る事は叶わない。

程なく冷ややかな紫檀の床は、男の体温で温もりを帯び始めた。

と、その時。

「いるヨ。なあニ？」

舌足らずな答えは返る。男なのか女なのか、子どもなのか大人なのか、皆目見当つかなくぐもった声。

「手筈は全て整いました」男は頭を垂れたままと言う。

「分かった。……行くノ？」

「はい」

「待ッテ」

ひとつ、パチリと音が響く。それは指を鳴らす音。

途端、朧銀の燭台に立ててある蝋燭に、煌々とした火は灯る。

ゆらゆら、ゆらゆら。

儚く揺らめき、辺りをぼんやり浮き上がらせて、その様相を映し出していく。

現れたのは壁一面に施された、繊細で精巧、ことあまつかみいつはしら別天神五柱を象る見事な彫刻。

そして深々とお辞儀する男の姿。

男の前には鈍く光る金箔があしらわれた大判の簾すだれがかけられていて、その表面、豪奢な蓮の刺繍に埋めつくされた淡いうす絹が、幾重にも飾り付けられ、品よく彩りを添えている。

「ボクも行ク」

簾をポンと跳ね上げて、黒い影は中から外へと飛び出した。

数々のうす絹は宙に舞い、生き物のようにうねりながら、はらはらはらりと落ちていく。

男はゆっくりと顔を上げた。

視線の先には、黒いマントを着込んだ者が、ただにんまりと微笑んでいた。

0001＊ 旅立ちの朝

その日、その時、その街は、いつもと何ら変わらなかった。

整った街並も、延々と真直ぐ続く道路も、光を受けてさらさらと揺れる樹木も。

派手なクリーニング屋の看板も、目を細めて上を見上げる猫も、新聞配達員に挨拶する犬も。

あたりまえのようにそこにある光景。目を閉じてでも思い浮かべられる風景。

今日も潮の香りを乗せた風は、やさしくやさしく吹いている。

その日もいつも通りに始まって、そして終わりを迎えるはずだった。

日常は、繰り返されるはずだった。

彼らの企みを、未だ彼らは知らないでいる。

しかし、着実に計画は進んでいた。



午前六時——時計のアラームは鳴り響く。

坂下真朝は布団の中でもぞもぞ動き、やがて手を伸ばして時計に触れた。

リンという余韻を残し、部屋は静寂に包まれる。

ゆつくりと上体を起こして窓をみると、ベージュ色のリネンのカーテンは光っている。

裾をめくり外を見ると、そこには雲一つない青空が広がっていた。

「真朝、起きているの」

毎日聞こえるおなじみの快活な母の声。いつもはうざいなと思い、不機嫌な声で答えるのだが、

「起きてるよ」

明るく優しく言う。それはしばらく母ともお別れだからだ。

真朝は今日、成田へ向かう。フランス、パリに向かって。

服飾を本格的に学ぶためだ。まずは言葉を覚えるために語学学校へ通う予定。

「真人は起きてる？」

真朝は階下にいるであろう母に大声で問う。するとすぐさま返事は返ってきた。

「まだよ、起こしてちょうだい」

「はあ、やっぱりまだ寝てんのね」

真人は真朝の双子の兄だ。二卵生双生児。

本日の彼女の予定は、真人に駅まで送ってもらい、新幹線で東京に着いた後、成田エクスプレスで成田空港へ向うことになっている。しかし真人は朝が恐ろしく弱く、起こすのは重労働であると言えた。彼女はできれば母に送ってもらいたいと思ったが、残念ながらペーパードライバー。父はといえば、現在単身赴任中で不在である。ということとは、やはり真人に頼るしかない。

ため息をつきつつ、真朝は真人の部屋のドアを叩き始めた。

「真人、時間だよ。起きて」

……反応はない。分かりきったことである。人一倍朝に弱い男なのだ。もしかして日本一朝に弱い男かもしれない。

「真人ってば！」

手に力を込めて大きく叩く。が、やはり無駄。

「こいつ、起きろっつ」

舌打ちした後、ドアを力一杯開け放ち、鼻息荒くドカドカと入っ

ていく。

「相変わらず汚いわね」

視界に広がるのは、見事に服やら雑誌やらゴミやらが散乱した汚すぎる部屋。その様はブタ小屋以下。いや、ブタも気を悪くするかもしれない。

つま先立ちで、ベッドまでたどり着くと、

「起きてってば！ 駅まで送ってくれる約束でしょ？」

布団を頭までかぶる真人を揺り動かした。布団からは、ちらちらとボサボサ頭がのぞいている。

「うるせえなあ」

「うるせえじゃないでしょ、起きてよ」

「……わかってるって、あと5分だけ」

この言葉に、真朝は頭の血管がちぎれるくらいにイラっときてしまう。

「5分！？ 何が5分だよ、いつも5分5分って全く起きないじゃん！ だいたい小さな頃からアンタはいつもそうやって5分ってばかり――」

キンキン声が汚部屋に轟く中、遮るようにして、

「うるせえなあ。……我慢しろよ」

真人は煙たそうに呟いた。

「はあ、我慢？」

真朝は真人を覆う布団を鷲掴みにすると、思いつきり部屋の片隅へと投げ飛ばす。と、同時に押し入れはガタリと大きな音を立てた。「んなものできるかよ！」

「わ、何、……寒っ」

虚をつかれた声で、真人は上体を縮込ませる。

「分かったら、早く起きなさいよ！」

そう言って真人のボサボサ頭をどつくと、腕を組んで仁王立ちになった。その形相は、まるで阿吽の像の吽形のように。

「……怖え」

「何か言った？」

「別に」

「起きるわよね？」

「ああー」

「今すぐに！」

真人はめんどくさそうに瞼をこすりつつ、恨めしそうに真朝を見上げた。

「ったく、しょうがねえなあ」

坂下真朝・真人の両双子はとても似ている。昔は一卵生双生児によく間違えられたものだ。

現在、真朝の髪の毛の長さは肩まであり、目にはまつげのエクステをしているし、真人は少し長めのボサボサ頭に眼鏡をかけている為、さほど似ていないと思われるが、基本的な顔の作りは成長した今でもほぼ同じ。

大きなアーモンド型の瞳、大きな黒目、高すぎず低すぎない形の整った小振りの鼻。

二人は母親似であった。

「ご飯できてるわよ」

母は豆乳バナナジュースをミキサーからグラスへと移した。ダイニングテーブルには、すでにフレンチトーストやら卵料理やらが並べられ、キッチンには暖かな匂いが充満している。

「ありがと、おいしそう」

真朝は椅子に腰を下ろした。

「いただきます！」

これですばらく母の作る朝食を食べる事ができないのかと、感慨にひたりつつ、真朝はお皿にその手をのばした。

「いただき、ます」

とぼけた声を出しながら、一足先に、真人はパンに噛み付いた。

窓からは光が帯となってさしこんでいる。

母、朝子はグラスを口に運ぶ娘の顔を、ただじつくりと見つめ続けた。

旅立ちの日――これから真朝はパリへと旅立つ。小さかった、まだまだ子供と思っていた真朝が世界へ……。

そう思うと目頭が熱くなりそうになり、あわてて朝子はエプロンをはずし、新聞を取りに玄関へと向った。

「なあ、そろそろ時間なんだろう？」

真人はトレーナーとジーンズに着替え、頭にパイル製のヘアターバンをつけながら、真朝に問うた。

「うん、おねがいね」

真朝は精一杯につこりと笑って見せた。ずっと一緒にいた双子の兄とも、これでしばらくお別れだと思うと、少々寂しい気もしたからだ。

「言っとくけど、それ、大事に使えよ。俺のなんだからな」

「わかった」

「まじで乱雑に扱うなよ？　あと、貸すのは1年だけだからな。1年後、絶対返せよ？」

「わかってるって」

真朝の顔は、微笑みから次第に苦笑いへと変わり始める。

「10万超えるんだぞ！　肝に命じろよ」

「だからわかったって」

真人が指を差すのは、アルミ合金板でできたドイツ製のRIMO WAの大きなスーツケース。冬のボーナスで買ったのだ。どうせ、海外にしばらくは行かないんでしょってことで、真朝が無理矢理借りたのだった。

（別れ際なのに、カバンの心配ばかりかよ……）
スーツケースはまだ新しく、目立つ傷はひとつもない。

「真朝、気をつけるのよ。ちゃんと着いたら連絡するのよ？」
母は終始心配そうな表情をうかべていた。
「はい」

白いレースのワンピースに身をつつみ、真朝は旅立ちの一步を踏み出した。

真人は愛車、黄色のニュービートルの窓から顔を出し、すでに真朝を待っている。その表情は、ひたすらめんどくさそうだ。

「お母さん、いってきます！」
清々しい顔で言う。母は笑顔でそれに返した。「いつてらっしゃい」

それから視線は真人のほうへ。

「真人、お願いね」

「はいよ」

「運転気をつけてね」

「わかってるって」

母は車がエンジン音と共に去り、見えなくなった後も見送り続けた。

それは娘が旅立つというのもあるが、妙な胸騒ぎがしていたからかもしれない。

0002＊ ラブラブタクシー

グッチのスーツに身を包み、そわそわしながらタクシーの後部座席に乗る男が1人。

その隣には、つぶらな瞳の人形のような女が座っている。ぽってりとしたその唇は、女をさらに魅力的なものにかえていた。タクシーの運転手は、バックミラーで二人を見つつ、お似合いだなあとぼんやり思った。

「ミドリ、落ち着いてー」

「う、うん」

二人はこっそりと結婚を約束した間柄である。

本日、意を決して彼女の実家に向っているのだ。

もちろんその目的は、結婚の許しを乞う為である。

「ね、とよちゃんの親は厳しいの？」

「べっつにー」

その答えにミドリは拍子抜けしてしまう。心臓が飛び出してしまうくらい緊張しているのだ。

そして、「あ……そう」と小さくつぶやいた。

移り行く窓の景色を眺めながら、とよは隣に座るミドリの手をさりげなく握った。「ね、緊張してる？」

ミドリはやさしくやさしく握り返した。「うん、すごく緊張してる……さっきから汗止まらないし」

「ふふふ」

いたずらっぽく笑うとよの鼻を、ミドリは軽くつまむと、

「楽しんでるでしょ？」

「うん。だって、ミドリはいつもクールだから、緊張してるのめずらしいもん」

「え、俺、普段から緊張しまくりなんだけどな」

「そんなことない」

とよはミドリの腕に手を絡ませた。

「なんかうれしいなあ。幸せだなあ。ミドリとこうして一緒にいると」

「俺も一緒にいれてうれしいよ」

ミドリはとよの手をさすった。「ずっと一緒にいよう」

「うんっ」

「で、とよちゃんの親はどんなかんじ？ お父さんとか、怖い？

俺、門前払いとかなんないかな」

「ううん、全然。門前払いになるわけないよ。でもね、うちの親、二人とも天然ちゃんだから覚悟しといてね」

「そっか、うん、天然は大丈夫。君も十分天然だし、慣れてるよ」

遠くのほうに見える鮮やかに連なる緑の山々。そして反対側に見える煌めきを放つ宝石のような海……。

その水平線を見つめながら、ミドリは窓に頬杖をつき、これからくるであろう素晴らしき未来に思いを馳せた。

これから二人、苦楽を共にして、子どもが生まれて、そして歳老いていくのだろう。

やがて感慨深く隣のとよに視線を移すと、かすかに頬を膨らませて黙り込んでいる。なんだかとても不機嫌そう。

ミドリはなんで？ と首をかしげた。

「ね、どうして黙ってるの？」

「べっつにー。どうせ天然だもんね」

むくれながら、とよはぷいとそっぽを向いた。

かわいいなあと思いつつ、ミドリはとよの肩をそっと抱いた。

一瞬驚いた顔をした後、とよはミドリに向って口角を上げ、目を輝かせながらやさしく微笑んだ。

……しだいに車内には、何ともいえない甘ずっぱい空気が広がっていく。

（くっそう、さっきからずいぶんと見せつけるじゃねーか、コノヤロー。振られたばっかの俺っちに対するあてつけかあ！）

タクシー運転手、佐伯鉄二はバックミラーに映るラブラブカップルを見続けた。

ぶっちゃけると、後ろに座る女は佐伯の理想の顔の女（なにせ大好きなブライス人形にどことなく似ている）で、その隣に座る男は、自分がこうでありたいと望む理想の男性像（外見）であった。

（くっそう、神様って不公平だ！）

妬み、僻み。

見知らぬ男女に対してフツフツとそんな感情が沸き起こる。

そして先日佐伯を振った女、理絵の姿を思い浮かべた。

（思えば、理絵ってブスじゃねえか。なんで俺っちはここまで落ち込んでんだ？ アホラシ、バカラシ。落ち込んでた貴重な時間を返せってんだ）

そして決意する。

バックミラーに映る後ろの女よりもかわいい、カワイコちゃんをゲットしてやると。

そして同時に思い立つ。

いい男になるために、メンズnonnoでもなんでも買ってやると。

佐伯はこう見えてもプロのスノーボーダーであり、自称冒険家である。

しかし、そのみで食べていくには難しく、こうしてせっせとタ

クシーの運転手をしながら稼いでいるのだった。

来月には初・南極に旅立つ予定。

有名になって、豪邸に住みたい。――密かにそんな野望も持っている。

「ねえ、見て見て。ミドリと同じ車だよ」

とよは無邪気に、横を平走する黄色の車に向って指を差す。

ミドリは視線を海岸線から車道に移した。

タクシーを運転中の佐伯も、チラリと隣の車線を見る。

車はニュービートル。オープンカータイプだが、屋根は開けていない。

「本当だ。俺と同じ、ニュービートルのカブリオレだね」

「ミドリのクリーム色の車もいいけど、黄色もかわいいねー」

佐伯のハンドルを持つ手に、思わず力が入っていく。

おまけに、微かにこめかみの血管も膨らんでいる。

（な、なんだと兄ちゃん。その格好良さで、あれと同じ“外車”乗
つちやってるの？　なんか、なんだか俺っち、非常にムカついちゃ
ったりなんかしちゃうぜ！！）

そうして黄色のニュービートルとともに車道を走るラブラブタク
シーは、運命の交差点、『緑が丘交差点』にさしかかるのであった。

0003＊ ドライビング★スタア

「なにこの田舎ア。ロケ地は大阪だったんじゃないのオ？」

「ごめんリオ。変更になったんだよ」

「ブウ。とってもタコ焼食べるの楽しみにしてたのにイ。マツツーのバカ」

最近テレビに出始めたアイドル、室生リオを乗せた車、ホンダ・オデッセイはひたすら真直ぐ1本道を走っている。

右には山が広がり、左には広大な海が広がっている。

窓を開け、海風に吹かれながら、ふてくされたりオはすることもなく、ただ海を眺めていた。

その顔には大いに不満という文字が浮かんでいるのだが、やがて綺麗さっぱり消えることとなる。

あまりにも、目に飛び込んでくる海は壮大で美しかったからだ。

「ねえマツツー。リオの実家にもね、こうやってキレイな海が広がってるんだよオ。帰ってないなあ、帰りたいなあ。すごーく、いいところなんだよ？」

得意げな顔で言う。

長い睫、こぼれ落ちそうなほどぱちりとした瞳、大きな黒目。

リオは誰にも負けないくらい的美少女であった。

もっとも、美少女でも無い限り、アイドルにはなれないのだが。

マツツーこと松原真之介は、リオのマネージャーになって2年になる。

自他ともに、有能なマネージャーとして知られている。

「へえ、リオのところにも海があるんだ。僕の地元でもあるよ。テトラポットにたまに伊勢海老が這い上がってくるんだ。朝方、友だ

ちとよく捕まえて食ったなあ」

「え？ 本当にイ？ リオ、伊勢海老食べたーい」

笑いながらマツツーは、横目で右の車線を見て、追越し車線に移動する。

前方に、速度の遅い軽トラックが走っているからだ。

「この辺は海があるから、きっと海の幸が豊富だよ。今晚、うまいものでも食おう。リオの好きな海老もあると思うよ」

「やったあ。マツツー、大好き！」

そう言って、リオはマツツーの首元にしがみつく。ふんわりと、ジル・スチュアートの香水の香りが彼の鼻に届いた。

香水は、マツツーがリオにプレゼントしたものだ。リオの雰囲気、香りもボトルデザインも合っていると思う、先日購入したのである。

「もう、危ないだろ？ 大人しく座ってて」

言いながら、マツツーはリオの手を振りほどく。その心臓は、秘かにドキドキと早鐘を打っている。

「ブゥ」

リオは目をぱちくりとさせながら、大人しく助手席に座り直した。

ふたたびリオは窓の外に視線を移す。

海には、人を癒す力がある。まだ若いリオの心も、知らぬうちに癒されているであろう。

つられてマツツーも、リオのほうへと視線を移した。

やさしい潮風は、サラサラと長い栗色の巻き毛をゆらしている。微かに香るシャンプーの香りと香水、そして、輝く巻き毛と海の反射光が織り成す光の陰影に、マツツーの目はくらくらとくらんでしまった。

それは、思わず生唾をぐくりと飲み込んでしまうほど。

「ねーえ。見て見てマッツアー。黄色のビートルだよオ。リオ、あの車、免許とったら乗ろうと思ってるんだよね。やっぱりカワイいなあ」

隣の車線には、黄色のニュービートルが悠々と走っている。

マッツアーは気を取り直して、やれやれとため息をついた。

「リオは運転無理だよ。注意力散漫じゃないか。それに、筆記試験だってあるんだぞ。……知ってる？」

その声を無視し、リオはいきなり大きな声で、

「きゃーっ！ あの人、何？ カッコイイ！」

同時にちぎれんばかりに、黄色のニュービートルに向かって大きく両手を振りはじめた。

マッツアーは驚いて隣の車の運転席を見ると、なるほど、美少年がけだるそうに運転している。

おまけに、助手席に座る女も美少女だ。

「ちよっ、控えろよ。君はタレントなんだぞ？」

厳しくたしなめるが、肝心のリオは全く聞く耳を持たない。

そればかりか、目をハートに変える勢いで、うっとりとしている。

「素敵！ カン・ドンウォンに似てるウ！」

（は？ カン・ドンウォンって誰だよ……）

マッツアーには分らない。

無理もない、現在彼女は完全に韓流にハマっているのだ。

韓流を知らないマッツアーにとって、全く未知の人物だ。

挙げ句の果てに、「ねえ、マッツアー。隣の車にもっと近づいてよ！」と、無理なお願いまで平気でしてくる始末。

マッツアーは大人の対応で、無言でそれを却下した。

坂下真人は車を運転しつつ、隣の車に向かって恥ずかしそうに手を振っている。

若干顔も、少しだけ赤らんでいるようだ。

それを横目で見つつ、助手席の真朝はあきれた顔で、

「アンタ、何やってんのよ？」

と、鼻で笑いながら言った。……いくらか眉間にシワも寄っている。眉間のシワは、不幸ジワっていうんじゃないかと思ったが、「うるさいわね！」と怒られそうなので、真人は言うのを止めておいた。

「いや、隣のオデッセイの女が、オレに向って手エ振ってんの。見てみるよ。……応えないと失礼だろ？」

「はあ？」

心底アホらしいと思い、真朝は一度軽くため息をつく。

「バカじゃない？ ホント自意識過剰ね。んなことやってるヒマがあるなら、早く駅に行きなさいよ」

「……ああ」

（俺、自意識過剰なのかな……）

速やかに黄色のビートルはスピードを上げ、オデッセイをひき離し、先へと急いだ。

「あー、行っちゃったー。ホントあの人カッコよかったア」

リオは心から残念そうに言う。そしてしょんぼりうつむいた。

しかし、マツターの耳にはその言葉は届いていない。

むしろその心は、ただひたすらビートルに追い抜かれた事実に対してムカついている。

——そう、マツツーは筋金入りのスピード狂であった。
おまけに重度の負けず嫌いでもある。
すかさずアクセルを踏み、前を走る黄色のビートルを追う。

「マツツー大好き！ 彼を追ってくれるのね。さっすが有能マネー
ジャー」

リオは別な意味にとらえ、うっとりマツツーの鼻筋が通る横顔
を見つめているが、やはりその声も彼の耳には届かなかった。

聞こえるのは、オデッセイの加速音のみ。

見つめるのは、ビートルの後ろ姿、ただ一点のみ。

彼は今、まさに男の意地をかけて、ビートルを追い越すつもりで
あった。

（くそっ、あの前のタクシー、死ぬほど邪魔だ！）

眼前では一台のタクシーが、ビートルと平走している。

マツツーはタクシーを大いに憎んだ。

平走されては、追い抜くことなど出来ないからだ。

（ぶっ殺す、あの親父……）

親父とは、彼の持つイメージ“タクシー運転手はおっさん”とい
う偏見からくるものなのだが、まさかそのタクシーを運転するのが、
マツツーの敬愛するプロのスノーボーダー『佐伯鉄二』であるとい
う事実を知るのは、また後の話である。

……そして車はやがて、あの『緑が丘交差点』をむかえる事とな
るのであった。

0004＊『緑が丘交差点』

『緑が丘交差点』

——後日談、地元の人は、そろって首をかしげ、

「そんな交差点、ここには存在しないよ」

「ここは白山交差点まで、長く続く1本道のはずだけど」

だがその時……そこには確かに存在していた。

——緑が丘交差点

長年その地に住む坂下真人・真朝の両兄妹は、その異様な入口に疑問を持たなかった。

なぜならその光景は、この先にある白山交差点に酷似していたから。

日頃運転慣れしているタクシー運転手、佐伯にいたっても、同じ理由で全く疑問を感じていない。

後続の車、オデッセイに乗るマツーも、“5本目の信号機”で右に曲がると記憶していたため、微塵も違和感をおぼえなかった。

……否。

マツーは、黄色のビートルを追い抜かすことしか考えておらず、周りの風景や『緑が丘交差点』と記された標識を見ていなかったというほうが正しい。

静寂を破るかのように、その緑が丘交差点を右に曲がった先で、一つの驚きの声が上がった。

「うわっ。な、なんだよこれ！」

発したのは、ビートルやタクシー、オデッセイの500メートルほど前を走っていた、トヨタ・プリウスに乗る青年医師、勝浦俊太郎。

「こんなもの、いつの間に出来たんだ？　ついさっきまでなかったぞ！？」

その声は半ば叫び声となって、車中に大きく響き渡る。

「えっ？　何？　……俊君どうしたの？」

俊太郎の従兄弟にあたる神川　智は、助手席で形の良い眉をひそめてみせた。

彼は東京からこの地に飛行機で到着したばかり。何が起きたのかさっぱり分からない。

「智……信じられねえ事が起こった。……でけえ……」

俊太郎は、まばたきを忘れたかのように目を見開いたまま、ただ上を見ている。

智はそれを横目で確認し、同じく恐る恐る見上げてみた。

二人の眼前にそびえ建つのは……およそ直径五メートルの円柱二本に支えられる、大きな大きな木造の大鳥居。――その高さ、三十メートル以上はあるように思われる。

異様なのは、その大きさもさることながら、それが法隆寺ほうりゅうじ西院伽藍がらんを彷彿とさせるくらいに年月を経た、とても古い材質であるということ。つまり作られたばかりではなく、大昔からそこに位置しているかのよう。

車道を挟み込むようにして、それは堂々と建っている。

まさに熊野本宮大社にある大齋原おおおのほらの大鳥居を思わせた。

「なんでこんなところに鳥居があるんだよ……」

俊太郎はひどく困惑していた。

その心臓ははち切れそうになっており、小さな頃に患っていた持病の喘息が出てしまいそうな勢いだった。

「ええっ？ この鳥居、元からここに無かったの？」

「ああ。こんなものあってたまるかよ。……信じられねえ」

智は言葉を失った。何が起こったのか、頭の中はグシャグシャだ。同じく俊太郎の頭の中もグシャグシャであったのだが、とりあえず家へ帰って落ち着こうと思い、アクセルをぐっと踏み込んだ。

……しかし、車は不気味にもエンストする。

（え？ オートマ車なのに？）

おかしいと思いつつ、落ち着いてキーを右へひねるが、エンジン音は聞こえてこない。

（こんなはずは……。なっ……。何が起こった？）

何度も再挑戦するが、結果は虚しく同じであった。

智は、ただならぬ雰囲気怯え、

「俊君、エ、エンジンかからないの！？ どうしてっ？」

と、慌てて言う。

「わからねえ。……車、買ったばかりなのにおかしい。……とりあえず電話してみる」

ハザードランプをつけた後、俊太郎はジャケットの内ポケットから携帯電話をとりだした。

その後、画面を見て愕然とする。

しだいに大粒の汗は、彼の涼やかな額を覆う。

「お、おい、智。お前の携帯を見せてくれ！」

「え？ ……うん」

「早く！」

智は焦りながら、鞆から二つ折りの携帯電話を取り出し、俊太郎に手渡した。

俊太郎はそれをすかさず開いて見る。

……画面は赤い文字でこう記されていた。

――『**圏外**』

0005* 不可解な現象

「なんで圏外なんだ？　ありえねー。こんなん初めてだ」
俊太郎は途方に暮れた顔つきで言う。

こめかみからは、汗が筋となって流れていく。
ここは地下では無い。地上だ。電波が届かないわけではない。

「え？　圏外なの？　見せて！」
智は信じられないといった表情で、従兄弟に向って手の平を差し出した。

無言で俊太郎は、自分と智の携帯電話を重ねて渡す。
普段使い慣れているはずなのに、智の手にはずっしりとした重みが伝わってくる。

（……携帯って、こんなに重かったっけ？）
思わずそう思ってしまうほど。

一つづつ確認するが、やはり画面は二つとも圏外と表示されていた。

「変だよ！　ついさっきまで母さんと話してたのに。……なんでだろうね？」

呟きながら、俊太郎と顔を見合わせた。

二人の切れ長の大きな目は、この異様な事態に、いつもよりもさらに大きくなっている。

「俺のドコモが圏外でも、auは大丈夫かなと思ったけど……ダメだったな」

「ねえ、ソフトバンクは繋がるのかな？」

「いや、無理だろう。もうそういう問題じゃ無いと思う」

そう言って、俊太郎はラジオをつけようとした。――しかし、聞こえる音は何もない。

「うそでしょう？」

智の言葉に、俊太郎は何も返すことができずにいた。不思議で不気味な状況に、二人はしばし沈黙した。

俊太郎はもう一度だけキーを右に回し、エンジンがかからないことを確認すると、

「とりあえず、その自転車屋で電話を借りてくる。ちょっと待ってろ」

と言に残し、車から外へと踏み出した。

「俊君、気をつけて！」

智の心臓は不安で壊れそうだった。できれば一緒に行きたいと思う心を、必死に押さえ込んでいた。

「あれ、ここって……」

自転車屋に向う途中、俊太郎は再び激しい違和感に襲われていた。大鳥居が建つ位置にあった建物が、元は何であったかきれいさっぱり忘れてしまっているのだ。

どうしても思い出せない。まるで記憶が切り取られてしまったかのように。

自転車屋があつて、その隣にレンガ造りの民家がある。その次に古ぼけた大鳥居があるのだが、確かにそこに建物が存在していたはずなのだ。

「ん？」

後方が騒がしいため、なんだろうと思い、俊太郎は視線を移す。プリウスから50メートルほど向こうに、黄色のニュービートルとタクシーが止まっている。そしてその手前に、派手な装飾をしたワンボックスカー。

皆、同じくトラブルが発生しているようだ。

「俺だけじゃないのか。……まったく、変だよなあ」
頭をボリボリとかきながら、自転車屋の引き戸をガラガラと開けた。

店内には色とりどりの自転車がズラリと並んでいる。

ママチャリなどの街乗りが大半なのだが、中にはキャノンデールやトレックといったマウンテンバイク、ビアンキやルイガノといった人気クロスバイクも数台見られる。

（なんだこの店、田舎なのに本格的。やるなあ）

自転車好きの俊太郎にはたまらない品揃え。

大いに感心し、今度の休暇に改めて見に来ようと心に決めた。

「こんにちは。あの、すみません」

呼び掛けるが、店内はしんと静まりかえっており、返事はない。

「こんにちは！」

何度か同じように大声で言うが、やはり返ってくる答えは無い。

（おかしい）

俊太郎は首をひねる。

店内はもちろんのこと、住居としているであろう奥の部屋にも、全く人の気配がしないのだ。

勝手に部屋に入って確認することも出来ず、諦めて店を出ようとした時――

「あの、店の方ですか？　すみませんが、電話を借してもらえませんか？」

そう、声をかけられる。

（俺が自転車屋の店員……？）

振り向くと、すぐ後ろにスタイルのいい男が背筋を伸ばし、立っていた。

背はスラリと高く、褐色の肌が健康的な、細い目をした男――小

顔で、8頭身は軽く超えている。

いや、9、10頭身はあるかもしれない。とにかく、モデルをしていてもおかしくない体型であった。

しかしそのスタイルに比べ、着用しているタクシー会社の制服はなんと野暮ったいことか……。

胸ポケットには名札がついており、『佐伯』と記されている。

「えっと佐伯さん。私、この店の者じゃないですよ。もしかして、あなたも車が壊れちゃいました？」

俊太郎は胸に手を当てながら、丁寧聞いた。

「はい。……あなたもですか？」

驚いた表情で、佐伯は眉間に皺をよせる。

「ええ。その上なぜか携帯も繋がらないんです」

「あつ、僕ですよ！ 変ですよねえ」

それから、二人は声を揃えて言う。

「「あの鳥居——」」

0006＊ 突然の事故

同じ言葉を発した事に、お互いがしばし顔を見合わせる。

暗黙の了解で、相手が何を言おうとしているのか想像できたが、

俊太郎は「先、どうぞ」と佐伯に発言を促した。

えっと……という仕草で間をとった後、

「きつと言いたい事、僕ら一緒っすよね。あんな鳥居、今までなかった」

佐伯は鼻をこすりつつ言った。

俊太郎は目で、うん。と何度も頷いて、

「わからないことだらけで、本当に混乱しちゃいますよ」
深くため息をついて見せた。

——キキキキキ……ガシャン！

突然店先で、事故としか思えない大きな音が響き渡る。

「な、何だ!？」

佐伯と俊太郎は、緊急事態に、慌てて店を飛び出した。

「あ……」

一台の車が、不気味な大鳥居に突っ込んで煙を上げている。

正面衝突——そのフロントは見事にひしゃげている。

車種は、ホンダ・オデッセイだ。

「だいじょうぶか!？」

俊太郎は大声で車内に呼び掛ける。

中では、ITS ヘッド・エアバッグ、サイドエアバッグ、カーテンエアバッグなどといった、ありとあらゆるエアバッグが膨らんでいる。

佐伯はグッと力を込め、助手席のドアをこじ開けた。

「痛ぁーい」

腕をさすりながら、栗色の長い巻き毛の少女がよたよたと外へ出る。

その足を覆うルブタンのヒールが、カツカツと音楽のように地面を鳴らした。

怪我はなさそうだが、少女のあまりの可愛さに、佐伯と俊太郎は思わず息をのんでしまう。

まるでキラキラと星が飛び散っているかのように、その周囲は後光がさして見える。

少女は一般人が着こなせそうもない、派手目の花柄ワンピースをさらりと着ていて、一目でタレントかモデルなのだろうと予想する事ができた。

「もう、マツツーったら、いきなり急ブレーキ踏むんだからア。危ないじゃないのオ」

薄くチークの塗られた桃色の頬を膨らませ、微妙に怒っている。

「違う、ブレーキなんか踏んで無いよ。いきなりハンドルが効かなくなつて、衝突したんだ!」

マツツーは運転席で必死に言い訳をする。

それから慌てて車外へ出て、少女の傍へ走り寄り、「リオ、怪我はないか?」と優しく言った。

「腕が折れそうー」

言いながら、リオはマツツーの前で腕をぷらぷらと振る。

青年医師、俊太郎は（それだけ動けばだいじょうぶだよ、アホ）と思いつつ、

「あなたのほうが、酷い怪我じゃないですか。ちょっと待ってて下さい」

と、マツツーに言った。

「え……?」

マツツーは事故直後で興奮している為気づかないが、額からダラダラと血液が流れ出している。

「きゃっ、マツツー、ひどい怪我じゃないの!」

ようやく気づいたリオは、オロオロとし始めた。

「おい、智、俺の鞆持ってきてくれないかー?」

事故の音に反応して、車外に出ている智に、俊太郎は大声で話し掛ける。

「え? うん。……中の人、怪我してるの?」

智は心配そうに眉をひそめた後、手際良く後部座席から大きな鞆を取り出して、俊太郎の元に駆け寄っていく。

その鞆の中身は、医療品の簡易セット。包帯やら消毒やら点滴やら、緊急時に備えていつも車に常備しているのだった。

「サンキュ。お前はそっちの女の子を見てくれ。なにか変化があれば、知らせてくれよ。何もないといいがな。事故だから一応……」

俊太郎はマツツーに近寄りながら、智にそう指示をする。てきぱきとした動きだ。

智は医学部に通う、成績優秀な学生。「わかった」とうなずくと、リオに近寄っていった。

「……あ」

リオの目は、チカチカしていた。

自分に近づいてくる男の子は、まさに王子と呼べるような、線の細い美男子だった。

その瞳はひどく澄んでいて、一度見ると目が離せなくなってしまふ。惹き込まれてしまうほど魅力的だ。

右手で顔にかかる髪を横に撫でつけるしぐさ1つをとってみても、

それは優雅で、まさに薔薇が似合いそうな少年と言えた。

普段リオに近づいてくる男はどこか上気しているが、王子の顔は
いたって涼し気。

向こうでマツツーを手当てしている青年医師と、どこことなく似て
いるが、その顔はとてもミステリアスである。

切れ長の大きな瞳にかかる長めの前髪が、そう思わせるのかもしれ
なかった。

「……あの、僕の顔に何かついてますか？」

あまりにもリオが凝視するので、智は少し不安になった。

0007* 大きな大きな大鳥居

黄色のニュービートルの車内では、双子の兄妹が同じ表情で口を開け、ただただ呆然と上を見ている。

その表情は悪夢でも見ているような、そんな、信じられないといった顔。

もちろん目の前にある、大鳥居がその原因であった。

それは全体的に直線的であり、笠木の下に島木がないことから、神明鳥居であることが分かる。

装飾的な物は一つも無い簡素な造りで、地面に対して垂直に建てられている。

二人は、たった今起きたオデッセイの事故にはまったく目もくれず、ただひたすら古い木造の鳥居を眺め続けた。

「こんなのアリかよ……」

兄、坂下真人は呟いた。

「なんかすごく怖いんだけど……」

妹、坂下真朝も呟いた。

昨日は存在していなかった、異様な物体。

一体いつ現れたというのであろう。なぜ？ 何の為に？ ……そ

んな疑問を抱かずにはいられない。

それは巨大であり、圧倒的存在感を放ち続けている。

まるで彼等のために開かれた、地獄へ繋がる門のようであった。

二人の腕には底しれぬ恐怖から、鳥肌がびっしりと立ち始めている。

一方、隣に止まるタクシー内の後部座席では、

「ちよっ、事故だよ事故。大きいよ！ ……ねえ、ミドリ。中の人、大丈夫なのかな？」

と、童顔の女が、目をうるませながら半ば興奮気味で騒いでいる。

「ちよっとまって」と、ミドリは手で女に静止を促してから、ゆっくりとその目を固く閉じた。

男にしては長めのまつげが、顔に影を落としている。

女は指示されたとおり、黙り続けた。

「とよちゃん、安心して。見た目はド派手な事故だけど、全く命に別状ないよ。それに、俺らができる事は何も無いし……」

そう言いながら、時間をかけて目を開けた。

「よかったー。……それにしてもミドリはすごいなあ。目を閉じただけでわかつちゃうもん」

とよは感心しながらミドリの顔をじっと見つめる。

あまりに尊敬の眼差しで見られるので、ミドリは照れてしまい、
「ちよっとしかわかんないよ」と謙遜して答えた。

ミドリは東京で活躍する、そこそこの名のある占い師だ。

しかし、その本業は建築家である。

普段は二足のわらじで仕事に追われているのだが、今は三日間だけ休みを取り、こうしてここにいたのであった。

「それよりさ、なんか今、この空間……すごく変だよ。俺、今鳥肌すごいもん」

唐突なミドリの言葉に、訳も分からず、とよは深く瞬きをする。

「変ってなにが？」

考え込むように「う……ん」と唸ると、ミドリは降参するかのようになり、「うまく説明出来そうもないや。まあ、いろいろと変なんだ

よ」と答えにならない答えを言う。

それから一つ呼吸をおき、

「例えばあの大鳥居……。運転手さんも言ってたけど、すごく変だと思わない？」

と神妙な顔つきで付け足した。

その言葉に、とよは深くうなずき同意する。

「うん、変だよー。お正月に実家に帰った時は、あんな物、なかったんだよ？ あんなバカでかい鳥居を作った奴、本当にバカだよ。ね。税金のムダ使いだよ！」

「……は？」

予想外の解答にミドリは狼狽えるが、それでもとよの演説は続く。「そういえばお母さんが、今年からすごく税金が高くなったって言ってたし、実はこの市自体がすごく借金まみれなんだって。それなのに、あんなろくでもないもの勝手に作っちゃってさ。みんな頑張って納めてるんだから、税金は大切に有効に使って欲しいよね。……って、東京に住んでる私が、こんなこと言う資格ないんだけど……」

言いながら、頬をピンクに染め、市に対して怒っている。

ミドリはもう、苦笑いするしかなかった。

（なんでここで税金の話になっちゃうんだろう？）

それでもミドリは、そんなハチャメチャな思考のとよが、心の底から大好きなのであった。

0008＊ 大鳥居の向こう側（前書き）

【鳥居】…神界と俗界（人間の住む世界）を隔てる“門”。神域への入り口。

0008＊ 大鳥居の向こう側

大鳥居の向こう側。

そこは……その世界は常に深い霧で覆われている。

幾重にも白で塗り込められ、白以外は全く見ることは叶わない。
何かを包み隠しているような、そんな秘密めいた世界。

「私が集めました、あしはらのなかつくに葦原中国の者達を御覧下さいましたか？」

古めかしい服装をした男が言う。

それは現代において、考えられない姿であつた。

なぜなら男は、豊かな長い黒髪を頭の中央から左右に分け、それぞれ耳のわきで8の字に輪を作つて金糸で束ねている。その髪型は美豆良みずらと呼ばれるもので、まだ日本が倭わと呼ばれていた頃の、弥生時代および古墳時代における古代成人男性のもの。

服装もその時代の二部式のもので、筒袖つつそでの打ち合わせをした上衣に、膝のあたりで足結あゆいされた絹褌きぬばかまを身に付けている。

いずれも支配者階級を思わせる、きらびやかなものであつた。

「うん、見たヨ。……ところでキミってさ、本当に呆れるくらい美形が好きなんだネ。あそこまで美形ばかりを集めるとは、正直ボク、驚いちゃつたヨ」

黒いマントを着込んだ者が、飄々と言う。

その者は、肩から足下まですっぽりと漆黒に覆われ、その顔は、
兎の面で覆われている。

贅のかぎりをつくした兎面――。頭頂部には、二本の長い毛皮が
あしらわれ、ちょうど兎の耳を模している。

その目に煌めくのは、2つの大きな純度の高い紅玉^{ルビー}。それはルビーの中でも最高級と言われる、ピジョン・ブラッドであった。そして眉間の第三の眼の部分には、キラリと輝く大粒の金剛石^{ダイヤモンド}。一般にピンクダイヤモンドと呼ばれる、希少なカラーダイヤモンドである。

面からしてその者は、ただ者では無い雰囲気をかもし出しているのだが、虎のように牙を剥くその口元の造形は、兎特有の愛らしさなどはなく、所有者の狂暴性を表しているかのようであった。

「……美しくない者は全く価値などありません。醜い者は貴方様の治めるこの美しい世界には、ふさわしくないのです」

男は切れ長の目を細めた。「しかしながら、偶然を装い誘い込むのは、いささか苦勞いたしました」

「あいかわらずだね。キミって男はいつだって、シビアに美しい花だけを選ぶんだ」

兎は笑う。肩を震わせるたび、首に付けたたくさんの勾玉が、カチカチと鳴る。

それは常にボウッと発光する、不思議な材質の首飾りであった。

「夜尊^{よるのみこと}、それはもしや、大山津見^{オオヤマツミ}の娘の件を遠回しに言っておられますか？」

男は顔をゆがめ、かつて自分の妻となるためにやってきた石長比売^{ヒメ}を、容姿が醜悪で美しくないという理由で追い返したことを思い出した。

「そんなつもりはないけどネ。……邇邇^{ニニギ}芸、もしかしてキミは今でもカノジョの呪いを恐れてル？」

ニニギはごくりと唾を飲んだ。

夜尊は勾玉を揺らしながら、いまだに笑い続けている。

「いっそのこと、カノジョも妻に迎えればよかったのニ。そうすれば、すべてがうまくおさまるのニ」

夜尊の言葉通り、ニニギはカノジョの呪いを恐れていた。

女の呪うらみとは強力で、測りしれない深さと不気味さをもつ。

そこでふと、イワナガヒメを妻に迎えた自分を想像するが、どう考えても、吐き気がするほど無理であった。

イワナガヒメは美しくない。

「私の妻は、木花之佐久夜毘売コノハナサクヤヒメで充分です。ただ一人で満足です。

私は呪いなど恐れません」

夜尊は「ふうん」と興味なさげにそっぽを向くと、手に握る水晶玉でニギが集めた人間たちを写し出した。

「ところであれで全員なのかナ？」

大鳥居の前に集結しつつある、十一人の男女。その姿はいずれも美しい。

「いえ、あと一人。……これよりひき入れます」

ニギは口角をあげてニイと笑った。

0009* 金髪碧眼の紳士

「ねえ、とりあえずそろそろ駅に向ってくれない？ 電車に遅れると困るわ」

黄色のニュービートル内、坂下真朝は運転席の真人に対して、固い表情で話しかける。

東京に向う新幹線の発車時刻はまだまだ先だが、これ以上はもう、不気味な鳥居を見ていたくないのである。

一方、その返答になぜか困ったように、真人は口を真一文字に結んで見せた。

「あのさ、言ってなかったんだけど……実は、さっきから車が全然動かないんだ」

真人の思わぬ告白に、真朝はただ叫ぶしかない。

「何ソレ、冗談でしょう？ やめて、ふざけないでよ！ 怒るわよ！？」

その声は、必要以上に大きなものである。

真人は少しむくれながら、「ふざけてねえよ。アクセル踏んでも、カギ回しても、全然反応しねーもん。俺だってイラついてんだよ。……つか、これってなんでだと思う？ 逆にこっちが聞きたいよ」と、すねて言う。

「どいて、早く！」

「……え？」

いきなりの「どけ」という言葉に少々驚き、渋々「わかったよ」と言いながら、真人はドアをあけて外へ出た。

ろくに何も言い返さずに素直に従ったのは、彼女がすごい形相だったからである。

正直、あまり自分以外の者に運転させるのは、まだ嫌な状態であった。なぜなら黄色のニュービートルは、今月到着したばかりの、ピカピカの新車。にもかかわらず、真朝は車内で、助手席から隣の運転席へと遠慮なく中腰になりながら移っていく。

「まじかよ、ふざけんや……」

呟き、真人は真朝の履く靴が、愛車のシートを汚さないか気が気ではなく、ずっとその足下を凝視していた。

「お、おい、くれぐれも大切に扱えよ。お前には前科があるんだからな！」

“前科”とは、以前、真人の愛車であったプジョーを借りた際、見事に塀にぶつけてバンパーをへこませるといふ大事件を起こしたことを指す。

愛車を2度も傷つけられるのは、なんとしても避けたい所である。「うるさいわね、分かってるわよ」

そう不機嫌に答えながら、真朝はカチャカチャとエンジンをかけようと、必死にカギを回し始めた。

……しかし、何度やろうが無駄な事。

車はカギによる伝達を一切無視するかのように、ひたすら沈黙を守っている。

「何でなのよーっ！」

半ば叫びながら、真朝はハンドルに向かって両手を強く打ち付ける。

「ちよっ、壊れるだろ！？ いきなり何するんだ、やめてくれよ！」はらわたが煮えくり返るのをおさえつつ、真人はハンドルを横から労るようになでつけた。

車は痛みなど感じるはずもなのだが、彼にとっては心の底から愛

しい車……。

そして口を尖らせながら、「もっと優しく接してくれよな」と、鋭く横目で睨みつける。

「でも、じゃあ何で動かないのよ！」

「知るかよ、俺だって知りてえよ！」

しばらく二人は大声で責め合うのだが、その後、真朝は消え入りそうな声で、「鳥居といい、車といい、もうわけが分かんないよ。これってフランスに行くなんてことなの？ ……気が狂いそう……」と呟きながら、うつむき、頭を抱えた。

「ったく、メソメソすんなよ。辛気くせえな」

真人は腕を組みながら、めんどくさそうに真朝を見る。

（つか、メソメソしてえのはこっちだよ。……俺の車、どうなっちゃったんだ？）

「はあ」

真人は深くため息をついた後、少しだけ腰を浮かし、ジーンズの後ろポケットから携帯電話を取り出した。

それから慣れた手つきでボタンを操作し、カーショップに電話をかける。

——しかし、電話は繋がらない。

それもそのはず、液晶画面には圏外と表示されていた。

「マジかよ！ ……ウゼエ。この辺、公衆電話なんてあんのかよ」その言葉に反応した真朝は、ようやく顔を上げ、「何？」と短く質問した。

真人は画面を指差しつつ、「圏外で、修理が呼べねえ」と説明する。

真朝は自分の携帯を確認するが、同じくやはり圏外であった。

「ほんとだ……」

周囲を見渡すが、店は自転車屋しかなく、あとはすべて民家である。

かつて本屋もあったのだが、先月潰れてしまい、シャッターが下りていた。

——そう、この不思議な緑が丘交差点は、白山交差点近辺を鏡に写したかのように全く同じで、真人も真朝も、現在白山町にいると思っ
て疑わない。

「自転車屋で電話を借りるしかないわね。ほら真人、早く笹本サイクルに行ってきたさいよ。ついでにタクシーにも電話して」

真人は憎々しげに真朝を睨んだ。が、真朝は気にも止めない様子。挙げ句の果てに、「ほら、急いでよ」と急かしてくる始末。

一言どころか大いに文句を言っ
てやりたい心境になったが、後がめんどくさい事になる
と思い、真人は無言でドアを開けて外に出た。
(……なんつーか、あの人使いの荒さ、なんとかならねえの?)

ぶつくさ文句をたれながら、ポケットに手をつ込んで歩き出す。ふいに顔を上げて前方を見ると、近くに止まる白いワンボックスカーが目に入る。キャブオーバー形状の車体を持つ、トヨタ・ハイエースである。

その表面には複雑なシャンデリアのシルエットがいくつも描かれており、とてもお洒落で目を奪われるもの。車体をじっと見ながら歩いていると、いきなりそのドアは勢いよく開いた。

(おおっ!?)

中からは、金髪碧眼の西洋人が、サラリと髪をかき分けながら下りてきた。

ファッション誌から飛び出したような、タイトなスーツを着こなす美男子。彼はまっすぐ真人に向って近づいてくる。その目はずっと真人を見つめたまま。

(なんだよ。ま、まさか、話しかけられるんじゃないか……。ぎゃー、やめてくれ。俺、英語できねーし!)

必死に、頼むから話しかけないでくれと心の中で祈り続けた。

「ねえ、君の車、E^{エンジン}ngineかかる？　僕のはダメなんだよね」

流暢な日本語で、西洋人はジェスチャーを交えながら話しはじめる。

目は鮮やかな青色で、宝石のようにキラキラと輝いていた。

（に、日本語話せるのかよ）

真人は拍子抜けし、「あ……俺も、いや、僕もエンジンかかんないです」と、ぎこちなく答えた。

西洋人はこくりと頷くと、

「ほんと参っちゃうよね。僕は今日10時のF^{フライト}lightで、B^イritainに^{ギリス}戻らなくちゃいけないんだけど、この突然のA^{アクシ}cidentに、^{デント}とても困っているよ。これは一体どういうわけなんだろうね」

そう言って再び髪を優雅にかき分け、形のいい耳にかけた。

0010* Arthur Guise Garrotと疑惑

アーサー・ギース・ギャロット。

この長い名前は、彫刻のような顔を持つ、英国人のフルネームである。

ハイエースの運転席に座る、彼の通訳、浅田ミチルはぼんやりといくつか考え事をしていた。

その目はずっと、バックミラーを映している。

まずは一つ目。

——車はなぜ動かなくなったのか。

これは彼女だけでなく、大鳥居、すなわち緑が丘交差点を通過した者が皆、思っていることだ。

ちなみに彼女はこの土地の者ではないため、携帯電話が圏外であることに、なんら疑問は抱いていない。使えないと思うのみである。

そして二つ目。

これが今、彼女が最も考えていることである。

——アーサー・ギース・ギャロットがゲイであるという噂は本当なのだろうか。

これは彼の仲間内で囁かれている噂なのだが、最近ミチルもゲイ説は本当なのかもしれないと思いつけている。

彼女が女に対して興味を抱いている姿を見たことがないからだ。

彼女は6カ国語に堪能で、アーサーの通訳としてここ3カ月は働いているのだが、いまだに彼の傍に女の影を見た事がない。

それに、魅力的で美しいとちやほやされて育ってきた自分に対して、アーサーは全く興味を示さず、その上、あの手この手を使って

誘惑しても、軽やかにかわされ、すべて徒労に終わっているのだ。
これがゲイではないとしたら、何だというのか。――彼女はそう
思わずにはいられない。

そして今のこの出来事。後ろに止まる黄色のビートルから男の子
が出てきたとたん、じっと見つめ、タイミングを合わせて車から出
て行ってしまった。

……すごく怪しい。と、疑惑の目で、バックミラー越しに二人を
見ていた。

「君の名は？」

「……へ？」

唐突に名を聞かれ、真人はうろたえた。

（なぜ俺の名を聞く？）

その上、目の前の西洋人は、ひたすらまっすぐ自分の顔を見つめ
ている。

人と目を合わせるのが苦手な彼は、気まずい面持ちで目を泳がせ
ていた。

「ああ失礼、僕はこういう者だよ」

スマートな動きで、西洋人は名刺を差し出した。

それは、流れるような美しい筆記体で書かれた、貴族を思わせる
名刺であった。

《Arthur Guise Garrot》

「……あ、あの、すみません。俺、英語わかんないんですけど……」

0011＊ 教えてくれるかい？

「S o r r y、間違えた。……君にはこっちだね」

プラチナブロンドの青年は再び名刺を取り出し、またもやスマー
トに真人に渡す。

それは銀色の特殊な紙でできており、白インクで『美術評論家
アーサー・ギース・ギャロット』と書かれていた。

アーサーは軽くウィンクし、「怪しい者じゃないよ。僕は君に聞
きたいことがあるんだ。……いい？」と、人なつこく笑う。

真人はぎこちなく笑い返し、それから手に持つ名刺をもう一度じ
つくりと見た。

（……いいなあ。俺だって、こんなカッコイイ名刺がほしい。うち
の会社なんて、うすっぺらい再生紙だもんなあ。貧乏くせえ。……
つつーか、美術評論家って一体何するんだ！？）

仕立ての良いスーツは、その質感と縫製で、最高級のものという
事が分かる。

さりげなく履きこなしている靴も同様。なんとも言えない艶があ
る。

そしてハリウッドスター顔負けの外見……。

この人、ただ者じゃないな。と、真人は思い続けていた。

アーサーはさりげなく大鳥居に目線を移し、そして再び真人を見
る。

その目力の強さは、思わず目をそらしてしまうほど。

これが『キラー・アイ』というやつか……と、そんな事を思わせ
る視線であった。

「ねえ、ずっと気になっていることがあるんだけど、教えてくれるかい？」

「え？ あ、ああ……いいですよ」

（もしかしてこの人……そこまでして俺の名前が知りたいんじゃ……）

バカバカしい考えに、んなわけねえよなと1人でツツこみ、真人は吹き出しそうになるのを必死で堪えた。

アーサーは一息ついた後、話し始める。

その表情はこの上なく真剣である。

「ねえ、あの大鳥居は一体どの神社のものなんだい？ あれは本当に素晴らしい！ ……たしか、日本に現存する最古の木造鳥居は、1540年に建立された窪八幡神社くぼはちまんじんじやのものだけど、あの大鳥居はどう考えてもそれより古い。僕には世界最古の木造建築と言われる、607年に創建された法隆寺よりも、もっと古く感じられるんだ。これはかなりの歴史的発見だよ！ しかも、ここまで巨大ときてる……だから僕に、あの鳥居の事で知ってる事を詳しく教えてくれないか？ 僕の通訳は、この土地の出身ではないから何も知らないんだ」

アーサーは興奮し、その整った顔は少し上気している。まさに、湯上がりピンクといったところだ。

「……………」

真人はめんどくさいことになってしまったと思い、黙り込んでしまった。

基本的に蘊蓄うんちくたれは、嫌いなのだ。

……なぜなら聞くのも答えるのも面倒だからである。

「あのー。……あれはですねえ、昨日まであそこに無かったんです。で、今日なぜかいきなり建ってましたあ。だからその、世界最古の一つか、歴史的発見一つか。……これはもう、ぶっちゃけ怪奇現象ってやつっすね。ハイ。」

「……………Do ほんとうに really?」

それからアーサーに質問攻めにされ、ジーンズのポケットに手をつっこみながら、これまでの事を嫌々説明する。

質問攻めは予想していた事であるが、真人もわからない分、やはり答えられる事は限られていた。

それでも大きな目をさらに広げて、アーサーはその言葉をじつくりと聞く。

それは好奇心いっぱいの子供のような顔であった。

（やべえ……。こんな所でグダグダ立ち話していると、奴に怒られちゃうぜ）

真人は質問に答えながら、ずっと背後を気にしていた。

（まづいよなあ）

緊張で口の中にはイヤな唾液が溜まり、ごくりとそれを飲み干した。

それから勇気を振り絞り絞り愛車をチラ見すると、運転席に恐ろしく鋭い形相かおが一つ……。

（怖！！ ……やっぱ怒ってるし……）

0012* 夜兎の霧の国

風は、ない。

芳しい香りが辺りに漂っている。

そこは相変わらず白い世界であった。

濃密な霧が全てを包みこんでいる。

……チリン…チリン……

鈴の音が、微かにこだまする。

音は、次第に大きくなっていく。

何かがぼんやりと霧の中に現れたのだが、そのシルエットから、大型の牛車ぎっしゃであることが確認できる。

——牛車。

その正体は、一台の絢爛豪華な唐庇車けんらんからひさしのくるま。

塗り重ねられた漆は艶やかに黒光りし、所々に埋め込まれた金や真珠は幻想的に虹光を放っている。

それは平安時代に上皇や皇后、春宮などが使用したものと同じであつた。

屋根や底は檳榔びんろうで覆われ、その前後と物見に赤い蘇芳簾すおうすだれがぶら下がっている。

ゆっくりと車を引くのは瘤牛こつぶしで、顔には漆黒の仮面をつけている。

……チリン……

突如、簾は跳ね上がり、中から黒いものが飛び出した。

黒いもの——それは、兎面をつけた夜尊よるのみこと。

長いマントをたなびかせ、ふわりと優雅に着地する。

おりると同時に首飾りは鳴り、長い兎耳もフアサリとゆれた。

そして二つの紅玉ルビーを輝かせながら、元いた唐庇車からひさしのくるまを見る。

「ねえ、邇邇芸ニニギ。あと1人は到着したノ？　ボクはもう、待ちくたびれちゃったヨ」

そう言って上体を揺らしてみせた。

両の手は後ろで軽く組まれている。

蘇芳簾すおうすだれを丁寧^{はしたて}に上げ、ニニギは棧はしたてを使って下りてくる。

「今しばしお待ち下さい。……少々問題がございまして……」

「問題ってなあニ？」

「いえ、貴方様が気になさる程でもありません。もうじき解決致します」

アーモンド型の目は、自信に満ちた光を放つ。

それからニニギは静かに歩き、やがて夜尊の隣に立った。

「で、……お気に召した者はいましたか？」

「うーん、まだよくわかんない。ニニギはダレが気に入ったノ？」

夜尊は首をかしげてニニギを見る。

ニニギは何かを包み込むように両手を重ね、それから左手を静かに下ろした。

残された右手には、——どこから現れたのか、水晶玉が乗っている。

そしてニヤリと笑いながら、「私わたくしは」と、水晶玉を指差した。

「……ふうん、なるほど。いかにもキミの好きそうなタイプだねー」
夜尊が確認すると、ニニギの水晶はスウとかき消えていく。

「この者は私がいただいてもよろしいですか？」

「うん、ニニギの好きにしなヨ。……それより急いでネ。もう待ちくたびれたかう」

0013* 葦原中国にて…

あしはらのなかつくに
葦原中国。

またの名を中つ国。

それは人間の住む、地上世界のことをいう。

たかまがはら
高天原——すなわち天上の世界と、葦原中国の狭間にある緑が丘
交差点には、現在、ある1柱はしらの神が姿を現していた。

……「柱」とは、神を数える時に使う助数詞。

神は邇邇ニニギ芸の命に命じられ、こうして“問題解決”のために待機
している。

その身体から放たれる光は地面や辺りを照らしつけ、まるで小さな太陽のよう。

神の名は……天地を照らす神そして地蔵として知られる猿田毘古サルタヒコ。
顔を『天狗』の面で覆い、袈裟けさと篠懸すずかけという麻の法衣を身に纏う。
手に持つのは、錫杖しゃくじょうと呼ばれる金属製の杖。

それはさながら山伏やまぶしのような出立ちであった。
待ちながらサルタヒコは、ブツブツと不満を呟いた。

「……なぜ拙者がこのようなつまらぬことを……。ニニギ殿も、わざわざ拙者を指名しなくても、天児屋アメノコヤネあたりに頼めばよいのだ」
そして続ける。

「そもそも天津神あまつかみの問題は、天津神同士で解決してもらわねば困る。
……国津神くにつかみを巻き込むと申したい」

天津神とは高天原に降った神をさし、国津神とは葦原中国（地上）
に現れた神をさす。

国津神であるサルタヒコが天津神のニニギから聞かされた言葉は、
次の言葉のみである。

【これより来る者の、後ろに座する醜女しこめを落とせ】

「わけがわからぬ……」

と言いながら、天狗は首を傾けた。

——やがて一台の大型バイクが緑が丘交差点にさしかかるのだが、思いのほか彼は苦戦することとなる。

そう、バイクを運転する彼こそが、最後の『あと1人』なのであった。

0014* 12人目の男

「やべえ、遅れる！」

そう言いながら、食パンをかじる男が一人。

食パンは、耳を残して中だけ食べる。

彼の名は、ユン・テユ（尹 太柳）といった。

テユは韓国人と日本人のハーフなのだが、父の仕事の関係で、小・中・高はアメリカにいた。

現在は母と共に、母方の祖父母の元で暮らしている。

——日本の大学に通学する為である。

今日はファミレスのバイトの日なのだが、漫画を見ていて遅くなってしまうた。

彼は今、『魁！！ 男塾』にハマっている。寝る間を惜しんで読んでいるのだ。

「テユ、帰りに牛乳とトイレットペーパー買ってきてくれる？」と母が頼むと、めんどくさそうに「覚えてたらね」と彼は言う。

テユはひとりっ子のため、甘やかされて育った。

彼の家は両親ともに裕福で、欲しいものは何でも買い与えられている。

財布の中には、父親からもらったゴールドのクレジットカード。特にバイトをする必要はないのだが、好きな女の子に「働いてお金の大切さを知ったら？」と冷たく言われ、それから週5で働いている。

（言われた通りにバイト始めたのに……あいつは一度も店に来てく

れない。……クソ)

携帯を取り出し、あいつに電話をかけてみる。
しかし圏外であった。

(イラつく。なんで!)

舌打ちしながらバイクのカギの輪を、人指し指にくぐらせクルクルと回す。

「いってきます!」

母と祖父母に挨拶を済ませると、テユはハーレーダビッドソンに跨がり、ファミレスへと向う。

彼の頭の中は遅刻しそうなことよりも、あいつのことで一杯であった。

あいつはテユよりも一つ年上で、同じ美大に通う先輩。……もうすでに去年卒業してしまっている。

大きな黒目がちの瞳に、それを縁どる長いまつげ。

そして高すぎず低すぎない形の整った小振りの鼻……。

栗色のマッシュカールが良く似合い、人形のように色も白い。

笑うと頬にえくぼが出来る。

彼女のすべてが、テユ好みであった。

難を言えば、性格がかなりキツすぎる所くらいか。

「あー、会いたい!」

バイクの音で、声がかき消えるのを良い事に、テユはあいつの名前を何度も呼んだ。

0015* 後ろに乗せて

信号は、やがて黄から赤へと変化する。

テユは軽く舌打ちをした。

「クソッ、ついてない！」

よりによって、待ち時間の長い信号機。

ハーレーはスピードをゆるめ、そしてピタリと停車した。

（あー、完全にバイト遅刻だなあ……）

諦めたように体の底から息を吐くと、気だるそうに地に足をつけ、ひたすら青になるのを待つ。

「あっ！ テユ君。いいところにいたあ」

甘ったるい声がして、振り向くとそこには美大の同級生の姿。

女はニコニコと、そのグロスを塗りたくった口元を、弓の形に歪ませている。

品のない露出高めの花柄ワンピースに、グレーのレギンス。

テユは面倒な事になったと思い、がっくりと肩を落とした。

そしてため息をついた後、「何だよ塚本」と無愛想に言う。

「どこに行くの？」

目をしばたかせながら、塚本は問う。

それに対し、テユはそっけなく

「バイト」

と答える。

「へえ……」

行き先がバイトと分かり、塚本は「フフ」と含み笑いをする。
何をまた企んでいるんだと、テユは眉間にしわを寄せた。

「ね、お願い。後ろに乗せて？ 駅に行きたいのー」
そう言いながら、塚本は上目遣いでくねくねと肩を揺らす。
あわせてFカップの大きな胸も、左右になめまかしく揺れた。

「駄目。俺、急いでるし」

テユは塚本の顔も見ず、ゴーグルを取り出しおもむろにつけた。
――態度でも拒否をあらわす為である。

「いーじゃーん、ケチケチしないのっ。……………えいつ、乗っちゃえ！」

「わ、てめえ…………」

塚本は足を上げ、無理矢理後ろに「よいしょ」と跨がる。

その時テユの肩をつかみ、思いつきり体重をかけて座った。

「ぐっ…………重。何するんだ、バカ。ふざけんな！ 降りろ！！」

「えへへへ。バイト先と駅は近いんだから、いいじゃーん」

テユは後ろの女を振り落としたい衝動にかられたが、周りに停車する車の目もあって、しぶしぶヘルメットを渡す。

塚本は「サンキュ」と言いながら頭にかぶった。

「何かこのヘルメット、いい香りがするー。もしかして…………先輩の匂い？」

「…………ああ」

塚本の言う“先輩”とは、テユの言う“あいつ”のこと。

実はテユは頻繁に、“あいつ”をバイクの後ろに乗せている。

彼女のほうから好んで乗る訳ではなく、テユ自らが迎えに行っているのだ。

信号は青に変わり、同時にバイクは発車する。

右には山が広がり、左には広大な海……。

白山交差点までまっすぐ1本道が続いていて、駅とファミレスは、交差点を右に曲がって4つ目の信号のところにある。

風に流され、テユのチェックのストールと、塚本の花柄ワンピースはふわふわと揺れた。

塚本は幸せを感じ、「なんかいいよね、こういうの」と呟くが、テユの耳には届かない。

「塚本お前、そんなにくっつくな！」

テユはイライラしながら大声で叫ぶ。

塚本はテユの背中にぴったりとくっつき、その巨大な胸を押し当てている。

「いいじゃん。サービスだよー」

風に髪をなびかせながら言う。

(……うざい)

テユは呆れて、地面につばを吐き捨てた。

「ねえ、テユ君。先輩なんか追いかけるのやめて、私にしときなよー」

塚本は、テユに抱きつく手を強めて言った。

女のわりに、毛深い手……。

「お断り。っつーか、しつこい。お前は対象外！」

「いいもん、がんばるもん！」

テユは腰に巻き付く塚本の毛深い手を改めて見て、げっそりとした。

塚本は、テユに会う度交際を迫ってくるのだ。

二人は、「付き合って?」「絶対イヤだね」「じゃあとりあえず

「ご飯行こ？」 「ムリ」 「映画は？」 「見たくない」と言い合いながら1本道をひた走る。

そして猿田毘古サルタヒコの待つ『緑が丘交差点』に近づいていくのだった。

0016＊ まちぼうけ

「まだなのか？ 一体いつ来るといふのだ……」

緑が丘交差点にて、忍耐強く『あと1人』を待つ猿田毘古サルタヒコは、それはそれとても退屈していた。

現在彼は自らの身体を発光させているのだが、それには深いわけがある。

当然の事だが、一般車両には緑が丘交差点は確認できない。

ニニギ 邇邇芸ニニギの命みことの独断と偏見で選ばれた者にだけ、交差点はその姿を現すのである。

したがって行き交う車は、緑が丘交差点の手前にいるサルタヒコの姿のみを確認することができた。

ただし、ガードレールが続く長い一本道に、唐突にポツンとたたずんでいるように、である。

「ワア、天狗だー」

「……何あれ？」

「今日はお祭りなのかなあ」

彼を目撃した人は、口々にそのような事を言う。

……無理もない。彼は天狗の面をかぶり、古風な装束を着込んでいるのだから。

挙げ句の果てに、わざわざ車から降りてきて、「私達と一緒に、写真いいですかあ？」と言う者さえいる。

「はいチーズ」

の声とともに、ポーズをとった人間達と写真に写ってしまったサルタヒコは、たいそうニニギに対して腹を立てていた。

「くう、この仕打……断固抗議に値するぞ」

神は人に崇められ讃えられて然るべき。

見世物と化しているサルタヒコは、もう我慢の限界となっていた。
(なぜこのくだらぬ役目が、拙者である必要があるのだ!)

怒りとともに、その体は徐々に光が満ちてくる。

本来、天照大御神以前に伊勢で信仰されていた太陽神である彼は、
アマテラスオオミカミ
感情が高ぶると知らぬうちに輝いてしまう。

——勿論自らの意思でも発光できるのだが。

しかし、結果として光る事は、サルタヒコにとって好都合なこととなる。

なぜなら本日は雲一つない快晴……。

太陽光が降り注ぐ中、光は回りの景色になじみ、その姿をうまく包み込む。

まさに絶好の隠れ蓑みのであった。

サルタヒコはもう、見世物にならずに済んだのである。

「……しかし、疲れる……」

しばらくして、サルタヒコの感情も落ち着いた頃。

彼は、いや、彼等はやって来た。

大型のハーレーダビッドソンはぐんぐんと近づいてくる。

視力が異様にいいサルタヒコは、すでにユン・テユと塚本の姿をとらえていた。

「やっと来たか。待ちくたびれたぞ」

そしてまずテユをまじまじと見る。

ヘルメットとゴーグルを装着しているものの、一目でかなりの美

形であることが確認できる。

「フン。ニニギ殿は相変わらぬの美形好きと見えるな」

そして後ろに座する者……

先刻、ニニギの告げた言葉を思う。

【これより来る者の、後ろに座する醜女しうめを落とせ】

サルタヒコは、「ククク」と笑う。

「これは酷い。石長比売イワナガヒメに瓜二つではないか。クククク」

手に持つ錫杖しゃくじょうをシャラリと鳴らし、サルタヒコはにんまりと微笑んだ。

「さてさて始めるか。このようなくだらぬ仕事、素早く終わらすにかぎる」

0017* そしてハーレーダビッドソンは行く

キラリ……光が見える。

テユは眩しくて、一瞬前方から目を反らせた。

大きな鏡でイタズラされているんじゃないかと思うくらい、光は強烈に反射している。

少しうつむき加減で右へ曲がるウインカーを出し、徐々にスピードを落としていく。

加速していても、うまく曲がれないからである。

——右折。

いつもの曲がり慣れた交差点。……そう、白山交差点……。

テユはそう信じて疑わない。

「え？　ちよっとお、何で右に曲がるのよ!？」

塚本が、目を見開きながら大声で言う。

テユは「……んだよ、うぜえな」と小声で言っ、そして続ける。

「何でって、いつもここで曲がってるだろ?」

塚本は焦る。

右側に見えるもの。それはただ延々と続く白いガードレールのみ。不気味にも、テユはウインカーをチカチカと出し続けている。

「何言ってるの!？　やめてっ、ガードレールにぶつかっちゃうじゃない!!」

「……は?」

あまりにも塚本が大きく叫ぶので、テユは思わずバイクを路肩に

寄せて止めた。

そして怪訝そうに振り向き、

「なんだよお前。頭おかしいんじゃないね？」

と言うが、逆に、

「テユ君のほうが絶対頭おかしいよ！ 何考えてんのよ、ガードレール見えないの！？」

とすごい剣幕で言われてしまう。

彼女が冗談を言っているようには見えず、テユはゆっくりと前に向き直り、見慣れた交差点を改めて確認してみた。

見えるのは、青く点灯する信号。

車は通らず、ガランとしている。

（……ガードレールだと？ そんなの、ないじゃないか。頭おかしいのはてめえのほうだろ）

「……ん？」

そして、気付く。

信号機の標識は、白山ではなく『緑が丘』である事に……。

「緑が丘？？」

テユは 구글 をグイと押し上げ、もう一度よく確認してみる。

——しかし、やっぱり緑が丘であった。

「なんだ？ ……町名が変わったのか？」

「……（町名？ 何を言ってるの？）」

後ろに座る塚本は、テユの言葉を不思議に思う。

そして突然、

「きゃあああああああ!!」
と耳をつんざく悲鳴をあげた。

あまりに大きな塚本の叫び声に、テユの鼓膜は圧迫される。

「なんだよ、お前、ふざけんな!」

耳を押さえながら、声を荒げて後ろへ振り向く。

「!!」

そこには——奇怪な者が……。

赤い鬼のような面をかぶり、身につけるのは白装束。

頭に多角形の頭巾とぎんを乗せて、腰まで届く長い白髪。

その者はいつのまに、どこから現れたというのか——。

横から塚本をぐっと押し出し、バイクから突き落とそうとしている。

それに対し塚本は、決して落ちまいと必死の形相。

……もはや、人間離れしている。

テユは呆気にとられ、しばらく絶句してしまう。

「な……なまはげ!?!」

テユの眼前で、なまはげもとい猿田毘古サルタヒコは、「チッ、気づかれた

か」と口惜しそうに呟いた。

「そりゃ、気づくでしょ」

何言ってるのこイツ風に、テユは呆れて淡々と言う。

「アンタちよっと、何すんのよ——!!」

塚本はそれはそれは激怒している。

顔をカッカと真っ赤にし、面がなくとも赤鬼のようである。

そして——。

バシン！！

……力一杯サルタヒコの頬（面）をぶっ叩く。

金箔をあしらった見事な紅面は、「ミシッ」という音とともに、豪快に亀裂が走っていく。

「くっ、この醜女！^{ししめ} ふざけおって！！」

激高した彼は、左手の人差し指を立て、右手でその指をにぎりしめる。

それは智拳印^{ちけんいん}と呼ばれる、大日如来の印相^{いんそう}に似ていた。

「きゃあ！」

突如発生した強烈な光とともに、塚本は対向車線まで吹き飛ばされ、ドシンと落ちた。

テユはその一部始終を、ただ目を丸くし、呆然と見続ける。

（う、うそだろ。何だよ今の……）

サルタヒコは片足でトンと地面を蹴り、軽々と宙に舞う。

そしてテユの後ろへ——すなわちハーレーの後部にストンと跨^{しゃくし}がると、錫杖^{しゃくじょう}を用いて彼を羽交い締めにした。

「な、何する……」

ドルッ……ドルッ……ドルッ……

突然ハーレーは、エンジン音と共に発車する。

「う、うそだろ！？」

誰もハンドルには触れていない。

誰も何も操作していない。

青ざめながら、テュは金縛りにあったように動けなくなる。

動くのは、グレイがかった目だけであった。

必死に後ろへ振り向こうとする。

「な……!?!」

しかし、動かない。

冷汗が徐々に額をつたい、やがて頬へと流れていく。

そうしてテュとサルタヒコを乗せたハーレーダビッドソンは、ゆっくりと緑が丘交差点を右折していった。

「テュ君！ テュ君ー!!」

塚本は叫びながら追いかけるが、全く追いつくことはできない。

彼女の目には、バイクがガードレールに吸い込まれていくように映っている。

そしてその後、こつ然と消えたのである。

「テュ君ー!!」

後には塚本の声が、虚しく響き渡るだけであった。

0018＊ 迫り来る危険なもの

「おかしいなあ……」

タクシー運転手の佐伯は腕を組み、じっと交差点付近を見つめている。

大鳥居を背に、黄色のビートルとタクシー、ワンボックスカーのそのまた向こう。

信号は青く点灯しているが、やがて黄色になり、そして赤へと変化する。

その後、後ろへ振り向いて、大鳥居の向こう側に続く車道を見つめた。

「……やっぱり変だ」

「どうしたんですか？」

青年医師、勝浦俊太郎は、“マッツアー”こと松原真之介の額に包帯を巻き付けながら、佐伯を見る。

そして処置が終わると、中腰からスクッと起立し、彼の方に歩いていった。

近づいてくる俊太郎に対して佐伯は、

「さっきから車が一台も通らないんですよ。いつもは車通りが激しいのに……。僕らのように車が故障していたとしても、人すらいなのは変ですよ。どの家も、呼鈴鳴らしても反応ないし……」

佐伯はずっと、電話を借りる為に付近の住宅をまわっていたのである。

「そういえば……」

俊太郎は記憶をたどるが、行き交う車は見えていない。

そしてぐると辺りを見渡すと、街は閑散として見えた。

民家や店はあるけれど、人の出入りはなく、歩行者の姿もない。生活音も全くしない。

——まるで、すべてが眠っているかのよう。

「たしかに……車が通らないですね。街の様子も変だ」

日中に車や人の姿が途切れるなど、駅が近いその街では、普段決してありえないこと——。

「とよちゃん、逃げよう」

タクシーの中、後部座席に座る男は、突然ぼつりとそう言った。

「えー、逃げちゃうのー？」

とよは冗談だと思い、笑いながら首をかしげるが、隣の男の顔を見たとなん、

「ミドリ、だいじょうぶ!? 具合悪いの？」

と、驚きの声をあげた。

彼の顔は青ざめ、額やこめかみからは汗が玉となってじわりと浮き出している。

とよはその額に触れ、熱があるか確認するが、同時に彼が小刻みに震えている事を知る。

「熱はないけど……どうしたの? 何があつたの?」

目を潤ませながら、ミドリの顔を覗き込む。

「ここは危険だから、早く逃げよう」

ミドリは急いそう言うのと、とよの手を取り、後部座席のドアを思いきりバタンと開けた。

そして振り向き、「とよちゃん、急いで!」とその手を思いつきり自分のほうへ引き寄せていく。

「きゃっ」

あまりに力が強いので、とよはペタリと座席に転がってしまう。

ミドリは上から抱え込むように、とよの体を持ち上げて、外へと急いで引きずり出した。

「ごめんね。でもすごく嫌な感じがするんだ。……なにかが、来る」

0019＊ 準備・オツケー

信号は、赤から青へと変化した。

しかし相変わらず車はおらず、交差点は真夜中のようにガラんとしており、ひたすら静寂を保っている。

佐伯はそれを確認すると同時に、ふとタクシーから出る二人の乗客の姿を見た。

（わ、お客じゃん。やべー俺っち、待たせすぎちゃった？）

「僕、ちよつと行ってきました！」

そう俊太郎に声をかけると、急いで『お客』のもとへと走りだす。

「あつれー、鉄二さん？」

途中声をかけられて、ふと立ち止まるとそこには高校時代の後輩の姿。

ギリシャ彫刻のような外国人と肩を並べて立っている。

「にしても、ダサイ服っすね。ハハハ、似合わねえー」

佐伯に向って指をさし、目を細めて笑っている。

「うるせー真人。これは会社の制服だっつの。急いであるから……後でな！」

と手を振って、再びタクシー目指して駆けていく。

「お客さん——」

「運転手さん！ いい所に。逃げましょう！」

佐伯が声をかけると同時に、ミドリも佐伯に声をかける。

「……へ？（逃げる？）」

思わぬ乗客の言葉に、佐伯は目をぱちくりとさせた。

そして、彼らの変化に気づく。

ふわふわと甘い印象だったのに、スタイリッシュな男は青ざめているし、人形のように愛らしい女は、顔をひきつらせている。

これはただ事じゃないなと思い、「お客さん、どうしたんですか？」と佐伯は訝し気に聞いた。

「ここは、危険なんです。とりあえず向こうに戻りましょう!」

ミドリは交差点のほうを指差した。

青信号の交差点。

……ドルルルッ……ドルッ……

エンジン音が辺りに響く。

ミドリは目を見開き、「まずい!」とひと言のみ告げる。

(な、何が?) と思いつつ、佐伯は緊張で顔をこわばらせ、エンジン音のする方向、すなわち交差点を凝視した。

——そして、ゆっくりと黒塗りのハーレーダビッドソンは右折してくる。

「!!」

佐伯は息をのむ。

それはまさに、悪夢であった。

なぜなら目撃したそれは、有り得ない光景であったから。

天狗が銀の棒を用い、若い男を押さえつけている。

しかもハーレーは誰も操作していないのに、ひとりで勝手に動いていく。

やがてバイクは通りすぎ、ただ呆然と、その後ろ姿を見送った。

「運転手さん、早く! 閉じてしまう!!」

ミドリはとよの手を引いて、交差点へと走り出す。

「えっ?」

訳も分からぬまま、佐伯は交互にハーレーとミドリとを見た。

ミドリの言動にピクリと反応した天狗面の男は、ゆっくりと振り返り、

「するどい。……人にも見える者があるとはな。実に興味深い事」と満足そうに言い、それから「だが見逃すわけにはいかぬ」と付け足した。

そして両手を天空に向って広げ、自らを激しい光で包んでいく。

「^{ニニギ}邇邇芸殿、全ては整った!! 導かれたし!」

天狗面の男——^{サルタヒコ}猿田毘古は、ハーレーに乗りながら大声で叫んだ。

0020＊ 猫睛石の瞳

低く渋いダミ声は、霧の世界に大きく轟き、こだましている。
相変わらず濃霧が覆い続けている、白い世界。

ニギの神は崖の淵に立ち、事の成りゆきを観察していたのだが、
邇邇芸の命だけは、大層あきれ顔であった。

「あはっ、ニニギったら頼りにされちゃっテー。うらやましいネ。
良かったネ！」

兎面を着けた夜尊は、ぴょんぴょんと跳びはねながら言う。
愉快なのか喜んでいいのか、途中くると宙返りしたりなんかも
する。

「……しかし、何たる失態。ご覧下さい、面がぶざまに割れており
ます」

と、ニニギはため息をつきながら、絹褌を整えて、胡座をかいてそ
の場に座る。

そして一度深呼吸をすると、それぞれ手を結んだ状態で、胸の前
で両手を合わせた。

目を閉じ、何かをブツブツと呟く。

それは地上で失われてしまった『言霊』。――呪力が宿った原始
の言葉。

しだいに彼のこめかみに、ぷくりと太い血管が浮きあがる。

金糸と青糸で彩られた上衣はハタハタと揺らめいて、鬢の後ろに
垂れる長い髪は、上へ向ってフワフワとそよいでいく。

同時に、隣ではしゃぐ夜尊の黒いマントも、風に乗って膨らんだ。

「うーん。それじゃ、ニニギ。がんばっテ」

そう言うと、軽く手を上げ、夜尊は跳ねながら去っていく。

「……夜尊、どちらへ行かれるのですか……？」

ニニギは合わせた手を徐々に前に突き出しながら言う。

その手は力を込めている為小刻に震えていて、あらわになっている腕の血管は、すべてがこめかみと同じく膨らんでいる。

「夜尊！ どちらへ？」

もう一度、振り向かず^{ぎっしや}に問う。

夜尊は、乗車していた牛車とは、別方向に向っている。

ニニギは聞き耳を立てるが、返ってくる言葉はなかった。

長い耳と黒いマントをひるがえし、悠々と大きくジャンプして、その姿は白い霧になじんでいく。

——そして、消えた。

「……しょうがないお方だな。これではお祖母様も手を焼いて当然だ。……先が思いやられる」

ニニギは再び大きく息を吸い、吐くと同時に結んだ手をぱっと開く。

手の平からは、うなりを上げて強烈な竜巻きが。

そして瞳は漆黒から金色へ。

その目はキャッツアイ——すなわち針状に並んだインクルージョンをもつ猫睛石^{びようせいせき}のようになっていた。

やがて、^{あしはらのなかつくに}葦原中国からは、様々な悲鳴が届きはじめる。

0021＊ 開門！！

「閉じた……」

ミドリの言葉に、とよは思わず「え？」と顔を上げて問う。

彼には絶望感が漂っていて、まるで追い詰められた獲物のよう。

普段とは違う恋人の様子に、ただ悲しくて、とよの目からは涙がひと粒こぼれ落ちた。

ミドリは黙って手を上げて、空中を思いっきり叩く仕草をする。

——ドン！

何かにぶつかり、音が鳴る。

とよは信じられないといった表情で、「なんで？」と弱々しく言った。

……そこには何もないはずなのに、見えない壁が存在する。

ここより一歩も『向こう側』へは踏み出すことはできないのだ。

ミドリはとよと離れないように、彼女を強く抱きしめた。

やがて二人の頭上にある銀杏いちようから、木の葉が一枚舞い落ちて、風に流され大鳥居のほうへと飛んでいく……。

まず一番初めに悲鳴を上げたのは、栗色の巻き毛のアイドル、室生リオ。

彼女はハーレーを操る猿田サルタヒコ毘古を目撃した時点で、そばで手当てをしてくれていた医学生いしやうの神川 智に巻き付き、「キャー」と叫んでいたのだが、

「キャー……！！ 助けてーっ！！」

と、より一層大きな声で、これより叫ぶこととなる。

それは大鳥居に向かって吹きすさぶ、不可解な突風が原因であった。

リオの髪は鳥居に向って流れ、また、花柄のワンピースも、手に持つシヨルダーバッグも同様に、宙に浮いて激しく揺れはじめている。

「た、助けて、吸い込まれちゃうっ!」

次第にリオの足も宙に浮き、クリスチャン・ルブタンのパンプスは、脱げて大鳥居へと吸い込まれていく。

「キャーキャー!!」

リオは叫び続ける。

リオのマネージャーのマッツは、あわてて彼女の体を押さえようと、走っていくが、

「わあキャー!!」

という悲鳴とともに、大鳥居に向って回転し、そして自分自身が飲み込まれていった。

「俊君、俊君っ!」

智は電信柱に手を伸ばし、やっとの事で掴みながら、彼の従兄弟の名前を呼んだ。

しかし、どこにも俊太郎の姿はない。

次第に智の体も浮いて、リオの重みと自分の重み、そして暴風に耐えきれず、手は虚しく電信柱を離れてしまう。

彼らの悲鳴もまた、大きく辺りにこだました。

立ち話をしていた坂下真人とアーサー・ギース・ギャロットも、

同様に大鳥居に吸い込まれようとしていた。

「上体を低くするんだ! 僕の真似をして!」

アーサーに言われた通り、真人は地面へ這いつくばる。

「な、何だっつんだよ、この風……………わあ!」

真人がふわりと浮いた時、アーサーは彼の手をとっさに掴み、助けようとしたのだが、奮闘虚しく前方から飛んできた『駐車禁止』の看板にぶつかって、やがて二人一緒に大鳥居へと消えてしまう。

「うぬぬぬぬ」

この時、邇邇ニニギ芸による風に一番耐えぬいていたのは、タクシー運転手である佐伯鉄二であった。

彼は現在、開け放たれたタクシーのドアに掴まり、ぶらぶらと大鳥居に向って足をバタつかせている。

悪夢のような出来事に、彼は必死の形相であった。――いや、この場に居合わせている12人すべての顔がそうだったであろう。

途中、ミドリととよが前方から飛んできて、彼らを助けようと手を伸ばしたのだが、寸での所で届かなかった。

「お客さーん！！」

叫びも虚しく、二人は抱き合いながら小さくなっていく。

助けられなかった悔しさに、目からは涙がじわりとあふれた。

上体すべてを使って息をしながら、佐伯は必死にこらえている。

体力の限界はもうすぐそこにあった。

「ほう……御主やるな」

「ぐっ」

サルタヒコは腕を組みながらハーレーの上に立ち、佐伯のほうをじっと見ている。

どういう訳か、サルタヒコの長い白髪も身につける麻の法衣も、風になびいてはおらず、ストンと地面に向って落ちている。

テユも同様、強風を感じさせる姿ではない。

バイクの上は、風の影響がないようであった。

「少年はそろそろ行け」

ボソリとつぶやくと、サルタヒコはテユの背中をトンと押す。

その瞬間、テユの金縛りが消え、体の自由がきくようになる。

「てめえ……！」

怒りを剥き出しにしてサルタヒコに近づこうとするが、テユの体

も皆と同様に風に流され、叫び声とともに大鳥居に向って消えていった。

「さてさて、とうとう一人になってしまったの。大人しく行くが良
い」

サルタヒコは笑っているかのように、肩を上下に動かした。

そして錫杖しゃくじょうをシャラリと鳴らし、それを佐伯の方へ一直線に指し示す。

「う……るせ。白髪ジジイ」

「ジジイだと？ 拙者はたしかに何千年も生きておる。神の寿命は人に比べて長きもの」

佐伯の指は、汗にまみれてずるりと滑る。

「く、くそっ」

そして手はドアを離れ、佐伯の体は宙に浮いた。

「うわあああああ」

こうして佐伯もまた、大鳥居に吸い込まれてしまったのである。

風は、止んだ。

一体どのくらいの時間が経過したのであろうか。

黄色のビートルの車内では、坂下真朝がうずくまり、ただひたすら恐怖に涙してカタカタと震えていた。

両耳に当てた手は小刻みに揺れ、涙を拭おうにもうまくいかず、

「……夢よ。夢だわ……夢に決まってる」

と呟きながら、白いワンピースの袖で目頭を押さえつけた。

彼女は首を振り、必死に目の当たりにした光景を否定し続けている。

すべてが現実離れしすぎていて、まさに幻のような出来事だった。皆、消えてしまった……。

——その時、突然携帯電話は鳴る。

彼女は驚き、ビクンと上体を動かした。

震える手でおそろおそろ二つ折りの携帯を開けてみる。

その画面を見た瞬間、彼女は「キャッ!」と小さく悲鳴を上げて、

電話を足元に叩きつけ、

「もう、嫌だっ!」

と声を上げらせて叫んだ。

表示は『圏外』

発信元は『15151515151515』

——12桁。

震える手で両耳をしっかりと押さえるが、着信音は鳴りやむ気配はない。

延々と鳴り続けている。

「な、何だっていうの……止めて、止めてっ……！」

耳を強く押さええていても、不気味な音は鮮明に脳内を駆け巡ったまま。

頭の中では、映画のように映写機が、1515151515151515という数字を上映し続けている。

（神様、助けて!!）

……………

携帯は、おそらく100回近くは鳴り続けただろう。――しかし、未だに鳴り止まない。

真朝の恐怖はどんどんエスカレートして、齒はカチカチと音を立てた。

暑くもないのに汗はどんどんしたたって、服に水滴となって落ちていく。

「う、う、う」

やがて観念したのか、手探りで携帯を探しはじめる。

指先は物体を捉え、震えながら足元から拾い上げると、

「……も、もし、もしも……し」

と呟くように電話に出た。あまりうまくしゃべれない。

「あゝ、やっと出タ。キミ、出なさすぎだヨ。ボクもうちょっとで怒るところだったんだからネ。……ボクが怒ると、怖いんだヨ？

どうなっても知らないヨ！」

特徴のある籠った声。

男なのか女なのか、大人なのか子供なのか、全く見当がつかない。

「だ……誰？ 誰なの？」

「ボク？ ボクの名前はネー。……うーん、困った。だってボクにはたくさん名前があるんだもノ。どれを名乗ろうかな？ うんとかわいいやつがいいよネ。……っていうか、キミ、車から出てきてくれル？ 10秒待つかラ」

真朝は引きつり、とっさに中腰になって、車内からキョロキョロと電話相手を探してみる。

見えるのは、ゴーストタウンを思わせる街並み、主のいなくなつたタクシー、ワンボックス、ハーレー、プリウス、そして大鳥居に激突しているオデッセイ。

それらしき者は見あたらない。

「ど、どこにいるのよ？」

「おしえない。早く出テ」

真朝は迷う。出て危険じゃないのか？ でも、真人を探さなければ。でも、どうしたら？ と。

「じゃあ数えるネ。ひとつ、ふたつ、みつつ……」

電話の向こうでは、無情にもカウントが始まった。

0023＊ カウントの譚

「ななーっ」

カウントは、歌のように独特な節がつけられている。

——そう、古くから伝わる土着の童謡を思わせるもの。

それが頭の中に無感情な声として響いてきて、より一層得体の知れぬ不気味さを醸し出す。

真朝は運転席で自分自身を抱き締めるように縮こまり、苦悶するが、多大なストレスにより、ふつりと何を考えていいのか分からなくなってしまう。

「……やあーっ。………ねえ、キミもしかして出てこないつもりなの？」

「……………」

答えようと、口は動くが声は出ない。

と、いつても、彼女自身何と答えたのか、答えようとしたのか、混乱していて分からなかった。

「ボクが『とお』って言っちゃったら……キミ、死ぬかもしれないけど、いいノ？」

「……………死ぬ？」

突然意識は、『いやだ、死にたくない!!』という気持ちに支配される。

その顔は、まさに蒼白。

真朝は素早くドアを開けようとした。

——が、開かない。

再び、ドアのインナーハンドルをガチャガチャと引っぱるが、や

はり無理であった。

（イヤッ！！ 何で開かないのよ！？）

さらに涙が溢れ、視界はぼやけていく。

手を結び、ドンドンと力一杯窓を叩いた。

「……ここのつ……」

「イヤーーーーッ！！」

あまりの恐怖に、真朝はありったけの力を振り絞り、悲鳴をあげる。

「……ねえ、どうでもいいけどそのドア、ロックかかっているヨ？
落ちついテ」

「っ！？」

相手が言うように、しっかりとドアにロックがかかっていた。

真朝は震える手でロックを外し、ドアを開け、勢い良く外へと傾れ込んでいく。

転ぶ事を覚悟していたのだが、思いもよらず、とっさに体をふわりと受け止める腕。

「……？」

視界には黒いビロードのマントがあった。そしてマントから覗く銀色の靴。

靴はガラスのようでもあり、プラチナのようでもあり、朝露のようでもあり、そして、夜に煌めく星のようでもあり……。

この世のものとは思えない、なんともいえない透明感と輝きを放っている。

そしてゆっくりと顔を上げると、目に映るのは、怪し気な兎面に覆われた顔。

「……………ちょっと、どこ触ってんのよ」

兎の手は、真朝の胸と腰の部分にあり、彼女の体を支え続けている。

「えっと、コレはアクシデントだね。だってボク、君にさわる予定はなかったんだもノ」

「だったら放しなさいよ」

直後、手はパッと放され、真朝はバランスをくずして地面に倒れ込んでしまう。

「痛っ」

コンクリートは思ったよりも固く、膝に鈍痛が伝わってくる。

「キミ、ちょっとそこで待っててネ。あと1人いるから行ってくる」

兎はそう言い残し、ぴょんぴょん飛び跳ねながら、前方にあるトヨタ・ハイエースに向かって行った。

0024＊ 水晶はかく語りき

「二人、足りない」

蠟燭ろうそくがゆらゆらと揺れ、闇の中、辺りをぼんやりと浮き上がらせている。

時折灯りは意図的に左右に揺らぎ、その場にいる者を一人づつゆっくりと照らし出していく。

皆、冬眠しているかのように横たわり、目を固く閉じ、その顔は血の気がなく、まさに蠟人形ろうにぎのようであった。

「……八、九、十。……やはり足りない」

「どうなされました？ 邇邇芸殿ニニギ」

ニニギは手に朧銀ろうぎんの燭台を持ち、声の方へと流れるように歩いていく。

やがて前方に影を確認すると、その歩みをはたりと止めた。

「猿田毘古サルタヒコ、二名足りません。きつとまだあの場に留まっているのでしょうか。しかし門はすでに閉じてしまい、再び開けるには時間がかかります。急ぎ葦原中国あしはらのなかつくにに戻り、連れて来てもらえませんか？」

朧げに浮かぶ、サルタヒコの亀裂の入った天狗面。

「御意」と一言だけ告げて、踵を返し去っていく。

「ああ、それから……」

と呼び止め、ニニギは続ける。

「まだ未確認なのですが、根堅州國ねのかたすくにの者が黄泉平坂よもつひらさかに向ったという報告がありました。まだあの辺りは大丈夫だとは思いますが、くれぐれも心して下さい」

サルタヒコは振り向くと、こくりと頷き、やがて闇に消えて行っ

た。

「これ程までに奴の動きが早いとは。……うかうかとしていられないな」

そう呟くと、ニニギは右の手の平を、ため息まじりに覗き込む。その手には、いつ現れたのか、艶やかな水晶玉が煌めきながら乗っている。

——『ニニギ、首尾はどうなのです』

水晶からは、雅楽のように趣のある声が鳴る。それでいて、儚い鈴の音のような……。

声と同時にそこに写る、神々しく輝く女の姿。

あまりに光が強いので、その素顔を直視することはできない。

ニニギは眩しさに目を細め、

「お祖母様、未だ準備段階です。しばし、お待ち頂きますよう……」
と丁重に告げ、頭を下げた。

——『して、あの者は？』

「それが、ただいま行方が分かりません。是より搜索致します」

——『頼みましたよ。くれぐれも彼奴に会わせてはなりません』

光は徐々に薄くなり、やがて女の姿もふつりと消える。

同時に右手の水晶玉も、煙のようにかき消えた。

「………よるのみい夜尊……不憫なお方だな。知れば、どう動かれるのだろう」

ニニギは眉を歪ませて、静かに虚空を見つめ続けた。

0025* 砂漠に浮かぶ月

真朝は見ている。

まだ恐怖は抜けきっておらず、上体は起こしているが、力なくその場に座りこんだまま。

その視線は、存在全てが胡散臭い『兎』に注がれていて、ずっと姿を追いつけている。

兎はハイエースのドアを二回ノックし、「失礼するネ」と言いながら、ガチャリと開けて、中の人と何やら話す。

しばらくして、キャリアウーマン風のスーツの女を外へ連れ出すと、彼女に肩を貸し、ゆっくりと真朝の元に歩いてきた。

スーツの女は、とても顔色が悪い。貧血を思わせる土色である。

大粒の汗を額に浮かべ、目は焦点があっておらず、ただひたすらうなだれている。

「お待たせ。キミはカノジョのように腰が抜けてないでしょう？
自分で歩けるよね？」

「あ……………歩けるけど……………電車で遅れるわ……………行かなくちゃ」
そう言いながらフラフラと立ち、真朝は黄色のビートルへと戻ろうとする。

「うーん、電車に乗れないのは、さすがにキミも分かるよね？」

「それでも私はフランスに行かなくちゃ。……………も、もう手続きだつてしてあるし」

兎は「ちょっと座ってテ」と、女を地べたに座らせると、

「めんどうだから、キミがどういう世界にいるか、見せてあげるヨ」と、真朝に顔をぐいと近付けながら言う。

「え……………？」

真朝はじつと兎面の者を見る。

ヘナヘナと座り込んでいる、スーツの女——浅田ミチルも兎を見た。

「砂埃がすごいと思うから、目を閉じてたほうがいいと思うヨ」

そう告げると、ぴよんと飛び跳ね、後ずさりし、もぞもぞとマン
トの中で手を動かした。

やがて手を出すと、左手には見事な彩絵^{さいえひ}檜扇^{ひおうぎ}が。

上から下に腕を下ろすと、艶やかにザッと扇は華開く。

描かれるのは、見事な緑の松、朱赤の楓、下方にススキ。——絵
には金銀箔がふんだんに散らされていて、キラキラと太陽を反射し、
より一層雅びやかに目に映る。

さらに右手の中指をたてると、それに人指し指の先をのせ、帝釈
天印に似た印^{いん}を結んだ。

そのまま左足を前に上げると、舞を舞うようにくると三度優雅
に回る。

「!？」

突然ゴオゴオと突風が吹き荒れて、砂塵が鋭く巻き上がり、視界
をすべて奪っていく。

真朝とミチルは目を固く閉じ、状態を低くしながら身を守った。

次第に風も弱まってきて、

「もういいヨ」

と兎は言った。そして続ける。

「目を開けてごらん。これがボクらのいる世界だヨ」

二人は息を飲む。

「……う……うそでしょ……」

足元には砂。……もう、そこにはコンクリートはない。

周囲は砂の織りなす世界。影を作る建物群は、そこにはない。

——砂漠。

地平線の遥か向こうまで、延々と四方に広がっている。

その中に、ぽつんとある数台の車。バイク。——そして大鳥居。

それ以外はすべて砂。

ミチルはショックで意識が遠くなり、その場にドサリと倒れ込んだ。

一方、真朝は、

「うそよ！ 何の冗談よっ！ こんな、絶対うそに決まってる！
！」

大声を上げながら、兎の元によろろと走っていく。

しかし、砂に足をとられて豪快に転んでしまう。

「うそじゃない、本当だよ。今までののはすべて幻サ。キミらは『交差点』を曲った時から、ずっとココにいたんだヨ」

「イヤーーーーーッ！！」

真朝は頭を抱えながら、泣き叫ぶ。

顔はもう砂でぐちゃぐちゃで、でもそんなものは彼女にとってどうでもよかった。

もう、それどころではない。

「なんでこうなっちゃうの？ なんでこうなっちゃったのよ！！
真人、どこなの、どこにいるのよっ！！」

目からはボロボロと涙がこぼれ落ち、頬をつたって顎から滴り落ちていく。

砂は薄い色から濃い色へと、ポタポタと変色した。

兎はかがんで真朝の肩に触れると、兎面をぐいと押し上げた。

——夜空に浮かぶ、満月のような印象的な瞳。

「ねえ、泣かないで……」

今までとは違う、やさしい、やさしい声。

真朝の頬を両手で包むと、兎は目を閉じ、その唇にキスをした。

0026＊ 知りたい？ 知りたい！

「……!？」

狼狽した真朝は、ひどく顔を歪ませて、兎を振払おうとする。

しかしその手はかすりもせず、虚しく空を切っただけ。

兎はぴょんと空高く飛び跳ね、ふわりと足音立てずに着地した。

その時、砂煙さえ巻き上がらない。

顔はすでに兎面で包まれ、あれは幻だったのかと錯角しそうになるほどである。

「ほら、見テ。この砂漠、模様があるのでシヨ？ ……風紋っていうんだけど、ボク、これ好きなんだ」

たしかに砂漠には風が織りなす模様がついている。

それは波うち、砂に陰影をもたらしていて、……たしかに美しい自然美だ。

けれど、真朝にはそのようなもの、今は関係なかった。

「なんでキスすんのよ？」

座り込んだままで言う。

その目は兎を見据えたまま。

兎はぴょんぴょんと飛び跳ねていたのだが、ふいに止まり、真朝の前にちよこんと座った。

「だって、キミ、泣いていたでしょう？」

「……泣くわよ。この状況、誰だって泣きたいわよ。まだ泣き足りないくらいよ！」

「キスはね、女の子の涙を止めるにはいい方法だと、ニギ邇邇芸が教えてくれたんだ。……だからほら、もう涙は止まっているでしょう？」

真朝は目頭を手で押さえてみるが、なるほど、新たな涙はもう出ていない。

普段の彼女なら、そんな事言われようものなら怒りはどんどんエスカレートしていくのだが、ふざけるなとか、そんな激昂する気分にはなりそうもなく、彼女自身、なぜだろうと不思議に思う。

納得がいくような、それでもやっぱり納得がいかないような、そんなあやふやな気持ちが沸々と湧いてきて、口を真一文字に結び、むっつりと黙り込んでしまった。

「ねえ、イヤだツタ？」

兎面は首を傾げた。

眉間と目の部分に埋め込まれている宝石が、太陽を受けて煌めき、むき出しの細いキバは、水晶のように不気味に透き通って、これもまたピカリと光を反射している。

顔をしかめながら、なんでこんな変な面をつけているんだろうと、真朝は思った。

涙で歪んでよく見えなかったが、兎の瞳は、それはそれは美しいかったのだ。

「……別に、イヤっていうか……でも、突然しないで。ほんと慣れてないのよ、こういうの」

「はい」

兎は素直に手を上げて、再び落ち着きなくぴょんと飛ぶ。

真朝はゆっくりと立ち、砂を払うと、兎の後を追っていく。

「ねえ、それより何でこんな事になっちゃったのか説明してくれない？ 私の兄やそのほかみんな……どこにいるか知ってる？」

「そうだなあ、ボクのお家に案内するヨ。キミはそこで、全てを知ることができると思うんだ」

0027* よろしくね、マアサ

「あんたの家？　そこに真人がいるの？」

「たぶんネ」

真朝の頭は軽く、いや、かなり混乱していた。

現実を未だ受け入れる事が出来ず、否定を繰り返し、ただぶんぶんと首を振る。

「ねえ、キミの名前ハ？　教えテ」

兎は真朝の隣にぴたりと立ち、その手に触れるときゅつと握った。砂漠には、手をつないでいる二人の影――。

彼女は握られた手を一瞥し、「真朝」と素直に短く答えた。

「よろしくね、マアサ。……じゃあ、行こう！」

兎は突然、真朝と手をつないだまま、大きく弧を描いて飛び跳ねた。

「えっ、ちょっ、なにす……………きゃああああ！」

眼前には青空が広がり、眼下には流れるように波うつ砂丘。

真朝の厚めのバングスヘアは後ろに流れ、おでこは全開。ワンピースも見事に膨れて、レースのペチコートは丸見えとなる。

「おーろーしーてー！」

着地の瞬間、真朝はへなへなと倒れそうになり、兎に腰を支えられた。

「あつれー、怖かった？　ごめんネ」

その飄々とした声に無性に腹が立ち、彼女はイライラと声を張り上げる。

「あのね、なにが『あつれゝ、怖かつた?』よ! 怖いに決まってるじゃない!! っていうか突然何しでかしちゃってんのよ。びっくりするじゃない!!」

その声は広々とした砂漠にこだまして、真朝は自分の声に驚くはめになった。

「ねえ、マアサ」

兎はぐいぐい真朝の手を引っばる。そして、

「キスしよう?」

と告げ、兎面を外し、ポイと足元に投げ捨てた。

「……は?」

真朝は兎のわけのわからない思考について行けず、しゃがみこんで頭を抱える。

(もうね、ついていけないわ)

「ねえ、上向いてヨ」

「あのね、キスはイ……んーっ!!」

上を向いた瞬間、真朝は再び唇を奪われてしまう。

兎は意外にもものすごい力で、離れようにも離れられず、じたばたと手足を動かした。

(息が、苦し……)

「……夜尊……^{よるのみこと}。一体、何をしておられるのか?」

大鳥居から姿を現した猿田毘古^{サルタヒコ}がまず見たものは、キスをしている二人の姿であった。

夜尊は真朝の両腕をつかみ、ぴたりとくっついたまま。

「兎面をむやみに外してはなりません。邇邇^{ニニギ}芸殿に叱られますぞ?」

夜尊は顔をゆっくりと上げ、「邪魔しないデ。ボクはニニギなんか怖くないもン」といい、再び真朝に顔を近づける。

「イヤー!! たーすーけーてー。……………んーっ!!」

真朝の抵抗もむなく、キスはまだまだ続行する。

「夜尊、お止め下され。接吻が何を意味するのか御存じなので?」
そう告げながら、サルタヒコは無理矢理二人を引き離そうとした。
夜尊はひよいと顔を上げ、月のような琥珀色の瞳で真朝を見つめる。

その顔は、まだあどけなさを残した美しい天使のよう。

「うん、知ってるヨ。“婚約”だよネ? ボクはマアサと結婚するつもりだよ」

サルタヒコは「それならば」と引き下がり、片膝をつき、礼をした。

——その後砂漠には、真朝の叫び声が轟く事となる。

0028＊ 邇邇芸の指令

……ジジジ……

蛾が火に飛び込み、静寂を保つ薄暗い部屋にかすかな音を立てる。
煙は1本に真直ぐあがり、そして、消えた。

蠟燭は2本灯されており、円座に胡座をかいている邇邇芸ニニギミコトの命を
ゆらゆらと照らし出す。

彼にしては珍しく落ち着きがなく、親指の爪を強く噛みしめている。
る。

「馬鹿な！ なにを考えておられるのだ。大鳥居にいらっしゃるの
も謎だが、その上……」

水晶玉は映し出す。妖しげな虹光を放ちながら。

「結婚だど！？ そんな事をされては困る。しっかりと言い聞かせ
なければ！」

水晶を乗せた彼の手は強張り、高天原で眉目秀麗と名高いその顔
も、予想外の出来事に、いくばくか歪んだ。

（猿田毘古サルタヒコめ。何が「それならば」だ。止める立場だろうに。……
あの阿呆）

「失礼致します。アメニギシクニニギシアマツヒコ天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命……
御呼びですか？」

簾の向こうから、女の声がする。

女は手を胸の部分で合わせ、45度の最敬礼を行ない続けたまま。

ニニギは服装を正し、一つ咳払いをした後、

「御苦劳様です。中へ入って下さい」

と告げた。

足音を立てずに、女はしなやかに簾の中へと入っていく。代わりに足首の鈴がシャラシャラと音を立てた。

女はうす布を身に纏い、細かなヒダのついた裳を揺らしながら歩いている。

肩には深紅の御須衣みすいをかけ、手には七色に光る羽衣を持つ。

「天孫、天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命、お久しぶりです。幾年ぶりでしょうか。この度、御呼びがかかった事、大変嬉しく——」

ニニギは手で女を制止する。

女は不思議そうな顔をしながら、言葉を止めた。

「ああ、もういいですよ天宇受賣アメノウズメ。何度言ったら分かるのですか。

私の名は省略して『ニニギ』と呼んで下さい。私の本名は長く煩わしいものですから。なにしろ高天原一の長さですからね」

「ですが——」

「略して下さい」

アメノウズメは、なぜか頬を染めて小さく頷き、

「分かりました。ニニギ」

と答えた。

ニニギは苦笑いをする。

(いきなり主あるじに向って呼び捨てか)

「でも何か違和感がございますね。天孫に向ってニニギだなんて……」

そう言うと、アメノウズメは頭をポリポリと掻いた。

再び咳払いをして、ニニギは、

「貴女を呼び出したのは、他でもありません。例の部屋あしはらのにいる葦原中国あしはらのの者達の世話をして頂きたいのです。必ず根堅州國ねのかたすくにでも耐えるように仕上げて下さい」

と言い、懷から鍵を取り出した。鍵は宝石が埋め込まれ、豪華な作りとなっている。

「あの人間達を、ですか。……慎んでお受け致します」

「では、頼みましたよ。半日後には彼らは目覚めるでしょう」

鍵を受け取るとアメノウズメは一礼し、その場を去ろうとするが、思い立ったようにくると振り返る。

「ニニギ、私の夫は貴方さまのお役に立っているのでしょうか？」

彼は、その、何といいますか……そそっかしくて」

そう言つて、頬を再び赤らめてみせた。

顔に落ちる一筋の長い髪を元の位置にすくい上げ、ニニギはにんまりとただ微笑む。

「心配は無用です。サルタヒコは私のよき右腕となってくれていますよ。あなたたち夫妻には感謝していますし、期待もしています」

「嬉しいお言葉。私も最善を尽し、必ずや御期待に添うようにつとめます」

再度敬礼をすると、満足そうな笑みを浮かべ、アメノウズメはふわりと浮かぶように簾の向こうに消えていった。

0029* 拒否権ナシ

「いつまで手エつないでんのよ！」

依然固く結ばれた手。

先刻までギャアギャアと騒いでいた為、真朝の声は少し枯れている。

彼女はこの上なく不愉快であり、相当イライラしていた。

そして腕を上下に思いきりぶんと振り、手を振り離そうと試みる。しかし、それに合わせて夜尊の手もぶんと動くのみであり、あるうことか楽しいに彼は「ウフフ」と含み笑いをもらした。

彼の顔は再び兎面で覆われており、その表情をうかがい知ることはできない。

何を考えているのかは全くの謎であり、まさに神のみぞ知るといった状態である。

「だって、ボクら結婚すんだもん。で、今のボクらはコイビト期間だね。だから手をつないで当然なのサ」

のんきに歌でも歌っているかのように軽快に言う。

「ちよつと、ふざけないでよ。いつ私がアンタと結婚するって言った？ ……ホント、勝手に決めないで欲しいわ。私はOKなんかしてないんだからね！」

そう早口で捲し立てながら、真朝は眉をひそめ口を尖らせた。

「あつれー、マアサは知らないんだ？」

と言いながら夜尊は顔をピタリと近づける。

真朝の顔と兎面はもう目と鼻の先。

兎の目、二つの紅玉『ピジョン・ブラッド』は不気味に照り輝いている。

それはなんともいえない迫力と威圧感を生み出して、真朝はただたじろぐしかなかった。

「な、何よ。何なのよ」

じりじりと後ずさりしようとする……が、砂でうまく下がれない。
「きゃっ！」

転倒しそうになったところ、とっさに夜尊はつないだ手を引き寄せて彼女を助けた。そして、言う。

「あのね、ここでは女性に結婚の拒否権はないんだヨ。拒否すればだいたい死罪になっちゃうシ。だからマアサはボクと結婚するしかないんだヨ。分かつタ？」

真朝の顔は一気に蒼白となる。

「し、死罪！？ 断われば殺されちゃうってこと？ 私？ ……」
本当に？」

「うん、そうだヨ。殺されちゃう」

「……そんな……無茶苦茶だわ！！」

夜尊は大きく頷くと、

「そう、ここは無茶苦茶な世界なんだ。でも安心シテ？ ボクといれば、マアサはきつと幸せになれるかう」

と得意げに言い、軽くぴょんと飛び跳ねた。

硬直しながら目を見開いている真朝の顔に、栗色の髪がそよそよと触れる。

太陽を受けて白く光る砂漠には、もう風が吹き始めていた。

（夜尊も奥方さまも、仲睦まじくていらっしやる。めでたき事だ。

……しかし……）

猿田毘古は遠目で二人の姿を見つめている。

（ここは暑い。この灼熱地獄、もう絶えられぬ。それにしても、あのお二方は暑くはないのか……）

砂漠からは陽炎が発生し、視界をゆらつかせ、視覚的にもさらにその暑さを助長し掻き立てている。

相変わらず天狗面を顔にがっしりとつけているサルタヒコは、あまりの暑さに、面を取りたい衝動に駆られていた。

しかし、必死に耐えている。それはもう男の意地であった。その為いささか心に余裕はなくなっている。

仁王立ちの彼の足元には、アーサー・ギース・ギャロットの通訳、浅田ミチルが転がっているのだが、よほどショックを受けたのだろうか、彼女はあれから意識を失ったまま。――そう、夜尊によって幻の街が砂漠に戻った時からずっとである。

錫杖でちよいと突いてみるが、まったく反応はない。

それにあわせて、体も微かに揺れるだけ。

サルタヒコは錫杖を砂に突き刺すと、両手で彼女を起こし、思いっきり往復ビンタをした。

「おい、女。起きぬか！」

ミチルはぐったりとしており、起きる気配がない。

「おいっ！」

だんだん彼女の顔は、ビンタによって真っ赤に腫上がっていく。

「くーっ、こやつ、面倒な」

サルタヒコは渋々ミチルを背負う事にし、彼女を担ぎ上げた。

0030＊ 稀有に重い女

「ぬ。……なかなか、だな」

足は砂漠の砂に、歩く度に深く埋まっていく。

華奢に見えるキャリアウーマン風の女は異様に重く、『見た目とは全くあてにならぬもの』と、猿田毘古サルタヒコは教訓を得る。

（さらに叩いて起こすべきか……。否、顔がこれ以上腫上がって醜女になってしまつては、邇邇芸殿ニニギに面目がたたぬ……）

重いミチルを担ぐ事になろうとも、彼にはどうしても急ぎたい理由が二つあった。

ひとつ目はただ「暑くて死にそうだ」という事。彼は元太陽神でありながら、熱にはこっそりと弱いのである。

そしてふたつ目。これが一番、彼が杞憂していることである。

それは、邇邇芸ニニギが先刻告げた言葉。

——「根堅州國ねのかたすくにの者が黄泉平坂よもつひらさかに向つたという報告がありました。くれぐれも心して下さい」

根堅州國とは、葦原中国と地底深くに存在する黄泉国よもつくにの間に位置する世界であり、その属性は黄泉国に近いものである。

黄泉国——すなわち死者の世界であり、『悪しき者』『不浄の者』の集う所として、神々はその存在を忌み嫌っていた。

両国は、太陽の光さえ届かない。まさに、完全なる漆黒の闇が支配する世界なのである。

サルタヒコとて、黄泉国、そして根堅州國を恐れている。できれば一生関わりたくない。

彼は、必死に重いミチルを携えて、ようやく夜尊と真朝の元に辿

り着く。

彼らはいまだに手をつなぎ、仲睦まじく目に映る。

「ささ、夜尊。奥方さまもお急ぎなされ。根堅州國の者が黄泉平坂に向かつているそうで、いずれはここに現れるやもしれませぬ。さすれば、一大事。早く去りますぞ」

ここは、ちようど高天原たかまがはらと葦原中国、そして黄泉平坂の中ほどに位置する広大な砂漠である。

世界を移動するならば、必ずこの砂漠を通過する必要があるのだ。

「ちよつと！ 奥方さまって……まだ、そんなわけじゃ……」

真朝はブツブツいいながら、不服そうに頬を膨らませる。

「あっ……！」

夜尊は、突然ぐいと彼女の肩を抱き寄せた。

「ちよつと、何するの……」

離れようともがくが無駄である。

彼の細い体のどこにそのような力が潜んでいるのか、全くの謎であつた。

「ねえ、サルタヒコ。残念だけど、彼らはすでにいるヨ？ ボクらはのんびりしすぎちゃったみたいだネ」

そして真朝のほうへ向き、

「ねえマアサ。ボクから絶対離れないデ。手を離しちゃダメだからネ？ じゃなきゃキミを守れない」

と素早く告げる。

「い、一体、何だっていうのよ……」

ただ事ではないと思い、真朝は辺りを見回した。

しかし、これといって何もない。——雲1つない大空と、ただ延々と砂漠が広がるだけ。

「夜尊。一体どういう事なので？」

サルタヒコはただただ疑問に思うばかり。

根堅州國の者の気配など、全くしないからである。

「キミには分からないかもしれないネ。でも、ボクはごまかせないヨ？　だって、血を分けた兄弟だもノ」

「……………ご兄弟……………」

（わけがわからぬ）

サルタヒコは、首を捻る。

「ねえ、サルタヒコ。その女の人、重いでシヨ？」

「何と……………」

ごくりとサルタヒコはつばを飲む。

足はすでにふくらはぎの位置まで地中に埋まり、体中の血管は重さによって膨らんでいる。

もはや、ミチルは尋常ではない重さであった。

0031* Invasion (侵入)

「た、たしかに……拙者はこれほどまでに重い女は知らぬ……」

そう言うのと、猿田毘古は地にミチルを下ろそうとした。

腕はもうちぎれるかと思うくらいに限界である。

『冷たいなあ、サルタヒコ。俺は気を失っているのだぞ？ しつかりと受け止めていてもらわなくちゃあ困る。何せ、か弱い女だからな。ウフフフ』

ミチルの長い睫は伏せられたまま。形の良い唇だけが動き、声を発している。

その声は女のものとは到底思えない、ドスの効いた低い声であった。

「な、何奴!？」

サルタヒコは手を放し、ミチルを下へと振り落とす。

その刹那、落ちずにミチルは身体をよじり、猫さながら砂へと着地した。

『何落としてるんだよ、お前。そんな事じゃモテないぞ？ 女には常に優しくしなくちゃな』

腕を組みながら仁王立ちになって言う。

サルタヒコは咄嗟にミチルに向って左手の人指し指を立て、右手でそれをにぎりしめた。

——印である。

突如強烈な光が発生し、同時にミチルは空高く悠々と飛ぶ。

そして何もなかったかのようにふわりと夜尊のそばに着地すると、スーツの埃をパンパンと払った。

長く艶やかな黒髪は風に流されたなびいて、ミチルはそれをなめまかしく耳にかけた。

『相変わらずサルタヒコはワンパターンで……ちよつとばかり単純だと思わないか？　なあ、兄上』

そう言いながら、にんまりと笑う。

夜尊は真朝を後ろに隠したままで、

「でもそれはカレの長所だヨ。ボクは複雑なヤツはあまり好きじゃない」

『なるほどね』

真朝はガタガタ震えながら、ミチルを凝視していた。

何が起こったのか、さっぱり分からない。ひたすら何なのこのダミ声はと思いつけている。

『ところで兄上、あなたがここへ来るとは珍しい。俺はね、この機会をひたすら狙っていたんだよ。それも気が遠くなる程長かね。……あなたに会いたくて』

「そうなの？　ボクはキミにはあまり会いたくなかったかな」

『へえ、もしかして——』

ミチルはちらりと真朝を見た。「ひっ！」と言いながら真朝は夜尊のマントにしがみつく。

『そのかわいらしい女を娶るのかな？　……という事は、あなたは

『男』を選ぶのか？』

「うん、そのつもりだヨ」

ミチルは黙ってうつむいて、そして静かに面^{おもて}を上げる。

その目は深い谷底のような闇に包まれて、かつてないほどの憎悪を孕んでいる。

『それは何としても阻止しなければ。俺はあなたに『女』を選んでもらいたい』

ミチルは唇をペロリと舐めると、兎面に向って手を伸ばす。そしてゆっくりと外していく。

……が、夜尊は微動だにしない。

露になったその顔は、飄々とミチルを見つめている。

ミチルは再びニヤリと笑い、兎面を足元にぽとりと落とした。

「ねえキミ、もしかしてボクにキスしようとしてル？」

『ご名答。……その目、その鼻、その唇。あなたは相変わらず美しい』

夜尊は正面を見据えながら小さく笑う。その身体は未だにびたりと止まったまま。

「まいったナ。ボクにはそんな趣味はないヨ。男とキスするなんて想像するだけで、吐きそうになっちゃウ。キミはいつから同性愛者になっちゃったノ？ お兄ちゃんは悲しいヨ」

ミチルはフンと鼻を鳴らし、

『兄上は『男』ではない。これからは『女』になるんだ』

そう告げると、形の整った綺麗な指先は、夜尊の唇をねっとり撫でつけた。

『今のあなたは男でも女でもない。大人でも子どもでもない。あの時から、呪で止まったまま』

ミチルは徐々に顔を夜尊に近付けていく。

「何をやっておられる、夜尊。早うお逃げ下され！」

サルタヒコ

猿田毘古は大声で叫ぶ。彼の中では、ただじつとされるがままになっている夜尊に対し、数々の疑問が沸き上がる。そして錫杖をシヤラリと鳴らすと、ミチルの方へ一直線に指し示した。

『なんだ国津神の分際で挑発しやがって。サルタヒコ、俺と戦おうというのか？』

ミチルは夜尊に素早くキスをする、踵を返し、サルタヒコの方へと歩いていく。

「……ねえマアサ。ボクの背中を思いきり叩いてくれない？」

夜尊はミチルに聞こえないよう、慎重に小声で真朝に伝える。

真朝は必死にミチルから隠れるように、相変わらずマントにしがみついていた。

「な、な、なんで、叩くの？　なんで？」

思わず声は吃ってしまう。彼女の心臓はもうはちきれそうであった。軽くパニック状態である。

「あのね、ここだけの話だヨ？　ボク、アイツがボクらのほうに飛んできた時、こっそり「影ぬい」されちゃったんだ。だから気付けないと、動けない」

夜尊は相変わらずピクリともしない。その様は人形のように不自然である。

「影ぬい……って何？」

「まったく動けなくされちゃうことだヨ。イヤになっちゃウ。ね、早くして。じゃなきゃ、アイツが戻ってきちゃウ」

真朝は「アイツ」を恐る恐る見た。天狗面と向かい合い、腕を組んで堂々と立っている。

「せ、背中……叩くと動けるようになるの？」

「うん、そうだよ。ボクとしてはマアサのキスでもいいんだけどネ」

——バシン——！！

真朝はためらう事なく、夜尊の背中を思いつきりぶっ叩く。

その瞬間、夜尊は無意識に軽くぴょんと飛び跳ねた。それは、想像以上の痛みであった。

「い、痛イ！　……キミって意外に力強いんだネ。ボクの背中、絶対もみじになってるヨ」

夜尊は言葉とは裏腹に、嬉しそうに微笑むと、背中に手をのばしてさすりはじめる。

『女、何をする！』

気づいたミチルは怒りを露にして、サルタヒコの眼前から瞬時に二人の方へと猛進する。

夜尊は一足先に、真朝を抱えて大きく空へふわりと浮いた。

「残念だね。キミの「影ぬい」はもう解けちゃった。ボク、ほんと焦っちゃったヨ。やっぱりいつの時でも油断は大敵だよネ」

ミチルは空を見上げながら、悔しそうに唇を噛みしめる。

「お、下ろしてー。浮いてるしっ。っていうか、やめて。高いの嫌いなよ。高所恐怖症なのよ。ホント、本当にムリなんだってば！ 高いー」

真朝は落ちないように必死で夜尊の首にしがみつきながら、大声で騒ぐ。

声を見無視し、夜尊はただ下を見下ろすと、ミチルをじっと凝視した。

やがて琥珀の目を一層輝かせると、表情を一転させ、鋭い顔つきとなっていく。

それは大袈裟に言うならば、天使から悪魔に変化したような、そんな変わりようであった。

そして告げる。

「須佐之男^{スサノオ}。何故私に会いに来た？ 何故此所にいる？ 干渉するなどと言った事、忘れたのか」

その声は、今までとは違う、澄んだ氷のような声。

無感情で無機質な、……そんな冷めた声――

0033* コレの続きを

『その声色で名を呼ばれると、ゾクゾクするよ。愛しい兄上』

ミチルは恍惚とした表情で、笑う。その両手は夜尊を迎え入れる為であろうか、大きく開かれている。

夜尊は片手で真朝を抱え直すと、マントの中に手を入れて、彩絵さいえ檜扇ひおうぎを取り出した。

やがて手を振り、扇は開く。

『ま、待て兄上。この身はかりそめ。それで攻撃すれば、この女は死ぬぞ』

ミチルは頭上で手を交差させ、身を守ろうと試みる。

「ば、馬鹿な。須佐之男スサノオだど!? 御主……建速須佐之男タケハヤスサノオの命みことで在らせられるのか!」

猿田毘古サルタヒコの声は、驚きで上ずってしまう。

スサノオ——それは、根堅州國ねのかたすくにを統べる神の名前。邇邇芸ニニギ芸みことの命にとって、最悪の敵である。……そして彼に仕える者、すなわちサルタヒコの敵。

ミチルは横目でちらりとサルタヒコを見、太々しく『だとしてもお前には関係ない』と冷ややかに告げる。そして、邪魔者は引っ込んでろとばかりに、手を振り、去れと合図をした。

「ぬ……。拙者はこれまで手を抜き過ぎた。スサノオ殿、覚悟!!」
サルタヒコは砂を蹴ると、ミチル目がけて突進する。そして錫杖を彼女に突き刺すように前へと出した。

ミチルはやれやれとばかりに錫杖を受け流す。

『馬鹿かお前は、空気読め。邪魔なんだよ』

そう言いながら、力の限りサルタヒコの腹部に蹴りを入れた。
サルタヒコは呻きながら後方へ跳びずさる。

『あーあ、お前が余計な事するからスカートが破れたじゃねーか。どうしてくれる』

ミチルのタイトスカートは、蹴りの瞬間、見事に破れてしまった。まるで深く切れこんだスリットのように。

破れ目からは、すらりとした生足がのぞく。

「スサノオ。で、どうするノ？ 帰るの、それともボクと戦ウ？」

夜尊はニコニコと微笑みながら、彩絵檜扇で顔を煽いでいる。

その声は、すでにいつもの舌足らずな声であった。

ミチルは慌てて膝を折ると、困ったように夜尊を見上げ、首を横に振る。

『兄上、俺は戦うつもりなどない。「影ぬい」が解けた今、本来の姿でない俺が、あなたに適うはずもない。ましてや今日は満月で、あなたの力は満ちている。……分かるだろ？ 今日大人しく退散する』

鼻をすんとすすり、夜尊は扇を閉じた。そして、マントの中へと仕舞い込む。

「つまんなイ。キミと戦って、マアサにカッコイイ所見せようと思つたのニ」

そして続ける。

「もうボクの前に現れないでネ。バイバイ、スサノオ」

ミチルは呆れ顔で失笑する。そして再び艶やかな黒髪をなめまかしく耳にかけた。

『たとえばあなたが望まなくても、近い内に必ず会う。必ず『女』を選んでもらう。今日のところはこのようにして会うのが目的だった。それに――』

その手は己の唇おのれに触れ、魅惑的に夜尊に向けて投げキッスする。
『近い内にコレの続きを』

0034＊　ねえ、約束できル？

夜尊は舌を出し、マズイものでも食べたかのように遠慮なく顔をしかめた。

「お断りだネ！　もう二度とごめんだヨ」

『ふっ』

鼻で笑う彼女の顔は自信に溢れ、口は不敵に弧を描いている。

『あなたの考えは必ず変わる。見ているがいい。……では愛しい兄上、今日はこれにて』

そう告げた後、ミチルはその場にゆっくりと倒れ込んでいく。それはスローモーションのように感じられ、まるで魂が抜けていったかのようなであった。

サルタヒコ猿田毘古は恐る恐る近づき、倒れた彼女を錫杖で軽く突いてみる。

「む、動かぬ……な」

「うん、弟は去ったみたいだヨ。気配はもうないネ」

夜尊は宙から徐々に降りていき、滑らかに足を地表へと下ろす。同時に小脇に抱えられた真朝もへなへなと着地した。それは見事なへっぴり腰である。

「何を企んでおられるのでしょうか、スサノオ須佐之男殿は」

サルタヒコは問うが、沈黙は続き、夜尊の返事はない。

はて？　　と思い、彼の方を見てみると、再び真朝にキスをしていた。

真朝は足をバタつかせ、必死の形相でもがいているが、夜尊は涼しい顔でそれを押さえ込んでいる。

（なんとも……緊張感のないお方。本当に三貴子の1人であらせられるのか）

サルタヒコは肩をがっくりと落とし込む。

「夜尊、何をしておられる。……接吻は後にしてください」

ようやく真朝から口を離れた夜尊は、

「だって、口直ししたかったんだもん」

と、モジモジしながら答えた。

彼の隣では、ぐったりと真朝が座り込んでいる。もう立ち上がる

気力もないようだ。

「こうしては居られませぬ。また根堅州國ねのかたすくにの者が現れては一大事。

早う、御殿に戻りましょう。邇邇ニニギ芸殿も待っておられる」

夜尊は何も言わずに再び真朝を抱え上げ、大鳥居へ向ってぴよんと跳ねた。

サルタヒコもこれに続いてふわりと飛ぶ。

「ま、待って！ あの人、彼女はこうするのよ」

真朝の目に映るのは、広大な砂漠に小さく横たわるミチルの姿。

だんだん遠ざかっていく。

「捨て置くべきですな。いつスサノオ殿が憑依するか分かりませぬ」

サルタヒコは吐き捨てるように言う。古来より彼は、スサノオに對して畏怖の念を抱いている。

「捨て置くて……。そうしたら彼女はどんなっちゃうの」

「当然死ぬヨ。カノジョはスサノオのおかげで体力をひどく消耗してる。おまけにこーんな日照りの砂漠じゃ、もう何分もたないネ」

夜尊は静かな表情で答えた。

サルタヒコもそれに頷き同意する。

「死ぬ、ですって？　ち、ちよっと、アンタ達、助けなさいよ！！」

見殺しにする気！？」

真朝は目を見開きながら大暴れする。ミチルのもとに行こうとしているのだ。

しかし、無駄であった。あまりにも夜尊の力は強い。

「マアサはカノジョを助けたイ？」

「助けたいとか、そういう問題じゃないでしょ。助けるのが普通で

しよ。何言ってるのよ!」

人の命を何とも思っていないような二人に対し、真朝は底知れぬ恐怖心を持つ。

人形のように欠点のない左右対称の美しい顔、そしてひび割れた天狗面。いずれも無表情で無感情。より一層不気味に映る。

ふいに夜尊は顔を歪ませニッコリ笑う。しかしその目は笑っていない。

「キミがそう言うならカノジョを助けてあげル。でも、ボクの言う事もちゃんと聞いてネ。……約束できル?」

サルタヒコは慌てて彼らに割って入る。

「夜尊、いけませぬ!」

「サルタヒコは黙ってテ。キミには関係ないでシヨ。邪魔しないデ」
不機嫌そうに言い放ち、そしてもう一度真朝を見つめながら繰り返す。

「ねえ、約束できル?」

「……な、何よ。何なのそれ……」

「答えになってない。ねえ、ボクの言う事、ちゃんと聞ク? ……」
聞かないならカノジョは置いて行くけどネ」

真朝の額にじわりと汗が浮かぶ。それは暑さからではない。

「聞くわよっ。聞けばいいんでしょ! だから早く助けてよ」

半ばヤケクソ気味で答えた。

夜尊は「絶対だヨ?」と言うと、真朝を抱えたままミチルのもとへ引き返す。

「お、お待ちください!! ……なんと、愚かな事を!」

サルタヒコはその場に立ち尽くし、後ろ姿をただ啞然と見つめ続けた。

0035* 魅惑の膝枕

「大丈夫ですか!？」

真朝はゆさゆさとミチルを揺らす。が、依然意識はないままである。

彼女はひどく憔悴しており、顔色は悪く息遣いも荒い。その額に手を押し当てると、高熱だということが確認できた。

(どうしよう、結構熱がある。顔も土色だし、病人みたいじゃない……。本当に助けられるの?)

ミチルの頭を太腿ふとももに乗せながら、真朝は不安で押しつぶされそうになっていた。

その間、真朝の隣では、夜尊がのんきにちょこんと膝を抱えて座っている。

(それにしてもコイツ、何なのよ。何してるっていうのよ。ただ体育座りしてるだけじゃないの。……この口ばっかりの役立たず!)

何もしようとしない夜尊が憎々しく思われ、真朝は舌打ちとともに横目で鋭く睨み付けた。

その時、彼も真朝を見ていたらしく、二人の目はばっちり合う。

(むっ……なんて目でこっちを見てるのよ)

夜尊の瞳は汚れを知らないかのように、あどけなく澄みきっていて、それは純粹という言葉をそのまま体現している。

思わず吸い込まれてしまいそうな、深い色した琥珀の瞳。――それは見事な十五夜の月のよう。

真朝はなぜか顔を背けることができなくて、ひたすら眉間にしわを寄せていた。

(な、何なのよ、何だっていうのよ)

そして彼は、ぽつりと呟く。

「膝枕ひざまくらいいな、うらやましイ。……ねえ、ボクにも後からしてくれる？」

(……………は?)

真朝は飽きれ過ぎて怒る気にもなれず、言葉を失った。

やがて気持ちを整理して、聞こえるようにわざと大きく息を吐くと、

「アンタねえ、非常識すぎじゃない？ ふざけてるヒマがあるなら早く彼女を助けなさいよ」

と、軽蔑を込めた眼差しで言った。

「助けるつもりだけど、それよりボクにとって膝枕が一番大事なノ！
ねえ、してくれル？」

「あー、もうウザイ！ 何なの、ウザすぎなんだけど」

「答えになってない。してくれないなら助けなイ」

そっぽを向いた夜尊は、いじけたように足元の砂を触り始める。

それを見て、真朝はしびれを切らし、さらに大きく舌打ちをした。

「何なのよっ。それくらいしてあげるから、早く助けてよ！」

「……本当？ 約束だよ？ 絶対の絶対だからネ。分かった？」

「分かったって言うてるでしょ！」

夜尊は満足そうに微笑むと、ミチルの頭を持ち上げ、真朝の太腿から砂の上へと移動した。

「何するのよ」

真朝は意図が分からず抗議するが、夜尊は人指し指を口元に当て、静かにと無言で合図する。

「ねえマアサ。キミのスーツケースにお水が入っているでしょう？
それを2本ここに持ってきて」

真朝は咄嗟に信じられないといった面持ちで夜尊を見つめた。

水、500ミリリットルのペットボトルは、たしかにスーツケースの中にある。

「ちよつ、なんでアンタが私のスニーカーの中身を知ってるのよ！？」

「いいから早く。じゃなきゃ助けられないヨ？」

夜尊は上体をふらりふらりと落ち着きなく揺らしながら言う。

「わかったわよ、持ってくればいいんでしょ？」

真朝は小走りしながら、黄色のニュービートルを目指した。

「はあ、暑い……」

額から、とめどなく流れ落ちる汗。それを袖で拭い、大きな目を細めて空を仰ぐ。

太陽は生命力に満ち溢れ、砂漠全体をギラギラと照らしつけている。その堂々とした様は、まるで世界を統べる王様のよう。

そんな中、すでに車の表面は卵が焼けそうなほどの熱さであった。もう鉄板と化している。

車を開けた途端、異様に蒸し暑い空気が外へむわりと流れ出し、それは思わず後ずさりしてしまうほどであった。

同時に真朝は現在の状況をぼんやりと整理し、そして思う。

（私、ここから無事に元の世界に戻るのかな。このままだったらどうしよう。……いや、悩むのはとりあえず真人を探し出してからよね。真人と一緒に考えよう。アイツ、めんどくさがりだけど、ああ見えて頭いいし、クジ運も強いし……）

双子の兄、真人を思うと涙が溢れそうになったが、必死で打ち消し今すべき事のみを考える。

それから何もなかったかのように素早く後ろのトランクを開け、大きなRIMOWAのスニーカーを取り出すと、中から赤いラベルのヴィッテルを3本取り出した。

1本開け、ごくりと水を一口飲むと、再び走って夜尊とミチルの元へと急ぐ。

水は鼻につんとしみていた。

「持ってきたわよ」

「1本ちょうだい」

真朝は素直に水を1本手渡した。

夜尊はすかさずキャップを外すと、一気にそれを自分の口へと流し込む。

「ちょっ、な、何でアンタが飲んじゃうのよっ!？」

夜尊は無言で500ミリリットルのすべてを飲み干してしまった。

真朝は戸惑いながら傍観する。

（な、何なの？ まさかコイツ、のどが乾いていたただけなんじゃ…）

次の瞬間、夜尊は一気にミチル目がけて水しぶきを吐き出した。それは霧吹のように細かくて、しだいに小さな虹が浮かび上がる。

「汚いっ!」

真朝は顔をしかめていた。ミチルは哀れに濡れそぼっている。

「もう1本ちょうだい」

「えっ……」

夜尊は真朝の手から、かすめ取るようにペットボトルを奪うと、同じように飲み干していく。

また無駄に水を吐き出すのかと思うと、真朝は怒りで打ち震えそうになった。

しかし、予想は見事外れる。

夜尊はミチルの上体を荒々しく起こすと、今度は彼女の口に自らの口を付け、水を流し込んでいったのだ。

（え。ちょっ、キ、キス……!?!）

真朝はぼんやりと重なる二人の姿を見つめていた。

0036＊ 貴重なる月の聖水

(……ずいぶんと長いじゃないの)

次第に怒りが沸々と込み上げ、真朝は握りこぶしを作る。その目は二人を映したまま。

(コイツって、単なるキス魔ね。きっと相手は誰でもいいのよ。そうに決まってる。……なにが結婚よ！ そんなの、その女とすればいいのよ。私はごめんだわ。絶対絶対お断りよ！)

そう思いながら下唇を噛みしめた時点で、彼女は自分の感情にふと疑問を抱く。

「……………あれ？」

(私、ひょっとしてムキになってる？)

あわててこぶしを開き胸元に乗せた。その心臓はドクドクと早鐘を打っている。

(何なのよ。……バカバカしいっ)

それから頭を冷やそうと、しっかりと目を閉じ深呼吸を繰り返す。平常心はすぐに取り戻すことができた。

(我ながら、どうかしてたわ)

そしてゆっくりと目を開け、再び夜尊とミチルの姿を黙って眺める。

美男美女のキスはとても絵になっていて、衣裳は違えど、まるで「眠れる森の美女」のよう。

夜尊の髪はサラサラと下へ流れ、ちょうど互いの口元を隠しているが、二人の睫はうらやましい程に長く、その横顔も流れるような曲線で美しい。

特に夜尊の美しさは、須佐之男スサノオが執着するのも納得できるものであった。

「……あっ」

1人、呟く。

真朝はふと洋服のアイディアが湧いてきて、急遽スケッチしたくなり、踵を返し車へ向う。彼女はすでに去年卒業しているが、大学で服飾文化を専攻する学生であった。普段からアイディアを書きとめるようにしているのだ。

「マアサ、どこ行くノ？」

5歩ほど歩いた時点で、夜尊が声をかける。すでに聞き慣れた、独特な声。

真朝はなぜか急に虫の居所が悪くなり、

「関係ないでしょ、別に私なんかに構わなくてもいいわよ？ 忙しいでしょ。……それよりあなたたち、とってもお似合いよ。絶対、私なんかよりもいいと思うの」

と、精一杯ニヤニヤしながら、刺々しく答えた。

夜尊はそっとミチルの頭を砂地に置くと、ぴよんと飛び跳ね真朝のもとに着地する。

そして彼女を力一杯抱きしめた。

「ちよっ、苦しい。な……なにすんのよ！」

突然の事に真朝は顔を強張らせ、棒のように立ち尽くす。

「マアサ、可愛イ。それってさあ、あのさあ、ヤキモチだよネ。ボクたち相思相愛だね」

真朝は夜尊をはね除けようとするが無理であった。相変わらず強い力。

「……ヤキモチ！？ 相思相愛？」

何で私が……と言いかけた時点で、真朝の口は夜尊に思いつきり塞がれてしまう。

「んー！ー！」

夜尊は目を開けたままで、ずっと真朝の顔を見ていた。
そしてふいにその目は笑う。

やがて彼の口から真朝の口へと、生暖かい水は移動し始めた。ミ
チルの時と同じ水。

(……！！　ぎゃあ、汚いっ！)

水は巡るように真朝の口内を満たしていく。

真朝はピンチとばかりに必死にのどで塞き止めようとするが、水
は意志を持つかのようにごくごくと体内に受け入れられてしまう。

(き、汚すぎ！　汚すぎる！　っていうか苦しい！！)

のどに全意識を集中させている為、呼吸も忘れ、真朝の顔はだん
だん赤くなっていく。

(死ぬー！ーっ！)

夜尊は全てを口移しし終えると、真朝の口元についた水を自分の
マントで拭い、

「苦しかった？」

とあどけなく笑いながら告げた。

真朝は頭から湯気が出る程憤慨している。その顔は怒りに打ち震
え、赤鬼のように真っ赤である。

「冗談じゃないわよっ。なんて事すんのよ、汚いわねっ！　苦しい
に決まってるじゃないの！！　っていうか、死ぬかと思ったわよ！
！」

夜尊は目を伏せて、再び真朝に軽くキスをする。その際、真朝は

顔をそむけ嫌がったが、全くの無駄であつた。

「全然汚くないヨ。だって今の水は『月の聖水』だモン。だから、汚くない」

真朝は思わぬ言葉にただ呆氣にとられるしかなかった。

「は？ 月の聖水？ ……アンタねえ、なに自信満々に言っちゃつてるのよ。何が月の聖水よ。単なる唾液まじりのすぐくすぐく汚い水じゃないのよ！ほんと大迷惑」

「ちがうよ、ホントに汚くないモン。だってボクってさあ、水を飲むと、もれなく月の聖水に代えることができちゃうノ。ねえ、すごいでショ？ それにコレってみんなが欲しがる貴重な水なんだヨ？

だからキミもカノジョもツイてるネ」

「バカじゃないの？ 「ツイてるネ」じゃないわよ！ よく言うわ。もう、最っ悪よ！！ っていうか、なんで私にまで口移しするのよ。迷惑すぎて死にそうだわ！」

夜尊は真朝の顔を覗き込み、その薄ピンク色の頬に触れた。

真朝は不覚にもドキッとしてしまい、心臓が飛び出しそうになる。

「でも、もうヤキモチは治ったでショ？」

「……………だから、私がいつヤキモチ焼いたっていうのよ」

0037* 夜之食国 …霧の国…

夜之食国。よるのおすくに——霧が全てを包み隠す国。

本来なら夜の闇が、瞬く星々が支配するその国も、いつの頃からか変わり果て、霧の国と呼ばれるようになっていた。

濃霧が全てを包み込む、長年その全貌を覆い隠された、秘密めいた白い世界……。

住人はこの国を【夜兎の霧の国】と呼ぶ。

霧の国のほどなく中心部、高くそびえ立つ岩山に、その木造の建築物は存在していた。

その様式は寢殿造しんでんづくりと呼ばれ、繊細で緻密な造りは平安時代を思わせた。

南側にある壮麗な寢殿しんでんの、そのまた東、寢殿と対屋たいのやをつなぐ渡殿わたりので、1人の髪の長い女が胡座をかいて座っている。

女の頭上には、七色に輝く羽衣が、ふわりふわりと揺らめいている。

「まだ目覚めないなんて。あいづら、遅すぎる……。一体いつまで待たせるつもりだ、あの寝ぼすけ達め！」

指をポキポキ鳴らしながら、女は「覚えてやがれ」と舌打ちをした。

もしも近くに誰かがいたのなら、今の言葉は決してこの胡座をかいた女が発した言葉だとは思えないし、信じたくはないだろう。

なぜなら女は清楚でゆかしい顔つきで、白くしなやかな肌はだえは、気品高く美しい。間違っても可憐な朱の唇からは、「覚えてやがれ」

などと発せられそうもない。

——ブッ！

その上なんと、女は無表情で無防備に、わたりの渡殿に響き渡るほどの屁をこいた。

これを聞いた、彼女を知る世の中（高天原）の男は、ショックのあまりに卒倒するにちがいない。

「ああ、退屈」

欠伸をしながら女はごろりと寝転んだ。

その姿、目も当てられないほどにだらしない。

直後。

「なんということだ！！！」

寝殿に、耳をつんざくような声が走り、こだまする。

女は驚き跳ね起きた。

「な、何事！？　これはひょっとしてアメニギシクニ天邇岐志国ニギシアマツヒコ邇岐志天津日高日コホノニギのみこと子番能邇邇芸命のお声？」

羽衣を掴み、体に巻き付けると、女はふわりと宙に浮く。

すぐさま女は寝殿の方へ飛んで行った。

「邇邇芸、いかがなさいましたか」

紅に染まる簾の手前で、女は45度の最敬礼を行ない続け、上目遣いに「入ってもよろしいですか？」と遠慮がちに聞く。

「……なんでもない、何でもありません。……アメノウズメ天宇受賣、ここはい
いですから………下がりなさい」

ひがしのたい
アメノウズメは不満そうに眉をつり上げたが、黙って踵を返し、
東対に戻っていった。

一方、簾の向こう側。

円座に座ったニニギは、冷や汗を幾重にも垂らしつづけている。
その顔色はまさに蒼白。彼の顔色が変わるのは、非常に珍しい事
であった。

先刻、お祖母様に強く忠告されたにもかかわらず、まんまと夜尊
タケハヤスサノオ
と建速須佐之男の命を会わせてしまった。
その事実には彼は焦りを隠せない。

「なんたること。なんたる大失態……！」

言葉と同時に、ニニギは拳を床に思いきり叩き付ける。

その大音は屋敷中に轟いて、それは先刻去ったアメノウズメも驚
いて飛び跳ねてしまうほど。

彼の傍でゆらゆらと灯る2本の蠟燭は、衝撃とともに煙をひとす
じだけ上げて儚く消えた。

後に残されたのは、漆黒に染まるただ黒々とした闇の世界のみ。

……暗い中、ひとりニニギはギリギリと歯齧みをする。

もっと早くに自らが動いていれば、このような事態は避けられた
かもしれない。……そう、彼は最大級に己おのれのふがいなさを恥じてい

た。

それは高天原たかまがはらを揺るがすやもしれぬ、一大事となるかもしれないからだ。

そして呟く。

「忌々しい。まさか須佐之男スサノオの命みことが娘に憑依するとは思わなかった。遙か遠くの根堅州國ねのかたすくによりそんなことが出来てしまうのか！ それほどまでに、彼奴の力は強いというのか……。糞。暗い世界で永遠に大人しくしておればいいものを」

彼は凄まじく腹を立てていた。必要以上に怒っている。――根堅州國を統べる、スサノオに対して。

やがてじりじりとニニギの瞳は漆黒から金色こんじきへと変わっていく。再び猫睛石びようせいせきの瞳へ……。

2つの宝石にも似た瞳は、闇の中で煌々と輝いている。その後、流れるような手つきで、両の手を忿怒拳ふんぬけんの形にし、胸の前で背中合わせに交差した。その左右の小指は絡められ、人指し指はそれぞれ立てられている。

――印である。

それは、降三世明王こうさんぜみょうおうが結ぶ、降三世印こうさんぜいんと呼ばれる印相に似ていた。

0038* 金色の植物

「それにしても……暑い」

相も変わらず煌々と輝いている砂漠では、影になる物は何一つなく、極上の日なたのまっただ中で、猿田毘古サルタヒコがけだるそうに胡座をかいて座っていた。

その目は二人の人間と、一柱の神の姿を追っている。

「まことに勝手な……いや、仲睦まじき事はなによりだが、いつまで拙者は……こうして待っておれば良いのだ。これは実にゆゆしき事態。熱中症になど、断じてなりたくはない……」

ブツブツとひとりごちるサルタヒコは途方に暮れ、着込んだ法衣をパタパタと仰ぎ、風を自らに送ろうと試みた。

しかし、そよぐのは熱風のみ。その暑さを助長させるだけ。慌てて彼は仰ぐのを辞めた。

「もう絶えられん。ええい、暑すぎるわ!!」

彼はもう、暴れ出したい衝動に駆られていた。全ての衣服を脱ぎちぎってしまいたい。

しかしまだ何処かで理性が働いて、拳を握りぐつとこらえる。――我慢の限界はすぐそこにあつた。

――グゴツ。

その時、サルタヒコの足元では、砂が異様な音をたてた。

「むっ……何事!？」

だれているとはいえ、咄嗟にその場に立った彼は、錫杖を思いつ

きり音の方へ突き立てる。

錫杖は高らかにリンと音を奏で、それに反応した夜尊が、遠くからサルタヒコをチラリと見た。

『くっ……。サルタヒコ、何を……。するのです』

地中から、うめくような声がする。

サルタヒコは聞き覚えがある声に、慌てて飛び退き、片膝をついて礼をする。

それは彼の主、ニニギ邇邇芸の命みことの声に似ていた。

「ニ、ニニギ殿であらせられるか!？」

『……。いいから早く、錫杖を抜いてくれませんか』

「そのような地中で一体何をしておられるので？」

『ですから、とりあえず先に抜いてください』

おそろおそろ砂深くに突き刺した錫杖を握り、サルタヒコはキョロキョロと左右を確認する。

本当に主であるのか、少しばかり自信がないためであった。

ふと、夜尊を見やると、こちらの様子を気に止めるでもなく、再び真朝と何やら話している様子。

(なんとのおんきなお方だ……)

サルタヒコは、緊張している自分がバカバカしくなり、力を込めて錫杖を引き抜いた。

——グゴゴッ、グモッ。

不気味な音とともに、サルタヒコの足元の砂は、みるみる歪な形

でこんもりと盛り上がっていく。

「ぬっ!？」

足場が非常に悪くなり、サルタヒコはぐらりと大きく揺らついた。彼は錫杖を握りしめ、弧を描いて飛び跳ねる。

それは、少しばかり恐怖心を抱いていたのか、夜尊の方向であった。

「しびれを切らしたのかな。ニギが来たネ。ちょっと情緒不安定みたい」

夜尊は真朝にじゃれつきながら、ぽつりとサルタヒコにそう言った。

その言葉と同時に乾いた砂漠には、植物が地中よりバサバサと音を立てながら発芽する。

「な、なによ、アレ……」

真朝は驚き目を見開くが、夜尊は「あれは何でもないから気にしないデ」と、彼女を覗き込むようにして告げた。

植物はみるみる大きくなって、その全貌が圧倒的な存在感をもってあらわれる。それは遠目にも一株の『稲』であることが確認出来た。

たわわに実った穂は金色に輝き、見るからに豊作だ。

通常の稲よりもやたらと大きく、その高さ、七メートルはあるかと思われる。

「なんだかすごく大きい……稲なのね」

真朝は顔を引きつらせながら、たどたどしく言った。

0039* 七人の神様

米、ひと粒には七人の神が住まうという。

真朝は幼少の頃、祖父よりそのように聞き、ご飯はひと粒残さず食べる育てられてきた。

当時、こんなちなけな米粒ごときに神様が七人もいてたまるかよと、祖父を小馬鹿にしていたものだが、目の前の巨大な稲を目の当たりにすると、あながちそれは嘘ではないのかもしれないと思えてくる。

その穂——その種子ひと粒の大きさは、常識では考えられないほどに大きくて、それはさながらラグビーボール。

炊くとうなるのだろう。と、真朝はぼんやりと想像した。

「ねえ、あの米、食べられるの？」

真朝は、相変わらず飄々とした表情の夜尊に問う。

「ん、食べてみたいノ？ ……いいヨ。不味いと思うけどネ」

聞いていた猿田毘古は、あわててその会話に入り込む。
サルタヒコ

「夜尊、ならびに奥方さま。あれは天孫、邇邇芸の命の稲ですぞ？
ニギハヤヒ
食べるなど、脱穀するなど恐れ多き事！ そのようなお考え、改めなされ」

「ひと粒くらいならバレないヨ」

夜尊の思わぬ即答に、サルタヒコはやれやれと首を振る。

そのような会話もつゆ知らず、稲は穂の重みでしなやかに曲り、カラカラと音を立てながら上下に揺れる。

やがてひと粒ぽとりと落ちて、地に砂煙りを上げ、縦にズンと着地した。

粒は異様な存在感を周囲に放っている。

次第にその^{もみ}粃の外皮は花卉が開くように剥がれ、金色の^{もみがら}粃柄は風に乗って、ふわり浮かんで消えていく。

後に残るのは、純白に輝く巨大すぎる玄米、ひと粒。

サルタヒコは再び片膝をつき、^{こぶし}頭を垂れる。

真朝は米粒に向かって礼をするサルタヒコが可笑しくて、必死に笑いをこらえていた。

米は言葉を発する。

『夜尊、一刻も早く^{よるのおすく}夜之食国にお戻り下さい。そこは、危険です』
「分かってル。これから戻るつもりだよ」

けだるそうにふらりふらりと横に揺れながら、夜尊は答えた。それから目を細め、いたずらっぽくにんまりと笑う。

「ねえニニギ、ずっと見てたでシヨ？　^{スサノオ}須佐之男、面白い事してくれたネ。カレは強いヨ？　あのヒトは焦ってるでシヨ。フフ、どうするつもりなのかナ？」

言われて米は、かすかにその輝きを濁らせる。

『スサノオの命に^{みこと}関しましては、お祖母様はすでに動かれております。もう貴方様が危険にさらされる事がありますまい。……ところでそのお顔……兎面はどうされました？』

「あっちにあるヨ」

と、夜尊は面が落ちている方向を指差した。

『着けて下さい。貴方様はどうも御自分の美しさに自覚がない様子。おいそれとは外さないよう、心して下さい』

「美しい？　それはキミに言われてもあんまりうれしくなんかない。どうせならボク、マアサに言われたいな」

「ええっ!？」

突然会話に自分の名前が登場した事に驚き、真朝は目を見開いた。
夜尊は米から真朝に向き直り、

「ねえマアサ、ボクって美しい？」
と満面の笑みで問う。

真朝は哑然とし、言葉を失った。

『……とりあえずサルタヒコ、兎面を持ち、夜尊にお渡してくれませんか？』

米は気を取り直して発言を続ける。

「御意」

サルタヒコは砂をトンと蹴ると、ゆっくりと宙に舞った。

0040＊ 米はかく想う

「夜尊、お着けくだされ」

ニニギ
ミコト
邇邇芸の命の言い付けどおり、兎面を拾ってきた猿田毘古は、夜尊に向けてそれを差し出した。

太陽を受けて面はますます妖しさを増し、きらびやかに陽光を反射する。

夜尊はだまってそれを受け取ると、素早く顔に装着する。そして視線は真朝のほうへ。

「ねえ、マアサ。さっきの答え聞いてない」

詰め寄る夜尊を手で押し退けつつ、真朝は体の奥底から、思いきり息を吐く。

「……しつこいわね」

それを見ながら、ひと粒の米、ニニギはえも言われぬ寂しさを感じていた。のけものにされてしまったような、そんな気持ち。

その疎外感は徐々に大きくなり、やがて不安と歯がゆさが頭の中でどろどろと渦巻きはじめる。

彼は夜尊を一番理解できるのは自分だと信じていた。身近にいるのはこの私、と。だが、それも真朝という娘が現れるまで。

これまでの出来事で、その行動パターン、その考えはまったくもって読めたものではないことを痛いほどに知る。まさに夜尊は謎だらけの存在だ。

しかし、夜尊を御する事ができなければ、お祖母様との約束をとうてい果たす事ができない。

彼は夜尊がなぜ真朝にああも懐いているのか全く分からなかった。その魅力とは一体何なのか。

真朝は確かに美しい。しかしそれ以上でもそれ以下でもない。遥かに美しい女など、高天原には腐るほど存在するのに……。

「はて？　どうされました、ニニギ殿」

様子がおかしい事に気付いたのか、サルタヒコは米を静かに見下ろした。

米はすっぱりと天狗の形のシルエットの影となり、輝きを損ねる。サルタヒコにはそのつもりはないが、ニニギは部下に対して相当な威圧感を感じてしまう。それは思わずたじろいしてしまうほど。

ヒビ割れた天狗面は逆光となり、すさまじい迫力およびすさまじい重圧となって彼を襲う。

ニニギは舌打ちをし、「サルタヒコめ……」と、ぽつり誰にも聞こえぬように呟いた。

『……なんでもありません』

気を取り直して米は続ける。

『サルタヒコ、頼みがあります。あそこに倒れる女を担いでここに連れてきて下さい。それから……夜尊と娘もここに』

その言葉に反応し、サルタヒコは振り向いてミチルの姿を確認する。

目は固く閉じられ、あいかわらず砂漠にひっそりと横たわっている。

しかし、先程に比べ、いくばくか顔色も良い。

「ぬ……しかしニニギ殿、あの女は……。夜之食国よるのおくにおよび高天原にとって害を及ぼす存在となりましょう。この先、どうなるかわかったものではありません。拙者はここに捨て置くことが一番と考えます」

『全て存じています。貴方が危惧するのは須佐之男スサノオの命みことの事でしよう。ですが、私には彼奴はらを祓う用意があります。心配は無用のこと』

「……御意」

言い残すと、サルタヒコはすぐさまミチルの元へ行き、彼女の姿を恐る恐る――見た。

規則正しい吐息、バラ色の唇。……目覚めるのは時間の問題かと思われる。

もう重いのは、もう蹴られるのは嫌だった。それは首をつたう冷汗、そして生唾をぐくりと飲む仕種で表現されている。

しばし時をおいた後、意を決したように「えい」と声を発すると、同時に肩にかけるようにして女を担ぐ。

……ミチルは非常に軽かった。先程に比べれば、羽が生えているかのよう。

サルタヒコは拍子抜けし、よたよたと横に揺れた。

「サルタヒコ、そろそろ行くノ？」

夜尊は真朝の手を握り、ぶらぶらさせながら問う。

サルタヒコは黙ってこくりと頷いた。

「ニニギ殿が呼んでおります。どうぞあちらへ」

サルタヒコが飛ぶと、夜尊も真朝をひょいと抱き、後に続く。

「ぎゃあっ！　ちょっ、ちょっと、飛ぶ時は心の準備が必要なんだから、前もって言いなさいよ！　私は高所恐怖症だって言ってるでしょー！！」

真朝は必死にしがみつきながら、鬼の形相で睨み付ける。

「ねえマアサ。そんなにうるさくするなら、また「月の聖水」やるけど。……いいノ？」

「……っ、月の聖水……」

それ以降、真朝はぷつぷつりと静かになった。

0041* ボクの家

『皆さん、私の近くに寄って下さい』

そう、静かに米は告げた。

夜尊、真朝、そしてミチルを担いだ猿田毘古サルタヒコは、彼を見下ろすような形で言われたとおりに近くに寄る。

見下ろされているという事実、にわかに屈辱を感じてしまった
邇邇ニニギ芸は、

(もう、二度とこの術はしない)

そう心に誓った。

『……では始めます。この場から動かないで下さい』

砂漠に大きくしなる一株の稲は、再びゆさゆさと穂を揺らし始める。

辺りには、カラカラと大きく音が響きわたり、稲は黄金の色を強めながらさらに輝きを増していく。

つられたように、下に座する大粒の米も、周囲に煌々と純白の光をもたらしした。

真朝は何かを言いたげに、夜尊をじっと見た。その表情は不安という二文字が浮き上がっているかのよう。

夜尊の顔は面に覆われており、その表情をうかがい知る事は出来ないが、かわりに真朝の手をぎゅっと握りしめ、緊張感なくぶらぶらと揺らす。

その行動は、今の彼女にとってありがたいものだった。

やがて目を開けていられないくらいに光が満ちると、真朝は顔をそむけ、固く目を閉じた。

心臓は、ドキドキと鼓動を速め、うるさく体を駆け巡る。
これから一体何が起きてしまうの。――そう、考えていた。
しかし不思議と不安ではない。怖くなんかない。
それはずっと夜尊という存在を、手で感じていたからだった。

「マアサ、ついたヨ。目をあけてごらん」

夜尊の声で、真朝はおそろおそろ目を開けた。
強い光とは一転、周囲は暗い。……あまりにも暗く、闇に閉ざさ
れている。

その上肌寒い。

真朝は力が抜けて、へなへなとその場に座り込んだ。

何が起こったのかさっぱりわからず、目をぱちぱちとしばたかせる。
無意識に手を地につけると、ひんやりと固い材質が伝わってきた。
「えっ!？」

驚き、手を跳ね上げる。

そこはもう砂ではない。紫檀したんに覆われた、冷たくつややかな床。

「ねえ、ここどこ？」

真朝は夜尊を見上げた。ぼんやりとそのシルエットが確認できる。

「ン? ボクの家だヨ」

その声は、嬉しいのかはずんでいた。そしてその手は真朝を軽々と抱き上げる。

「ボクの家、案内するネ!」

「お待ち下さい、夜尊。重要な話があります……！」

ニギはあわてて制止するが、夜尊はおかまいなしに簾すだれを跳ね上げ、仄暗い回廊へ飛び出していく。

真朝は目にする光景に驚きを隠せない。

巧妙に編み込まれた紅い簾は豪華な金の刺繍で縁どられ、その上ではさまざまな色に光るうす絹が幾重にも重ねられ、風でそよぎ、幻想的に目に写る。

またそれ以上に、柱、天井に施された装飾の豪華なこと。

円柱の柱に塗り重ねられた漆うるしはなめらかに黒光りし、所々に埋め込まれた金や真珠は鮮やかに虹光を放つ。

天井を覆いつくす彫刻は、気の遠くなるほど細かい文様、七宝つなぎの鳥とり襷たすき。一体どのくらいの時を費やせばこれだけのものが造り上げられるのか、測りしれるものではない。

「なんなの、この家……」

真朝は小さく呟いた。

「……こ、これは夜尊、お久しぶりです。ここでお待ちする無礼、なにとぞお許し下さいますよう……。物音がいたしましたので、勝手にこちらへ参りました」

突如聞こえる女の声。流れるようでいて、その声色はまさに甘い香りの花。

見ると、女は手を胸の部分で合わせ、深々と頭を下げている。

その頭上では七色に輝く羽衣がふわりと舞い、足元では細かなヒダのついた裳がゆらゆらと揺れている。

「天宇受賣アメノウズメ、久しぶりだね。中に入れバ？ サルタヒコがいるヨ」

「夫が……？」

アメノウズメは顔を上げた。

真朝はその女の人間離れした美しさに、思わず息を飲む。かつてフランスの美術館で見た印象派の画家、ルノワールの絵画のよう。透き通るような白肌、吸い込まれてしまいそうな闇色の瞳。

そして、その身にまとう衣裳に、目が釘付けとなってしまう。

繊細な刺繍が施された美しい衣はあまりにも薄く、彼女の体はうつすらと透けてしまっている。上衣はとくに、その意味をなしていない。

それは、本当にそれでいいの！？　と聞きたくなってしまうほど。

「ところで……その御婦人は、どなたでございましょう」

問われて真朝はハツとして、あわててアメノウズメの形の良い胸から視線をそらす。

見ていた事がバレなければいいのだけれど。と内心焦りまくりである。

夜尊は真朝をひよいと抱え直し、

「今日からボクの奥さんになるヒト。よろしくネ」
と、歌うように言う。

「左様ですか。ようやくご結婚されるのですね。それはめでたき事。……慎んでお祝申し上げます」

アメノウズメは妖艶に微笑み、再び胸で手を合わせると、深々と頭を下げた。

彼女の黒髪は、さらさらと前に流れ落ちていく。

真朝は思わぬ言葉に身じろいだ。

「ちょ、ちよっと何なの。は？　今日？　奥さん？　な、何なわけ？　は？」

「言つとくけど拒否できないヨ？ それにキミ、ボクの言う事、ちゃんと聞かつて言ったもん」

額にはイヤな汗が浮かび、真朝はごくりと唾を飲んだ。

「ね、ねえ……嘘でしょう？」

「嘘じゃない」

「……じ、じゃあ、本当に今日結婚……するの？」

「うん、本当に本当に今日結婚するノ」

真朝が受けた衝撃は、例えるならすべての髪が白髪になりそうなほどのもの。

それにかまわず、夜尊は真朝を抱えたまま軽やかにぴよんぴよんと飛び跳ね、西対にしのだいに向かっていった。

0042* 炎の女

蘇芳簾すおうすだれの向こう側、天孫 邇邇芸ニニギの命は片眉をつり上げながら、
聞耳を立てつつ回廊の様子をうかがっていた。

大きな目は閉じていると錯覚するくらい細められ、その表情は何かを企んでいるように怪し気に目に映る。

それを間近で見ている猿田毘古サルタヒコは、ミチルを担ぎなおすと、夜尊もニニギ殿も突然どうしたのかと不思議に思い、首を横にひねってみせた。

「……ニニギ殿、先程から何をされておるのです」

ニニギは眉をゆがませたままでサルタヒコをいちべつすると、

「会話が聞こえなかったのですか？ 夜尊は本日結婚する気の様子。

……これは、高天原を揺るがす一大事です」

と歯をギリギリと噛みしめた。

その言葉にサルタヒコは大きくこくりと頷いて、一丁締めのようにひとつ大きく手拍子を打つ。

「いやあ、本当にめでたき事ですな！ まさに高天原の一大事。ようやくこの夜之食国よるのおくににも、ご世継ぎが誕生される事となりましょう。まさに安泰、拙者も後ほど祝詞を述べに……」

「愚か者！」

声を荒げ、ぴしゃりとニニギは遮った。

何がなんだか訳も分からず、サルタヒコは一步後ろへ下がり、素早く彼に向かってひざまずく。

「これは失礼致した」

「……サルタヒコ、ここへ五の部べの首長を集めて下さい。夜尊をお止めしなければ、私も貴方も生きてはいられませんよ」

「なんですって!!?」

回廊にいた天宇受賣は、断りもせず、簾を跳ね上げ中へとづかずか入っていく。

ニニギは目を見開き、サルタヒコは口をあんぐりと開け、アメノウズメの端整な顔をみた。

彼女は肩で息をし、ニニギを鋭い眼光で睨み付けている。

「な、何ですか、アメノウズメ。勝手に中へ……」

たじろぎながら、ニニギはようやく言葉を発することができた。それほど、しりごみするほど、アメノウズメの迫力はすさまじい。

「何です、ではないでしょう! 我が夫、サルタヒコが生きていないとは、命の危機とは、一体どういうことなのです!? ニニギ、返答次第では容赦いたしませんよ!」

「いや、サ、サルタヒコだけではなく私も命の危機……」

ニニギは呟くが、声が小さくアメノウズメには届かない。彼女は顔をカッカと赤くしながら心底腹を立てている。

サルタヒコは妻を畏怖の念を込めて見、「ウ、ウズメ殿……。天孫ニニギ殿を呼び捨てとは何たる事……そ、それより主に向かつてなんたる無礼を……」

「うるさい、サルは黙ってなさい! これは私とニニギの問題。それよりその肩の女、何なのよ? ま、まさか、浮気……!? 返答次第では……」

アメノウズメはピンと親指をつき立てて、自らの首に向けて指し、左から右へとそれを横断させた。そして親指はゆっくりと下へ向けられる。――それは、無言の「殺す」という合図。

サルタヒコは、あわてて肩に担いだミチルをドスンと床に下ろし、首を大きく振りながら、自らの潔白を妻に必死にアピールした。

「ご、誤解だ! これはその、大いに誤解。仕方なくこの女を担いでいたのだ! そもそも拙者はウズメ殿ひとすじであり、他の女子おなご

など目に写らぬ。本当だ！　これは本当。真実ゆえ、拙者の言葉を信じて欲しい」

下唇をかみしめながら、アメノウズメはサルタヒコをギロリと睨み、

「後で一から十までみっちり説明してもらいます……いいわね？」とすぐむように言い、視線を再びニニギに戻した。

彼女と目があつたとたん、ニニギは緊張からか、口にたまった唾をぐくりと音を立てて飲み込んだ。

しかし意外にも彼女は手を胸の部分で合わせ、深々と頭を下げて敬礼をする。

拍子抜けしたニニギは「え？」と言葉を漏らしそうになった。

「ニニギ、取り乱して申し訳ございません。どうかお許し下さいませよう……。恥ずかしながら私は夫の事となりますと、頭に血が昇り見境が無くなってしまいます。それから夜尊のご結婚に関し、何やら問題があると見受けましたが、そのわけを五の部の首長の1人として、この私も知りたく存じます。どうか御説明くださいませんか」

ニニギは腕を組み、軽くため息をついた。

「すみませんが説明することはできません。貴女には他にやっただきたい事があります。先刻私は依頼しましたね？　あしはらのなかつくに葦原中国の者達を根堅州國ねのかたすくにでも耐えうるように仕上げてください、と。これは有能な貴女にしかできない事と私は考えています。そろそろ彼らは目覚める頃。急ぎ東の対屋たいのやに向かい、備えて下さい。……貴女には大いに期待していますよ」

アメノウズメは納得できないと言わんばかりの表情を見せているが、やがて断念したように、

「過分なお言葉、痛み入ります。御期待に添えますよう、尽力致します」

と小さく告げる。

それから再度敬礼すると、長い睫を伏せたまま、ふわりと浮かぶように簾の向こうに消えていった。

……その後、しばしの間、部屋は静寂に包まれる。

「貴方の妻は、太古の昔から少しも変わりませんね……。燃えさかる激しい炎のような女性です」

ニニギは目にかかる一筋の髪を横に撫で付けながら、彼女の消えた方向を見つめ続けた。

「ニニギ殿、どうかお許し下さいますよう。罰するならば、代わりに拙者を」

サルタヒコはアメノウズメと同じように、深々と頭を下げて敬礼をした。

「彼女を罰する気など毛頭ありません。それに私は、炎が好きですよ。……とても」

口を弓形に歪ませながらニニギは言う。そして、続ける。

「サルタヒコ、時間がありません。とりあえず五の部の首長をここへ」

「……御意」

0042＊ 炎の女（後書き）

★用語説明。

高天原＊たかまがはら……神様がすんでいる世界。お空の上に存在します。

夜之食国＊よるのおすくに……夜尊がおさめる国。ちゃんと治めているのか謎。霧に包まれた、謎がもりだくさんの国。

葦原中国＊あしはらのなかつくに……私たちが済む世の中の事。地上。

根堅州國＊ねのかたすくに……スサノオが治める国。現在、まだ謎の世界。

0043* 彼の脳裏を占めるもの

その部屋は完全に長い夜が支配していた。

「闇」「黒」――いずれの表現も相応しい。

そこには月明かりや星に該当する光は一切なく、まさに夜之食国よるのおすくにという国本来の姿を表している。

現在座敷では総勢10名の葦原中国あしはらのなかつくにに住まう者が乱雑に横たわっている。が、彼らは得てして自らここに進んで居るわけではなかった。

「うう……」

ひとつ、うめき声上がる。

声を発したのは、ヘルメットとゴーグルを装着したままの、尹ユン太柳テユという青年だった。

目は未だ固く閉じられており、彼の鼻頭には大粒の汗の玉が浮かんでいる。

そう、彼の脳裏は現在悪夢に支配されているのだった。

彼の悪夢。それは――

ハーレーダビッドソンに跨がる彼は、ひたすらまっすぐの道を悠々と走っていた。

左右に広がるのは、太陽を反射して宝石のようにキラキラと煌めき続ける広大な青い海。

そして後部座席に座るのは、普段から思考の大半を占めてやまない大好きな“あいつ”。

一つ年上の“あいつ”は栗色のマッシュカールをなびかせて、眩しい為か、大きなアーモンド型の瞳をうっすらと細めている。

彼女の存在を背中で感じながら、とかく彼は幸せに包まれていた。それは思わず口元が綻んでしまうほど。

「ちょっとテユ。何笑ってんのよ」

そう言った後、彼女は彼と同じように微笑みを浮かべる。同時にその白い頬にはえくぼが浮かぶ。

「べっつにー。笑ってねえし」

振り向いて、彼は優しい目で“あいつ”を見つめた。

白いレースのワンピースを着た彼女は、相変わらずとても可愛く美しい。

他愛のない会話が彼にとって幸せで、彼女の声、その姿を見ているだけで、心は充分満たされて、彼女さえそばにいてくれるならもう望む物は何もないと強く思えるほどだった。

と、その時、彼の視界には、信じられない物が映ることとなる。

「うわ、なんだあの女……!」

彼の目がとらえたのは、品のない露出高めの花柄ワンピースを身につけた、がっしりとした体型の女。

眉毛が濃く、若干カモメ眉となっているのが特徴的だ。

女は必死の形相でハーレーに追いつこうと全力疾走している。

それは人間が出せるスピードとは、およそ考えにくいもの。

彼は恐ろしくなり、さらにスピードを上げていく。すでに時速100キロを軽く超えていた。

「テユくん、待ってえ」

女は甘ったるい声を発しながら、ゆさゆさとFカップの大きな胸を揺らしながらひた走る。

女が地面を踏みつける度に地鳴りのように道は揺れ、同時に海には波紋が広がっていく。

その両手は左右に大きく開かれており、追いつかれれば絶対抱き締められてしまいそうだし、あばらも何本か折れてしまいそうだと、彼はそら恐ろしく思った。

「は、早いわね。人間離れしてる……。っていうか、止まってあげないの？」

“あいつ”は冷静に猛ダッシュする女を見ながら言った。

「ば、バカ。止まるのは絶対自殺行為だ。……………くそ！ 塚本うぜえ」

女は走りながらすごい音量でこう叫ぶ。

「テユくん付き合ってー」「ご飯行こうよー」「映画見に行こうよー」「そんな女より私にしなよー」

いずれも腹の奥底にズンとくる重い声。彼はその声が聞こえる度に、どんどん暗くげっそりしていく。

もう言葉を発する気力もない。

しかもどんなにスピードを上げようと、それに応じて女もどんどんスピードを上げるだけ。

「テユくん、止まってよお。止まってくれないなら、私、私……！」

女は一層大きな声でこう叫ぶと、どこから取り出したのか、いつ手にしたのか、銀に輝く錫杖しゃくじょうを天空に向かってかざし、シャラシャラと音を鳴らし始めた。

みるみるうちに、女の体は煌々と輝きを放っていく。

彼はそれを見て驚きを隠せない。

「はぁ！？ うそだろ。な、何してるんだ塚本……」

恐怖心はさらに増し、彼の額からは汗が流れ落ちる。

彼はそれを拭うと、真剣な顔つきで目一杯スピードを上げた。
まさしくレーサーのような、限界への挑戦。

女の発した光がようやく落ち着いた頃、そこにいるのはいつの間にか女ではなく、天狗面を顔につけた山伏装束の者であった。まるで手品、イリュージョン。

その腰まで届く長い髪は白く、麻で出来た法衣も白い。

真っ白の中、赤い天狗面のみがぼっかりと浮いたように鮮やかに映えている。

天狗面は低く囁れた声で、「逃がさぬぞ、少年」と呟き、素早く左手の人差し指を立て、右手でその指をにぎりしめた。――印である。

突如、ハーレーとユニ・テュ、そして“あいつ”は空気の塊のような物に弾き飛ばされ、大きく空へと舞い上がる。

彼は“あいつ”を見失わないよう、咄嗟に手を伸ばし、その体に触れようとした。が、あと少しで届きそうな時、彼よりも先に彼女の体をひよいと抱える者がいた。

「なっ!？」

声にならない声を発した彼に、“あいつ”を小脇に抱える者は言った。

「キミには絶対渡さないヨ？」

告げると黒いマントを翻し、消えた。

0044＊ 話しかけてもいいかい？

「待て！」

半ば叫ぶようにしてユン・テユは目を開けた。

横たわる彼の体はびっしりと汗で覆われている。

すぐに目を左右に動かし、“あいつ”の姿を探そうと試みたが、グレイがかった瞳がとらえることが出来たのは、漆黒と言っているほどの一面の闇。――海はない。

「はぁ、夢か。……痛っ」

安堵も束の間、上体を起こそうとした瞬間、片手がひどく痺れていることを知り、テユはゆっくりと痺れていないほうで痺れた手をさすってみた。ビリビリとした感覚が伝わってくる。

彼は仰向けのままで目を閉じて、痺れが治るのを待つ事にした。その間、自分のいる場所がなんとなく座敷のような所だと認識する。

（どこだ……？　ここ）

ル・コルビュジェのサヴォア邸を模したづくりの彼の家には、畳は一枚もない。彼にとってあまり馴染みのないものである。

しかし畳独特のい草の匂い、そして京都で嗅いだ事のあるようなお香の匂いが鼻孔をつく。

彼は心当たりがなく、ひどく混乱した。その上自分の他にも人がいるのか、呼吸する音がそこかしこから耳に届き、それはますます不安を助長するものであった。

次第に鼓動は早くなり、頭を覆うヘルメットとゴーグルがひどく息苦しいものへと変化して、彼は恐る恐るそれらを脱いだ。ついでに首にぐるぐると巻きつけたチェックのストールをも外していく。

髪は汗で濡れており、少し伸びた長い髪を後ろにかきあげながら、

テュは今置かれている現状を冷静に整理してみた。

（たしか俺はバイトに行ったはずだよな。でも行った覚えはない。
……そういや、うぜえ塚本を後ろに乗せたな。……で、それから…
…）

「やあ、君、起きてる？　話しかけてもいいかい？」

突然話しかけられ、テュの体はびくりと飛び跳ねた。心臓はしばらくと早鐘を打っている。

声のする方向を見やったが、目はまだ暗闇に慣れておらず、何もわからない状態だ。

「……誰」

心臓に手を当てながら、問う。

「ああ、失礼。僕は^{アーサー}Arthur ^{ギース}Guise ^{ギャロット}Garrort。アーサーでいいよ。……で、君の名は？」

話しながら声の主は、ZIPPOライターに火をつけ、自らの顔を照らし出した。

暗闇にぼんやりと浮かび上がるのは、彫刻並みに顔の整った、美しい絵画を想わせる西洋人。

すぐに火は消え、辺りは再び黒く塗られた。

「俺はユン・テュ」

「そう、よろしくユン君。僕はね、君の少し前に目覚めたんだ。ここは、一体どこだろうね」

「さあ、知らない」

「僕はね、とてもワクワクしているんだ。そう、こんなに^{エキサイ}excitedするのは久しぶりさ！」

アーサーのワクワク感は今さら口に出されなくても、声のトーンで充分痛いほどテユにも伝わっていた。

彼は冷ややかにため息をつき、こんな状況でこいつアホかと心底思った。

「ユン君、この現状は感動せずにはいられないよ！　まずあの歴史的建造物でもある大鳥居に出会うことが出来たのは特筆すべき素晴らしい点だけれど、大鳥居の他にもこんな素敵な部屋があるなんてね！　僕は感嘆せずにはいられない。実は先ほどこの部屋の内装を少し調べてみたんだ。そうしたらどうだい、僕は極上の幸せに包まれたんだ。生まれて初めてさ！　こんな気持ちは。まさかこれほどまでに美しい彫刻や調度品をこの目で見る事が出来るなんてね。このようなSpecialな体験が出来た事に、僕は素直に感謝したい。この国、日本は最高の奇跡の国さ。声を大にして『有難う』と叫びたいね！」

（なんだこいつ、うぜえ……………勝手に1人で叫んでろ）

テユは咳払いを一つすると、アーサーに背を向けるように寝返りを打ち、「……………そうだね、よかったじゃん」と呟くように言った。

0045* クロムハーツ

「ねえ、ユン君。それより君も、そろそろ気がついたんじゃないかい？」

「は？」

テユはアーサーに背中を見せたままで、わずらわしそうに眉をひそめた。

彼の頭の中は、現在うぜえという言葉で占めつくされている。

「この部屋の暗さは異様だと思わないかい？ 黒を幾重にも塗り重ねた黒……漆黒すぎる闇。うん、そうだね。この表現がふさわしいね」

（……何言ってるんだこいつ。電気がついてないんだから暗いのは当然だろ）

そう思いながら、テユは黙って仰向けになり、辺りを見回してみた。

相変わらず黒い空間は広がり、アーサーの輪郭すら、部屋の天井や壁ですら、何も把握することはできない。

しかし、さほどそれを疑問に思う事はなかった。彼にとって暗いという事よりも、バイトに出かけたはずの自分が座敷に横たわり、その上こうして見知らぬ外国人と話している事のほうが疑問であり、不思議で不可解。

あまりにも訳の分からない非現実的すぎる現状に、テユは痺れているのも忘れ、無意識に両の手を固く結んだ。

まずいと思ったのも束の間、幸い痺れはほぼとれており、テユは小さく「あ」と呟く。

「僕はもともと夜目がきくほうなんだ。だから少しの暗闇くらい、

すぐに目が慣れて見えてしまう。これはもう僕の特技といっても過言ではないね。……ところがどうだい、ここは本当に僕の常識を覆す所さ。なぜならこの僕でさえ、全く闇に目が慣れず、何も見えないままなんだ。暗いままさ。これはどういう事か、起きてから僕はずつとあれこれ考えてる。でね、出た結論はね、この部屋の闇の質は、僕らの知っている闇の質とはあきらかに異質、すなわち別物だという事さ。そのくらい光源と言える物が何もないんだ。光がわずかにも存在しないなんて、不思議で興味深い所だと思わないかい？」

別に。と思いながらテユはゆっくりと上体を起こし、すぐさま手探りで、畳らしきものの上で手を滑らせてみた。

アーサー以外にも、人が絶対近くにいるはずだと思っただけだからだ。

「……ユン君？ 僕の話聞いてる？」

アーサーの心配そうな声が闇に響く。

「え？ ああ、聞いてるよ。それよりアンタ知ってるか？ ここに俺ら以外の人がいるよな。息する音、聞こえるし」

シュカツという音とともに、アーサーは再びライターに火をつけた。

今度はZIPPOではなく、100円ライターののような音。再び彼の耽美な顔が幻想的に浮かび上がる。

火は人の心を落ち着ける効果があるという。

知ってか知らずか、テユも少なからず、多少なりとも不安な心を落ち着かせる事ができた。

アーサーは火をともしたままで、静かに目を伏せて言う。

「うん、人はいるよ。僕らの他に8人いるね。内、女性が2人。あ

とは全員男性ばかりさ。皆まだ眠っているよ」

テュは手を滑らせるのを止め、「へえ、調べ済みか。……さすがだな」と感心した。

それを聞いて、アーサーはニイと笑みを浮かべ、同時にライターの火を消した。

「この^{ライター}L i g h t e rはね、実は隣の人の^{ポケット}P o c k e tから拝借したんだ。僕のはすぐに^{ガス}G a sが切れちゃってね、参ったよ。……本当に日本人は喫煙者が多くて助かるね」

言われてテュは、まさかなと思いつながらスキニーデニムのポケットに手を入れてみた。――が、ライターはない。

「お、おい、てめえ、俺のライターも盗りやがったな！」

「……ああ、君の^{ライター}L i g h t e rはどんな^{ライター}L i g h t e r？」

「クロムハーツのジツポ」

「^{クロム}C H R O M E ^{ハーツ}H E A R T Sね。……これだね」

再びアーサーは、ZIPPOライターで火をつけた。その微笑みは、さながら空を舞う天使のよう。

それがテュの怒りをさらに煽る。

「返せ!!」

0046＊ 我が名は秘密

「CHROME ^{クロム} HEARTS ^{ハーツ}は僕も好きだよ？ ほら、見て。お揃いだね」

アーサーは、ZIPPOで自分の財布を照らし出す。それは、ビルウォールレザーのスカルウォレットチェーンがついた黒い鮫革の財布であった。

「んなこと知るかよ。とりあえず、返せ！」

テュは殴りたい衝動に駆られていた。アーサーの不敵な笑みには、悪さをしでかしてしまったという申し訳ない気持ちは微塵も感じられない。

「ここへ取りにおいでよ。そうすれば返してあげるよ」

「くそつ、何だよ偉そうに」

「偉そう？ そうかな、きつと気のせいさ」

テュは大きく舌を打つと、ヘルメットとゴーグル、ストールを手探りでとり、明かりのほうへと這い出していく。

途中、腕であろうものや髪の毛だといえるものに触れたりもした。その都度、なんで俺がこんな目に……と思いつながら、アーサーの方を鋭く睨み付ける。

アーサーはそれを知る由もなく、テュが来やすいように、中腰でZIPPOライターをつけ続けてくれた。

しかし一見親切そうにみえるその行為は、テュにとって早くガス欠を招く事になってしまう迷惑行為といえ、増々テュの心をイラつかせ、俺のじゃなくて100円ライターで灯せよカス、と思わせる結果となっていた。

そんな中、アーサーは飄々とした表情で再びテュに語りかける。

「ねえユン君。僕や君を含め、ここにいる全員のCircadia ^{サーカディア}」

n rhythmは狂っていると思わないかい？ 僕は今、うつすらと眠気を感じるよ。君はどうだい？ 僕の時計は現在午後4時近くを指しているけれど、このように皆眠ってられる事や僕自身のこの眠気に対してひどく疑問を感じる。これはどうしたことだろう。君はこれについてどう思う？」

その問いは、やはりテユにうざいと強く思わせるものだった。が、彼を引きつける単語があった。

本来なら、別に。と答えたい所だが、「サーカディアンリズムって何？」と逆に問う。それは彼にとって初めて聞く言葉だった。

「概日 ^{がいじつ} rhythmのことさ」

「……は？」

答えはテユの期待したものとは全く違う物で、ますます何なのか分からなくさせるもの。

（もうこの男の話は聞きたくない）

テユがそう思った瞬間、ふわりと風が舞い上がり、彼の髪をなびかせた。

時同じくして、アーサーの持つZIPPOライターの火も消える。

「概日リズムか。それはな、少年、外から受ける周期的変化を排除した状態で見られる、生物の一日周期の生理的活動および変動、すなわち体内時計を指す。覚えておくが良い」

そんなどうでもいい事いちいち覚えてられるかよと思いつつ、テユは声のする方向へ視線を移した。

男なのか女なのか。はたまた若いのか年老いているのか、見当も

つかない澄んだ声。

「失礼。我が姿、人であるそなた達には闇の中、見る事は叶わず。よって我は此処を明るくしようと試みる。……いざ」

鈴の音とともに、声の主は何かを始めた。

テユもアーサーも、それが何なのか見当がつかない。

闇はすべてを包み隠している。

「ねえ、君の名は？ 教えてくれるかい？」

アーサーが問うと同時に、鈴の音は止む。

笑い声のみが、返答するかのごとく部屋に響く。

「勇気ある人、我が名を問うのか。して、そなたの名前は？」

「僕は^{アーサー}Arthur ^{ギース}Guisse ^{ギャロット}Garrot。そして彼はユン

君だよ。で、君は？」

「……我が名は秘密。教える事は叶わず」

0047* 漆黒の黒・純白の白

「はっ？　なんだよ秘密って。しっかりこっちの名前を聞いたくせに、嫌な奴だな」

アーサーよりも先に反応したのはテユだった。彼にとって、声の主は気取っているとしか思えない。彼は気取り屋が嫌いだった。無論アーサーもしっかりとテユの気取り屋リストの上位にランクインしているのだが。

「ユン君、喧嘩腰はいけないね。もう少しだけ　Tone down　してみようか」

「うるせーよ！」

アーサーの言動、一つ一つがテユの感情を逆なでる。テユはどいつもこいつもうぜえ奴だと思い、ヘルメットを畳に強く打ちつけた。

「少年、落ち着くが良い。秘密といえども時至ればそなた達に名を明かそう。我はそう断言する」

言い切ると声の主は再び鈴の音を暗闇で響かせる。

……　チリ、チリリ、リ、リン　……

鈴に合わせ、衣擦れの音が耳に届く。おそらく風の流れと軽快な足音から、舞を舞っているのではないかと二人は想像する事が出来た。

「「「悉に……闇し殿の膝戸。是に万の神の声のりたまひき時自ら照り明りきて咲ひき……」」」

声の主の発した詞と言える言葉に、テユは訳も分らず首をかし

げる。それはまるで百人一首の流れるような独特な節。

「とても興味深い詩だね」

アーサーは満足そうに言う。

……チリリ、リリ、リン……

ようやく鈴の音は止む。すでに衣擦れの音も風も足音も、ない。

「間もなく此処は光に包まれ目を開ける事は叶わず。よって、閉じるが良い」

「は？」

テュは本日、幾度眉をひそめただろうか。それは眉間にしわが出来てもおかしくはない程。

次の瞬間、声の主が告げた通りに、漆黒の黒は一転、純白の白へと塗り替えられる。

テュとアーサーの視界はハレーションを起こした状態となり、あまりの眩しさに二人は顔をしかめ、目を固く閉ざした。

「光は持たず。月讀^{ツクヨミ}の力は強きゆえ、程なく消える。急ぎこちらを見るが良い。我はそなた達の前でのみ姿を現す」

「は……？ 見ろだと？ 無茶言うなよ、眩しすぎて目が潰れる」

テュは目を塞ぎながら言う。彼の頭は現在くらくらと揺れている。そんなテュを横目に、アーサーはタイトなスーツの上着よりサングラスを取り出し、おもむろにかけた。そして声の主を見る。

「これは……！」

途端揚がる驚きの声。

アーサーが目にしたのは、いつか博物館で見た絵のような、古めかしい姿をした者だった。

そのヘアスタイルは、それぞれ両の耳の横で長い髪を8の字型に結った美豆良^{みずら}で、服装は筒袖^{つつそで}の上衣に絹褌^{きぬばかま}。それは膝のあたりで銀糸によって足結^{あゆい}されていて、生地にはいずれも蓮の花をモチーフにした豪華な刺繍が施されている。全てが上代の貴族男性を思わせる装飾。

中性的な顔だちのその者は、顔だけ見ても男か女か見当がつかないが、胸が平らなことでその骨張った骨格から男である事が分かる。アーサーはその顔にひどく見覚えがあると感じたが、誰であったか思い出す事はできず、しばらく男の顔を見つめながら考えた。

「渡来人には我が姿、珍しく映ると見える。が、我にもそなたは珍しい」

言うとな男はアーモンド型の目を細めて笑う。

「君は素晴らしいね。生きた歴史だよ」
アーサーは男に近づいた。

「あれ……?」

ようやく目を開ける事ができたテュは、男を見て驚いた。

「ちよっ……真人くん。埴輪みたいな格好して何やってんの?」

0047* 漆黒の黒・純白の白（後書き）

「「「しんじつ悉に……くら闇し殿のとやうす膝戸。是に万の神の声のりたまひき時自ら照り明りきて咲わらひき……」」」

★注意……汗

上の譚（？）は、作者が昔の古事記の本をみながらてきとうにそれらしき言葉を並べて作ったものです。意味正しくない可能性大！

といいますか、100%間違っている事でしょう。汗。
時間のある時に、こっそり差し換えます。って、だれもこんなところ、注目していないでしょうけどね。アハハ！

★用語説明。

上代……遠い昔のこと。日本の歴史で指すなら、古墳、飛鳥、奈良時代くらいを指します。

と、いうわけで、拙い作品、お読み下さりどうもありがとうございます！
再見！

08. 7. 27. n i c o

0048＊ 呪い

暗いはずの東の対屋たいのやから、ひとすじの光が漏れている。

寝殿と対屋をつなぐ渡殿わたりのどので、胡座をかいて座っていた天宇受賣アメノウズメはそれに気づき、「ええい」と怒りを露にしながら、鼻息荒くその場に立った。

その際彼女の足首に巻かれた鈴は、さまざまな音を立て、周囲に彼女の存在を知らしめる。

「これはどうした事……。寝ぼすけ達だと思っていたら、断りもせず勝手に明かりなどつけて。起きたなら起きたと早く知らせろ！ わずらわしい奴らめ」

ブツブツと言いながら、七色に光る羽衣をひるがえし、ふわりと浮かびながら対屋を指す。

アメノウズメはこの上なく不機嫌であり、必要以上に苛立っていた。こめかみには血管が脈々と浮き上がっている。

その理由は三つ。

一つ、遠い昔から親交のある夜尊の結婚が、阻止されようとしている事実。

二つ、結婚を阻止せねば、夫の命に危険が及ぶやもしれない事実。

三つ、五の部の首長のひとりである自分が、召集されないばかりか蚊屋の外にされ、内情を関知しない事実。

彼女は懷から五寸ばかりの大きさの鍵ニギをするりと取り出すと、それをぐっと握りしめた。先刻、邇邇芸ニニギハヤヒの命より預かった、宝石が埋め込まれた贅かんぬきのかぎりをつくした鍵。

すぐさま門かどの錠前に差し込むと、横木をずいと力一杯引き抜いた。

「起きたか盆暗ぼんくらども！！」

大声を張り上げながら、彼女は勢い良く扉を開ける。

「……ん？」

目に映る現状に、アメノウズメはただ立ち尽くす。
部屋は相変わらず暗く、明るさは、光のかけらは微塵もない。

「こ、これは。確かに光は漏れていたはず。しかし、何故。……もしや私としたことが……気のせいの早とちり、と？」

自らに失望の念を抱きながら、彼女は部屋を隅々まで見渡した。

「なんだ、早とちりではないではないか……。フ、フッフ。目覚めている者、二人。そして……」

さらに目を大きく見開きながら言う。

「招かれざる者、一人。……いや、一柱。……そうでしょう？ 遠き日の君。私の目はごまかせませんよ」

アメノウズメは懐かしそうに、その一柱の神を見る。一柱の神は、衣擦れの音を闇に響かせながら彼女に近づいていく。

「我が術、やはりそなたには通じぬか。……否、是は我の仕組みし事」

外からの仄暗い灯に照らされ、一柱の神は顔を露にする。アメノウズメは彼の顔を昔から熟知している。

「手の込んだ事をなさいますね。相変わらず小細工が上手なお方。目をこうして凝らさなければ、気づきませんでしたよ」

「再び逢い見えるは我が喜び。そなたは変らず美しい」

「貴方様ともあろうお方が、何故このような処へ。一体何の用でし

よう。正直に申してくださいますなら、天孫ニニギには報告致しますん」

アメノウズメは胸の前で手を合わせ、神に向けてお辞儀をする。

言葉や態度は丁寧だが、その表情は刺々しい。

何も答えず、神はアメノウズメの目と鼻の先にずいと寄ると、彼女の頬を両手で包む。

「な、何を……」

アメノウズメは焦り、目を泳がせる。

「是は口止め。そなたと我のみの秘密。我の名、我が姿、他言は無用」

言うと神は、アメノウズメに口付けた。

アメノウズメは必死に抗おうとしたが、無駄な事。彼女の影には、いつの間にか鉤が打たれている。

神は微笑みながら、ゆっくりと顔を起こし、彼女の頬を優しく撫でた。

アメノウズメは終始彼を睨みつけている。

「その表情も麗しい。……しばし耳を拝借」

ぴくりとも身動き出来ないアメノウズメは、黙って耳を貸すしかない。

それをいいことに、神は大胆に彼女の腰に手を回しながら、ひそひそと耳打ちをする。

彼女は思いきり顔を歪めて話を聞いていたが、その内容に驚愕し、

「まさか、何たる事！」と大きく叫んだ。

思わぬ話に、アメノウズメの目や口は大きく開かれたまま。

「是は事実。よって我は阻止しようと試みる。……此処に我が現れたるは、隠密にそなたに協力を求める為。返答は如何に」

言いながら神は、彼女の長い髪を弄ぶ。

「か、考える時間を。……突然の事で、混乱しています」
「承知。明晩、我はそなたに逢おう」

……チリリリ、リン……

神は腕に巻いた鈴の輪を、なめまかしく揺らして鳴らす。
同時にアメノウズメの影に打たれた鉾は、儚く消えた。

ようやく自由を取り戻した彼女は、勢いあまって後ろにぺたりと
尻餅をつく。

彼女のしなやかな足に幾重にも巻かれた鈴は、振動でシャラシャ
ラと音を奏でた。

神はその鈴を凝視する。やがてかがんで彼女の白い足にそつと触
れた。

「是は感激。そなたは未だに我が鈴を」

「遠き日の君、変な誤解をしないで下さい。あれ以来、あの日以来、
貴方の鈴は私の足から取れません。どうしても外せないのです。こ
れは何の呪いでしょう」

神は満足そうに目を細めると、アメノウズメの身を抱え込むよう
にして、彼女を立たせた。

「そ、そんな事をしなくても、自分で立てます！」

困惑しながら彼女は神を見、「それより質問に答えて下さい。外
し方を私に――」

神は口元に人指し指を立て、彼女の発言を遮った。

「……今は秘密。時至れば我は語ろう」

そして続ける。

「其処の二人は我が友人。我は彼らと交流する」

「彼ら？」

アメノウズメは神の視線を追い、プラチナブロンドの西洋人と、少し前髪が目にかかる若い青年を確認する。

それから神へと再び視線を戻した時――すでに彼の姿はなかった。

「……相変わらず神出鬼没。昔から変わらないのね」
失笑を交えて呟いた。

0049* プリンシパル

「なあ、盆暗^{ぼんくら}って何？」

予告もなく突然現れた女が発した言葉は、テユにとって初耳のものであった。

「……ユン君、本気で僕に聞くのかい？ それはおかしいよ。なぜなら僕は外国人。日本人である君のほうがずっと詳しいはずじゃないか」

「日本人？ 違うね。俺は半分日本だけど、半分は韓国人。ハーフなんだ。しかも日本人つつつても、祖母はイギリス人だから、日本の血は4分の1しかない。俺って正しくは……何人なんだろうな？」

「Ingiez^{イギリス}だって！？ そうか、だから僕は君に親近感を覚えただね。これからも宜しく。僕達は良き友人だよ！」

アーサーはそう言うのと、テユの肩に気安く触れてきた。テユは頬をひきつらせ、できるだけアーサーと離れようと上体をそらせる。しかしアーサーの力はなかなか強く、離れるのは立たない限り無理だった。

ひどくうざいと思いつつ、テユは開かれた扉に立ち尽くす女のほうを見る。あまりにも暗すぎる為シルエツトしか確認する事は出来ないが、女の背後に恐ろしく長そうな和風の回廊を見、ますますここはどこなんだと頭を悩ませ髪をくしゃくしゃとかきあげた。心当たりはこれっぽっちもない。

「なあ、アンタ。電気つけてよ」

テユは女に向って声をかける。

その声に反応し、女はぴくりと頭を動かした。

「……小僧、電気だと？ なんだそれは」

テユは思わず苦笑する。小僧と呼ばれたのは、生まれて初めての事。

「は？ 電気知らないの？ 明かりだよ明かり。暗いから明るくして欲しいんだけど」

「明かり、か。……フン、電気などと言わずに初めからそう言え、たわけ」

「たわけって……」

女はひらひらと布を泳がせながら、浮かぶようにテユ達のもとへと歩む。

七色の生地はかすかに発光し、彼女の輪郭をぼんやりと浮かび上がらせている。

それはまるで天女のように美しく、テユは思わず幻影的な彼女に目を奪われた。

「小僧、そうジロジロ見るな。私は人に見られるのは好かん」

「う、うるせ、見てねーよ！」

女は祈るように両手を組むとするりと上へあげ、親指と小指をそれぞれ合わせて突き立てた。

——印である。それは孔雀明王が結ぶ孔雀明王印と良く似た印相。それから彼女はテユを横目で睨み、

「……だから見るなと言っている」

「見てねえし！」

テユはどいつもこいつもうぜえ奴だと思いながら、深く息を吸い込んで、わざと大きくため息をついた。

羽衣は七色に輝きながら、女の背で羽のように広がり、鳥の飛翔を思わせるかのごとく、ゆったりと波打っている。

それは目にする者全てを魅了しそうな、神がかった美しさで、テュにCGで作られ出された映画の世界を思わせた。

視覚的に十分すぎる程見事と言える彼女は、さらに魅惑的につま先のみでピンと立つと、踊るように優雅に回転し始める。

その上どこからともなく聞こえてくるいくつもの鈴の音が、強弱を伴ったリズムとなって、彼女の舞を暗闇の中、一層際立たせていた。

アーサーは感極まって、「ブラボーBravo!」と叫びながら、彼女に向けて激しく拍手をする。

盛大な拍手喝采は四方八方にこだまし、回廊の向こう側へと賑やかに伝わっていく。

「ポワントPointe、それにグランGrand フエツテfouette、だね。君はプリンシパルPrincipalなのかな。とても上手いよ!」

「黙れ気が散る! 渡来人、お前も見ろな!」

女は回転しながら大声を張り上げ、厳しく注意する。そして、「かまびすしい奴め」と吐き捨てるように呟いた。

「Oh、これは失礼」

アーサーは一礼すると、目線に困り、とりあえずテュの方向を見た。

女が放つ微かな光から、テュが女に魅入っていることが確認できる。

「ユン君見ちゃいけない。彼女は気が散るそうだよ。アーティストArtist
というものは、得てしてストイックStoicなものさ」

「……は? み、見てねえし!」

「それより僕と話をしよう」

テュは、まだコイツは話足りないのかよと、うんざり顔で舌を打つ。

「そういえば先程の話だけどね、以前習った事を思い出したんだ。たしか意味は、頭の働きの鈍くぼんやりしているさま、つまり『まぬけ』ってことだよ」

「は、何？」

「ユン君ひどいな。盆暗の意味さ。君は僕に質問しただろう？」

「ああ、盆暗ね。……って、俺らはこの見ず知らずの女にいきなりまぬけ呼ばわりされたっつーことか。マジ許せねえ」

テユは女を睨み付けた。

女はそ知らぬ顔でまだグラン・フェツテ（回転）をし続けている。いつまで回るつもりなのかとテユが疑問を感じた瞬間、女はふいにひたりと止まり、腕を優雅に動かした。まさに白鳥。指先からは、光がこぼれ落ちていく。

途端、四方に配置された朧銀杵ろうぎんの豪華な行灯あんどんに、煌々とした火が灯る。

部屋はようやく夜明けとなった。

「うわ、何だこれ、すごい！！」

テユは目にしたものに思わず驚き、感嘆の声をあげた。

0050* 瓜二つの男

まずテユの心を奪ったのは、天井、壁、柱、至る所に施された、龍と樹木の華麗な蒔絵まきえ。その上から、気の遠くなる程細やかな彫刻がびっしりとなされている。それは手彫り以外考えられない。何年費やせばこれほどの物が完成するのか、常人には測り知れたものではない。

龍の造型、その鱗一つ一つにおびただしい宝石が埋め込まれ、光をさまざまな角度で反射し、きらびやかに格調高く見せている。反射した光は巧妙に計算されているのか、座敷に模様となって落ちていく。そのさま、まるで万華鏡。

それらの背後に広がる夜空は、漆で幾重にも塗り重ねられたのであろう、深く濃い墨の中の墨色。全面にダイヤモンドがあしらわれ、それは満天に広がる瞬く星を思わせる。

「なんだこの無駄遣い、すげえ」

テユは呟いて、女の方を見る。

「ちよっ……！」

見たと同時に女の姿に驚愕し、ある一点から目が離せなくなってしまう。部屋の内装よりも、ある意味問題。

「アンタ、それはまずいだろ」

女の体を包む上衣は壮麗な刺繍で大層美しいといえるが、あまりにも薄すぎる絹。彼女のきめ細かな白肌は、完全に形をあらわにしている。

「小僧、私を見るなど言っただろう。しつこいぞ！」

「しつこいって……。つか、見るなって無理だろ。なんでブラを着けてないんだ」

「気安く人の胸を凝視するな！ だいたい『ブラ』とは何の事だ」

「え、知らねえのかよ」

テユは困り顔で、助けを求めるべくアーサーのほうを見た。アーサーはといえば、芸術と言える部屋の装飾、備え付けられた調度品に夢中になっている。テユの視線に気づくはずもなく、時折ルーペを取り出して、あろうことか長々と観察さえしている始末。それはとてもじゃないが、声をかけられる雰囲気ではない。むしろ話しかけるなという殺気まじりのオーラさえ感じられる。イギリス人は紳士だと聞いたけれど、絶対嘘だね。と、テユは思った。

「まったく、しょうがねえなあ……」

本当はアーサーにジャケットを借りるつもりだったが、テユは諦めたように着込んだライダースを脱ぐと、強引に女にそれを押しつけた。

「何だ、汚らわしい」

「着ろ！ 目線に困る」

「何で私がこんなものを着なければならぬのだ」

「うるせー、いいから着ろ！ そういうの、『公共わいせつ罪』って言うんだぞ」

女は「ふん」と鼻を鳴らすと、肩にかけた御須衣みすいと手に持つ羽衣を床に投げ捨て、ライダースにするりと腕を通していく。

「ほれ、着てやったぞ。これで文句はあるまいな？」

テユを睨み付け、堂々と腰に手を当てながら言う。

「お前なあ……きちんと前を閉めろよ。まだ見えてるじゃねーか」
女を包むライダースは開け放たれ、未だ胸は隠されていない。

「どうやって閉めるのだ？」

「うぜえ！ 閉め方も知らねえのかよ。まったく世話がやける」

ブツブツ言いながら、テユは迷惑顔で、ライダースのファスナーにつくスライダーを上へと上げた。

「小僧は変った目の色をしている。……渡来人か」

ふいに女はテユの顔に近づき、物憂げな表情を見せる。テユは女の深い闇色の瞳を目にし、引込まれそうになる。

「て、てめえ、くつつくな！　っていうか、ジロジロ見んな！」

「それはそれは」

女は丁寧両手を胸の前で合わせると、深々とお辞儀をした。

テユは居心地の悪さを感じて目を逸らせるが、その視線の先、ふいに見知った顔を目にする事となる。

横たわる一人の男。それは――

「真人くん!？」

そう叫ぶと、急いで男の傍に駆け寄った。駆け寄る途中、何かを踏んだが、そんなことは気にしない。

真人は相変わらずボサボサ頭にヘアターバンをしていて、目を固く閉ざしている。いつも愛用している眼鏡は、ない。

「大丈夫か!？」と声をかけ、彼を揺り動かしてみる。が、反応はなく、ぐったりとしている。

テユの頭は混乱していた。ここに真人が居るのなら、先程の、埴輪の男は一体何であったのか、と。

「そういえば……あいつはどこに？」

辺りを見回したが、それらしき男の姿はない。

「そいつは小僧の知り合いか」

女は鈴の音をシャラリと響かせながら、テユに近づいていく。その歩みはひたすら妖艶。

それから覗き込むようにして、眠る真人を目にすると、口に手を当て目を見開いた。

「なあ、さっきの奴、どこにいった？ あれは真人くん……じゃないよな」

テユは女に確認するように、慎重な口調で聞く。

「たわけ、あの者は真人という名ではない。しかし、似ている。……遠い末裔^{まっえい}か」

女は押し黙り、腕を組んで思案する。その目は真人に注がれている。

「驚いたな。まさに瓜二つ」

「だよな」

テユは女に同意する。

女はおもむろにテユに背を向けると、怪しく目を光らせた。瞳は血のごとく深紅に染め上げられていく。

「……これは、使えるかもしれない」

ひとり、ごちる。それはテユにも誰にも聞こえない微かな声。そして続ける。

「遠き日の君、運は貴方に味方しているのやもしれません」

0051* その目を開けろ

目を閉じていた男は、激しい腹痛に小さく呻^{うめ}いて身体をよじる。
蹴られたのか踏まれたのか……それは男には分からない。

（痛……。俺っちお腹、痛いかも。つか痛すぎちゃうかも……）

男は腹痛の原因を、ぼんやり頭で考えた。しかしさっぱり分らない。それどころか考えれば考える程、頭の中は白で覆われていく。やがてゆっくりと目を開けた瞬間、男は「うわ！」と大きく叫んだ。

彼が見たもの。それは、目から赤い光を放つ女。光は奇怪な二筋の帯を形成し、ビームのように宙を照らしている。男にとって大げさに言うなれば、まさに恐怖の地獄絵図。

「一人、起きたか」

女は男をいちべつすると、赤い瞳をまぶたで隠す。そして再び開けた時――。男はその早変わりのさまに思わず目を疑った。瞳は闇色、さながらブライス人形のからくりのよう。

「な、何だ、何が起きた？ ホラー!？」

信じ難い出来事に、タクシー会社の制服に身を包む男は、頭を振りながら上体を起こした。腹部には未だ痛みが強く残っている。

（痛っ。なんで俺っち腹痛いんだ？ 蹴られた？ ……それよりこの女、綺麗すぎ。どうなってんだ？ 人形みたい。っていうか女優？）

「佐伯」

女は男の制服の胸につく名札を読んだ。そしてクイと顎を上げ、
「起きたなら早く立て。ぐずぐずするな」

「ええっ!？」

麗しい顔をした女が言いそうもない言葉を発した事に彼は驚き、顔を前へと突き出してみせた。

「いきなりそんな……。何がなんだかさっぱり」

佐伯は腹をさすりつつ女を見上げる。女は冷ややかに見下ろしている。

「ああ、アンタも起きたのか」

女の後ろから、少し彫の深い顔した少年が現れる。彼もまた、人形のような人間離れした男と言えた。白いTシャツにブラックのスキニーデニム。これといって何の特徴もない格好だが、スタイルの良さも手伝って、印象に残るくらいにファッショナブルだ。

佐伯は女にも少年にも全く心当たりはなく、「えっと、君ら誰？」と首をひねりつつ問うた。

「俺はユン・テユ」

佐伯はユン・テユをまじまじと見、ふとある事に気がついた。

手に持つチェックのストール。そしてゴーグル、ヘルメット……。先刻、ハーレーの上で天狗に羽交締めにされていたのは、この少年ではなかったか――

そして彼は思い出す。自分が、そして皆が大鳥居に吸い込まれた事。

「くっそー！ あ的那天狗ジジイめ、どこだあ！」

佐伯は勢い良く立ち上がる。が、すかさず腹を抱えて座り込む。

（うおっ、腹痛い！　じ、尋常な痛みじゃないぞコレ。くそっ、さては天狗ジジイの仕業だな。奴め、見つけたらタダじゃおかねえ！）

「アンタ……なにやってんの？」

テユは怪訝な顔して首を傾げた。その後馬鹿にしたように鼻で笑

い、踵を返して去って行く。

佐伯はテユを目で追い、テユが触れた男を見――、とたんあまりの衝撃に狼狽えた。倒れているのは、遊び仲間でもある後輩。

「うおっ、真人！」

夢中で真人に近づいていく。彼にとって、お腹の痛みどころではない。

「ちょっとアンタ、何」

声に構わずテユをどかすようにして、佐伯は割り込み、真人を抱える。そして激しく揺り動かした。

「まーさーとー！ 死ぬなーっ。目を開けろー！」

真人は反応する事なく、がくがくと頭を揺らしている。

「……アンタ、怖えよ」

テユは佐伯の気迫に押されながらもあきれ顔で言い、「つか、死んでねえし。アンタさ、ちょっとは確認くらいしたら？」と付け足した。

佐伯はムツとしながらテユを見ると、

「なんだ、お前。真人の知り合い？」

「そうだけど。アンタも知り合いなんだね」

「知り合いつていうか、こいつは友達」

言い切ると、再び佐伯は真人を揺さぶり始め、彼の固く閉じたまぶたを、指で上下にこじあげようとし始めた。

「……佐伯、その男をそこまでして起こしたいのか」

「えっ？」

「なら、貸せ」

女は背後からすると強引に佐伯とテユの間に割り込んでくる。

「わ、何す……」

「いいからお前は黙ってろ」

佐伯に対してそう告げると、女は中腰になり、真人のトレーナーの首元をねじって掴んだ。それはまさに不良のする恐喝のよう。

「ちょっと、乱暴な……」

テユは女を止めようとしたが、遅かった。

一足先に、なめまかしく右手をあげた女は――

パン！　パン！

「ええっ!？」

佐伯もテユも面喰らってしまった。

真人を襲うのは、力のこもった激しい往復ビンタ。徐々に彼の頬は桃色に変色していく。

「う……」

くぐもった声を上げながら、真人は渋い表情を浮かべた。それからみるみるうちにアーモンド型の目は開いていく。

「痛えー!!」

0052* 外してはならぬもの

「……起きたな」

女はぽつりと呟いた。

真人は何事！？ とばかりに、自分の頬を両手で包んだ。

その目は絵画を思わせる浮き世離れた女をとらえているが、それが誰であるのか皆目見当もつかず、口から言葉は出てこない。

（誰だよ……）

「真人！」

高校時代の先輩、佐伯が言う。

「真人くん！」

見知った仲である、テユも言う。

二人に視線を移した真人は、

「……ねえ、誰コレ」

消え入りそうな声で問う。

佐伯は一瞬思案するかのように間を置いて、

「俺っち知らねえ。……知ってる？」

肩をすくめ、隣のテユを見る。

対しテユも、「さあ。俺だって知らねえし」と言いながら、首を振った。

真人は自分のトレーナーをひねり持つ女に向き直り、右目を微かに歪ませた。

「……誰？」

女は首元を掴む手を緩めるどころか、力強く握り直し、顔をすれすれにまで近づけてくる。

「お前こそ誰だ」

（誰って聞かれても……）

「さ、坂下真人」

戸惑いながらたどたどしく言う。

「知らんな」

真人はもう、愛想笑いを浮かべるしかない。

（……だろうね。俺だってあんたの事、全く知らないもん）

女はフンと鼻で笑い、ひそひそと小声で話す。

「ところで坂下真人、お前の起源を言ってみよ」

「……は？ 何すかそれ」

「いいから正直に全て言え。その起源は？」

「って言われてもなあ……」

女の意図がわからず、真人はその場逃れに目をしばたいた。

（だいたい起源って何）

「小僧」

気を取り直したように、女は真人を見据えたままと言う。

真人は意表をつかれたようにきょとんとしながら、

「ええっ？ 俺、小僧呼ばわりっすか」

「お前ではない」

言って顔を上げ、テュを顎でしゃくりあげた。

「小僧とはお前の事だ」

テユはビクつと反応し、あからさまに舌打ちをする。

「何だよ、うるせーな」

隣の佐伯はやりとりに、「小僧だって」と肩を震わせ、必死に笑いをこらえている。

「てめえ……」

テユはほのかに顔を赤らめ、佐伯を憎々しげにいちべつした。

「なんだなんだ、そういや鉄二さんとテユって知り合い？」

真人は意外だという表情を浮かべつつ、テユと佐伯を交互に見る。

「いいや、ちがう。初対面」

佐伯は答えた。

「おい、小僧」

女は今度はちゃんとテユを見据えながら言う。

「うるせーな、だから何だっつーんだよ！」

「それを貸せ」

女はテユの持つゴーグルを手を上げて指し示す。と、同時に、ようやく自由を得た真人は、どさりと座敷に落とされた。

「痛っ」

真人は苦痛に歪むが、それにかまわず、女はテユにずいと手の平を差し出し、

「早く貸せ」

「はぁ？ 何に使うんだよ」

テユは渋々女に渡した。

「着けろ」

「……へ？」

女は真人に向き直り、ゴーグルをつき出している。

「いいから早く着けろ。そして私が言うまで、決して外してはならん。……良いな？」

「な、何で。わけわかん……」

「口答えせずに黙って着けろ。お前は他者にその姿を見られてはならんのだ」

「はぁ！？ 意味わかんね」

言いながら真人は自分の目もとを触るが、

「あれ、俺の眼鏡がない！ なんぞっ」

「そんなものは必要無い。これで充分」

女は無理矢理真人の目もとに、ゴーグルを被せ始めた。

真人はじたばたと抵抗するが、無駄な事。女の力は女とは思えないほどに強すぎる。

「ちよっ、やめ……。つか、無茶だろ。俺、目え悪いし……。必要。

つか、無いと困……。って、おい」

被せ終わると、女は満足そうにニタリと笑い、

「似合うじゃないか……。良いか、決して外すなよ」

語尾を強め、念を押すように言った。

「外すとどうなんの？」

真人は聞く。

すると女はしなやかに胸元で両の手を組み、親指と小指をそれぞれ合わせて突き立てた。

——印。……先刻結んだ、孔雀明王印に似た印相。

瞬時、女の瞳は漆黒からみるみる血のごとく赤く染まり、それは例えるならあまりにも濃い紅玉^{ルビー}。

「こうなるぞ……」

薄ピンク色のふくよかな唇を開いた途端、真人の体はふわりと浮いた。その高さ、三メートルばかり。

「うわっ！」

真人の目と鼻の先には、キラキラと乱反射する宝石が埋め込まれた贅のかぎりをつくした天井が広がり、眼下には、驚いた表情のテュと佐伯、そして未だに笑みを浮かべた女がその姿を見上げている。
「やべえ、まじでやべーっ！ 外さない。外しません。だから降

ろしてっ。俺、高いの超苦手！」

「分ければ良い」

女は大きく頷くと、するすると印を解き、その両手を開いて上へとあげた。それからゆっくりと下ろしていく。

女の手の動きと同調するかのように、真人もゆっくりと畳に降りた。

「だ、大丈夫かよ、真人」

佐伯は労るように、真人の肩に手を置いた。

だらしなく尻餅をついた格好の真人は、

「うん、なんとか……。っていうか、何者っすか、あの女。もうこれエスパーとしか……」

ゴーグルを装着した目で佐伯を見上げる。

「……知らねえ。ただ者じゃないよな。手品とかイリュージョンってやつでもなさそうだし……。っていうか、ここどこなんだろうな。

……お前は知ってる？」

話をふられたテュは困り顔で、

「さあ、知らない。けど……変なことだらけで、ぶっちゃけもう何も考えたくないっつーか、考えるだけ無駄っつーか、まじで頭の整理がつかない状態」

そして続ける。

「あのさ、もう俺に聞かないでくれ。ほんと、答えんの無理だから」

0052* 外してはならぬもの（後書き）

こんにちわ！こっそりとこれまでのお話の人物相関図&人物紹介を作ってみました。

パソコン専用ですので、パソコンの方、もしよろしければ、

<http://nicconicco.exblog.jp/blog.asp?iid&acv&dif&opt&2&sr&9067348&date&2001%2D02%2D15+14%3A53%3A00%2E000>

を御覧になってやってください。

でわでわ、引き続き、お話を読んでいただけるとうれしいです。ありがとうございます！

0053* 首飾り

風は吹く。

それは無風の状態が常である夜之食国よるのおくににおいて、大変珍しい事であつた。

しかし依然周囲は濃霧によって包み隠されており、視界は遮られている。

聞こえるのは風音。

合わせて響く、鈴の音。

「是は希有……。よもや波瀾の前触か」

袂たもとを揺らし、男は目を細めながら、風上の方角を見つめている。

周囲には切り立つ岩山。その足元には、檜皮葺ひわだふきの屋根。

それらは霧に阻まれ、ぼんやりとその輪郭を男に伝えるのみ。

現在男は優美な佇まいを見せる寢殿の屋根にすくりと立ち、これから巻き起こるであろう争乱に思いを馳せている。

「月讀ツクヨミ、そなたは如何ほどまでに全貌を知る」

ちらり西に位置する対屋たいのやを見、やがてにんまりと顔を綻ばせた。

「是は驚き。我が姿、気づいている」

男が視線を投げかけるその先、西の対屋からはチカチカと光がこぼれ、点滅し、モールス信号のように男に何かを伝えている。

男は無言で読み取ると、踵を返し、ふわり宙に浮きながら、東のほうへと消えていった。

——西の対屋。

その建物は、名が示す通り、寢殿の西側に位置している。

造りは反対側に位置する東の対屋と全く同じものであるが、内装はがらりとその様式を違えていた。

あちらは夜の世界が織りなされているのに対し、こちらは陽の世界。

眩いばかりのダイヤモンド、ルビー、サファイア、アレキサンドライトといった希少の宝石が、適材適所というべきか、互いに互いを引き立てて、見事壮麗な太陽を表現している。

「すごい……」

壁に向い、口を開けつつ驚く女がひとり。

着用する白いワンピースは、少しばかり薄汚れていた。

「ねえ、これって本物？ なんなのこのキラついた壁……。ここまでいくとアレね、悪趣味ね。昔のマハラジャみたい」

彼女の声に、窓辺に立つ黒いマント姿の者は反応し、軽やかに振り返る。

それから顔を覆う兎面を、ポイと床に投げ捨てた。

「知らない。だってボクが作ったわけじゃないんだもノ。でもこの壁は、今日からキミのものだヨ」

言いながら、手に持つ水晶をポンと上に跳ね上げ、キャッチし、球遊びをし始めた。

水晶はいくばくか光を放ち、その軌道に残像を残している。

「なんで私のものなのよ。こんな趣味の悪い壁、どうしろっていうのよ。知らないわよ」

「ねえマアサ、こっちへ来テ」

真朝はごくりと唾を飲む。

「い、いやよ、絶対嫌」

言って、じりじりと後退した。

先程まで彼女は、黒マントの者——夜尊に、これでもかと膝枕ひざまくらを強要させられていたのだ。今度はなにをせがまれるのか、分ったものではない。

「いいから早く来テ。……でなきゃボク、怒るヨ？」

夜尊は琥珀の瞳で、射ぬくように真朝をただ見つめている。

（うっ、この目、苦手だわ……）

真朝は不自然にうつむいて、

「それより……ま、真人はどこにいるのよ！」

「マサト？」

「私の兄」

「……キミの双子の片割れネ。こっちに来たら教えてあげル」

（ああ、もうっ！）

真朝は地団駄を踏みたい心境になったが、心を落ち着け、夜尊に歩み寄っていく。

夜尊は真朝が手の届く距離まで近づくと、ぴよんと飛び跳ね、目前に立ち、彼女を強く抱きしめた。

「ぎゃあ！ 何すんのよっ。苦し……」

「ねえマアサ、これからはずっとずっとボクのそばを離れないでネ？ じゃなきゃキミを守れない」

「な、何よ……いきなり何なのよ」

手に持つ水晶をポトリと床に落とし、夜尊は真朝の栗色の髪を何度でも撫で付ける。

その行為が気恥ずかしくもあり、気まづくもあり、真朝は何も言えなくなってしまった。

「そうだ、これをキミにあげル」

言うと夜尊は首にかかる勾玉の首飾りを取り外し、真朝につけた。

「ちよっ……」

突然の出来事に、真朝はただただ狼狽える。

たくさんの勾玉にぎつしりと彩られた首飾りは、常に微かに発光し、見れば見るほど美しく、不思議な材質。

まだ幼い太陽を受けて光る、朝露を思わせるもの。

「そんな、もらえないわよ！　こ、こんな高そうなもの……」

夜尊は無言で笑むと、再び真朝を抱きしめた。

彼女の首元で、勾玉はカチャカチャと音を立てている。

ひどく混乱しながら、真朝は夜尊の肩ごしに、開け放たれた薮戸^{しとみど}の向こう、白く煙る外を眺めた。

0054＊ 矢は伝える

――東の対屋。たいのや

女は胡座をかき、頬杖をついている。

その面持ちは憮然ぶぜんたるもの。

目はすでに紅玉ルビーから 黒曜石 にも似た瞳に戻り、座敷全体を隈無く映している。

未だ眠る者、話し込む者、美術品に無許可で触れる者……。中つ国の者をそれぞれ見やり、ひとつ溜息をついた。

それは魂がエクトプラズムとなってこぼれおちると思われるくらいの、深い深い溜息。

女はこの先どうするべきであるのかと、考えあぐねていた。

「……風……？」

ふいに唇を動かした。

耳にはビョウビョウと、風音が届いている。

「なぜ風が？」

不振に思い、女は浮ぶようにして立ち、薨戸しとみどの向こう、外を目指した。

「なあ、アンタ。腹減ったんだけど。何か食い物ない？」

ユン・テユは目にかかる髪を耳にかけつつ、女を背後から呼び止める。

女は振り返りもせず、

「小僧、邪魔するな」

ぴしゃりと言いつつ。

「……何の邪魔だよ」

テユは頬を膨らませて、女の背を睨みつけるが、女はやはり振り向かない。

「黙れ。私は聴いている」

「は？ 何を」

「風だ。風が吹いている」

「……わけわかんねえ」

後ろ姿を見送るテユは、ひたすら首をかしげるのみ。

「風が何だっつーんだよ。変な女」

――カタリ

女は格子を開けた後、固く閉ざされた部戸をゆっくりと開けていく。

外は変わらず、けむり立ち籠める白い世界。

他には何も見る事はできない。

女の長く艶やかな髪、そして細やかなヒダのついた裳もは、ふわふわと風に流され揺らめいた。

「不気味な事……。なぜ風が？」

女は周囲を見渡そうと、目を凝らしてみた。

切り立つ岩山はようやく女にのみ、その姿を現していく。

さらに見ようと身を乗り出した瞬間、ふいに聞こえる、鈴の音。

……チリリ、リ、リン……

女の肩は上に飛ぶ。

「……き日の君」

そう、声にはならない声で呟くと、戸を荒々しく持ち、勢いよく閉めようとした――が、閉まる寸前、阻まれる。

「何を……」

恐る恐る、見れば蔀戸の下側、神々しくも立つ白羽の矢。

その篋ふみの部分には文がつき、女は震えながらそれを手にする。

女は努めて平常心を装いながら、終始無言で文字を読む。狼狽えてしまえば、負けてしまう気がしたからだ。

やがて全てを読み終えると、計ったように、文は煙を上げ始めた。
「こ、これは!？」

火はチリチリと懷紙を燃やすが、手には熱さは感じられない。

女は目を見開きながら、揺らめく炎を見つめ続けた。

ゆらゆら、ゆらゆら。

それは遠い昔へ魅惑的に誘こゝろうもの。

女の脳裏は、桜が舞い散るかのごとく、甘い香りとともに霞んでいった。

「うわっ、すっげえ霧。……つか、雲? まじでどこだよココ」

女は突然の声に、再び肩をびくつかせる。

見ればすっかりテユと佐伯、真人に囲まれて、あろうことか閉めようと試みた戸は全て開け放たれている。

「ば、馬鹿者! 勝手なことをするな!」

声を張り上げるが、三人三様外に夢中。中でも佐伯はひよいと廂ひさしを飛び越え、外へと飛び出していく。

「佐伯、それ以上歩むと死ぬぞ!」

女の声に、佐伯は霧に包まれながらも振り返る。

「……え、本当？」

女は深く頷くと、

「本当だ。この寝殿は切り立つ崖に立てられている。たやすく出歩くと、真っ逆さまに落ちて死ぬ。死にたくなければ戻るが良い」

「もう、早く言つてよ」

「それに……霧には呪がかけられている。霧は知らずとも道に迷うように出来ている。分かったら、私の姿が見えるうちに、早く戻つて来いこの愚か者」

話を聞いていたテユと真人は、頭に浮ぶ「？」を消し去れない。

「なあアンタ、ここは一体どこなんだ？ 霧、普通じゃねえし、それに崖つて……」

女は射ぬかれた矢をぎりぎりとはきながら、テユの問いに淡々と答える。

「夜之食国」

「は？ 今、何つつた？」

「よるのおすくに、だ」

一言一句、ゆっくりと言う。

「何それ、初耳」

女の近くで佐伯の声。

佐伯の姿を確認すると、女は薙戸を固く閉じた。

それから人指し指で、空を切り、なにやら文字を書いていく。

薙戸はかすかに発光し、やがて光は消え失せた。

三人は口を開け、ただぼんやりとその様を眺めた。

「なあ……アンタ今、何をやったんだ？」

再びテユが問うと、

「封だ。誰とは言わんが、再びどこぞの愚か者が外へと考え無しに飛び出しかねんからな」

「お、俺っちのこと！？」

「そうかもしれんな」

女が流し目で佐伯を見ると、佐伯はきまり悪そうに頭をかいた。

「つか、『よるのおすくに』って何すか」

真人はゴーグルを額に押し上げながら聞く。

「外すな。誰が許可した大馬鹿者！」

女は真人の目を凝視しながら、思いきり彼の頭をぶつ叩く。そして、「痛え！」の声にかまわず話を続ける。

「夜之食国とは、夜尊のおわす国。お前達は恐れ多くも、夜尊の神殿内に現在いるのだ。普通なら、有り得ぬ事だぞ？ 光栄に思うがいい」

「……夜尊？ 誰それ、知らない」

真人はゴーグルを目元に戻しながら言う。が、再び強く頭を叩かれてしまう。

「痛っ！ な、なんで叩く！？ 俺、ちゃんとゴーグルつけただろ！」

「馬鹿者、敬意が足りんわ」

「け、敬意！？」

頭をさすりながら、真人はふてくされ、「わけわかんね」とそっぽを向いた。

「……それにしても、いい音すんなあ。相変わらず空っぽかあ」

佐伯は大口を開けてカラカラと笑いながら、真人の頭にぽんぽん触れる。

「ちよっ、それは鉄二さんの頭でしょ。俺、正直かなりパンパンに詰まってるっすよ」

佐伯の手を遮りながら、真人もつられて屈託なく笑った。

0055* 円卓の騎士たち

座敷に笑い声が響く中、それを後目に、趣味に没頭するもの一名。金髪碧眼の見目麗しい男、アーサー・ギース・ギャロットは、スワロフスキーがあしらわれたループで、調度品を細部にわたり観察していた。

時折彼は、ジェスチャーを交えながらも独りごちる。

「本当に素晴らしいね！」

現在彼の手にあるものは、高さ50センチほどの厨子^{ずし}。その透かし彫りの飾金具の下には玉虫の羽がぎっしりと敷き詰められており、光を帯びて、気品高く表情豊かに趣き深い色相を見せている。

「この様式は西院伽藍^{さいいんがらん}よりもやや古い時代を示しているね。おそらく飛鳥時代の様式かな？ とにかく厨子の扉も壁面の装飾画もこの上なく素晴らしい。これは捨身飼虎^{しやしんここ}図だろうか？ それとも施身^{せしん}間^{かんげず}倅^{んげず}図？ ……調べてみる価値はありそうだ。国宝、玉虫厨子^{たまむしのずし}も、かつてはこのぐらい美しかったんだろうね」

長い長いわけのわからない独り言。彼は至極幸せに包まれていた。そして厨子の隣に配置されるのは、簡素な造りの、長さ80センチばかりの古ぼけたひと振りの剣。

アーサーはすると鞘から剣を抜き、柄を強く握りしめた。

その刀身は、息づいているかのように、ギラリと煌めき光を放つ。「これは驚きだね。錆どころか傷ひとつなく、しかも驚くほど軽いつきてる。それに何だろう、この光は……。どこか物悲しくもあり、儚くもある。しかし、それがこのSword^{ソード}をより高尚に、より美しく見せているんだ」

恍惚とした表情で、その切っ先に手を触れる。同時にプツリと親指から血は滴っていく。

「切れ味も良い。よく手入れされているね」

言うど、血液をぺろりと舐め、スーツの胸ポケットからハンカチ

を取り出した。

折り込むようにして傷口に宛てがうと、生地はみるみる深紅に染まった。

(……思ったよりも、かなり深く切ってしまったようだね)

あまりの痛みに気を紛らわせるべく、彼は部屋をじつくりと見渡した。

初めに目についたのは、先刻仲良く話したテユだった。

(ユン君はそうだな……僕にとって ガラハッド Galahad と言えるね)

ガラハッド —— それはヨーロッパに広く伝わる伝説、“アーサー王伝説”の中の登場人物であり、アーサー王に従った円卓の騎士の名前。

そして次に視線を移した先には、大鳥居の前で会話した青年、真人がいる。

(そういえば彼は何ていう名前だろう？ 彼はそうだな、忠義の騎士、ガウエイン Gawain か)

ガウエイン —— これもまた、円卓の騎士の内のひとり。

……そう、アーサーは自分をアーサー王に見立てていた。実際彼の名前も、中世の騎士道物語“アーサー王伝説”の主人公、アーサー・ベンドラゴンからきており、勝手に人を円卓の騎士に例えるのは、幼少の頃からの癖であった。

(だめだ。ランスロット Lancelot がいないと始まらないね)

ランスロット —— 円卓の騎士であり、アーサー王伝説の主要人物。

アーサーは、真人の隣で笑う褐色の肌の男、佐伯に目をつけ、整った弓なりの眉を動かした。

(程よい筋肉に、気高い顔……。彼はまさに円卓の騎士長、裏切りの騎士 ランスロット Lancelot に相応しい。……決まりだね)

アーサーは生まれたばかりの三人の騎士達を満足そうに眺め、手にする年代物の剣を見た。

すでに刀身は鞘に納められている。

(これはさしずめ僕の エクスカリバー Excalibur だね)

エクスカリバー —— アーサー王が「湖の乙女」より与えられし、王者の剣。

彼はもう一度鞘を抜き、鋭く光る剣を見つめた。

「この阿呆！ 何をしている。 とつかのつるぎ 十拳劔に勝手に触れるな！ お前ごときが触れて良いものではないぞ！」

座敷に怒声がこだまする。

アーサーは声の主、漆黒の髪の子を見、一度大きくまばたきをした。

女はわなわなと怒りに打ち震え、肩で息をしている。

「渡来人、これはただの とつかのつるぎ 十拳劔ではない。恐れ多くも、かの伊邪那 イザナギ 岐命の剣、天之尾羽張。 あめのおははり 刀身に一筋でも傷をつけようものなら、貴様は生きてはいられんぞ！」

「君は怒った顔も素敵だけど、きつと笑顔のほうが素敵だよ ニミエ Ni me」

「ニミ……！？ 何だそれは、ふざけるな！」

ニミエ —— それもまた“アーサー王伝説”の登場人物のひとつ、
「湖の乙女」の名であった。

0056＊ 館内放送

「Ni^{ニミュー}me はね、Ki^{キング}ng Ar^{アーサー}thur に Ex^{エクスカ}cali^{リバー}bur を授けた湖の妖精なんだ。偉大なる魔法使い、Mer^{マリー}lin^ンの弟子でもあるよ。Ni^{ニミュー}me は物語の中で Ba^{ベイリン}lin に殺されてしまったり、La^{ランスロット}ncelot を養育したり、Pe^ペleas^{レアス} と結婚したりと、波乱万丈な――」

「だまれ！」

教鞭を執る教師のごとく嬉々として語るアーサーを、女は怒りに任せて遮った。

しかし女の目は、アーサーの持つ剣の切っ先を終始追い続けたまま。

切っ先は踊りながら滑らかに上下に動いており、さながらオーケストラを操る熟練の指揮者を思わせる。その優雅な素振りには、知つてか知らずか女の言葉を嘲笑っているようで、さらに女はこめかみに青筋を色濃く浮ばせることとなる。

「わけのわからん事をペラペラと。かまびすしい奴め！ いいから早く、十拳^{とつかのつるぎ}劔を元に戻せ。この阿呆！」

「僕はね、Hy^{ヒステリー}sterie はあまり体に良くないと思うんだ。…だから La^{レディ}dy、もう少し落ち着いてみないかい？」

「たわけ！ お前が鞆^{さや}に戻すまで、おめおめと落ち着いてなどいられるか！」

二人のやりとりに対し、テユと佐伯、そして真人は傍観者に徹していた。

しかしながら、最初に口火を切ったのは、ニヤニヤしながら腕を組んでいる佐伯。

「あの外人、まじですげえな。女を徹底的に振り回してる」

言った後、ふと思い当たる事があり、「おい」と真人を肘でつついた。

「何？」

「なあ、お前道ばたで、あの外人と一緒にいたよな。ほら、大鳥居の前……」

「いたけど俺、知り合いじゃないっすよ。急に話しかけられた」

「そっかあ。………っていうかき、アイツ、あれに似てない？」

えっと、あれ。……ローレンス・オリヴィエ？」

真人は無言で顔をしかめた。誰の事だかさっぱり分からない。

テュは身を乗り出すと、佐伯に対し、「似てなくね？」と首をひねり、付け加える。

「アラン・ドロンとかジュード・ロウのほうが系統が似てると思うけど」

「ああ、たしかに。そっち系でもあるよなあ」

佐伯はうんと頷いた。

すでに完結している二人を、真人は渋い顔でいちべつする。

「ちょ、待って。俺、ローレンス・オリヴィエ知らねえし。誰それ」

テュは真人に向きなおり、「ヴィヴィアン・リーの旦那だった奴。

あと、『嵐が丘』に出てる」と説明した。

「見た事ない。つか、ヴィヴィアン・リーって誰」

「『風と共に去りぬ』の主演」

「あ、それ知ってる。真朝がおととい見てた。俺、退屈すぎて途中で寝たけど」

「その映画、ずっと前に俺が貸したんだ。……今ごろ見たのか、あいつ……」

テュははにかむと、鼻をこすり、微かに笑った。

「貴様、もっと丁重に扱え、この無礼者！」

再び怒声が座敷に轟き、三人は女とアーサーに注目する。

アーサーは、ちょうど剣を鞘に収めた所であった。

「Lady、心配しないで。僕はこう見えても美術品の扱いには慣れているよ」

「慣れているだ？ そのどこが慣れているのだ、この初心者め！
罈つばの音を立てるなど、非常識にもほどがあるぞ！」

「でも僕が見た時代劇では、こうして音を立てていたよ」

アーサーはもう一度、剣をわずかばかり抜くと、鯉口と罈とを力キリと鳴らしてみせた。

「馬鹿者！ 貸せ！」

女は剣をぶん盗ると、肩幅に足を広げ、前かがみに勇ましく立つ。そして、続ける。

「いいか、鞘に収める時は、鯉口に静かに切っ先をもっていき、切っ先を入り口に乘せてから、こうして静かに入れていくのだ。刃は絶えず上向きに、だ。音は最後までひたすら立てるな。これを守れん者は、尊き天あめのおはばり之尾羽張に触れる資格などないっ」

鼻息荒く実演付きで解説する。

アーサーは貴公子然たる風采で、サラリと髪をかき分けた。

「君はJeanne d'Arcジャンヌ ダルクみたいだね。……了解したよ、
Nimueニムエ」

「そのおかしな名で私を呼ぶな！」

女が血管が切れそうになりながらも叫んだ時――

『ピーン、ポーン、パーン……、ポーン』

素頓狂な声が響いた。一度聞いたら忘れられないような、独特な舌足らずの声。

それは不思議な余韻を持って、館内放送と言うべきか、水紋のよう
に寝殿内隅々にまで浸透していく。

東の対屋にいる者は何事かとばかりに、皆、一様に上を見上げた。
ただ、女だけは、胸の部分で手を合わせ、45度の最敬礼を行い
始めた。

そして声は告げる。

『ただいまより、ボクとマアサの結婚式を行なっちゃうヨ〜!』

0057* マアサと真朝

聞き覚えのある名前に、テユは眉間にしわを寄せた。

「は？ ……今、真朝って聞こえた？」

彼はしかめっ面のまま、呆氣にとられている真人に問う。真人は「聞こえたかも」と同意した。

途端――

「結婚ってどういうことだよ！」

「し、知ら……」

テユは凄まじい迫力をもって、真人に詰め寄っていく。トレーナーを鷲掴みにされた真人は、バランスを崩し後ろに倒れそうになった。が、すんでのところで佐伯に肩を支えられる。

「ちよっ、落ち着けて」

佐伯はテユの腕をつかんで真人から離すと、その後流し目で最敬礼のままの女を見た。それからテユを真直ぐ見据え、

「見てみるよ。俺っちとしてはあの女が事情を知ってると思うけど

……どうよ？」

促されたテユは、女へと視線を移すと、無言で軽く頷いた。

そして踵を返し、ゆっくりと女の方へ歩いていった。

「……おい、アイツ突然人が変わったけど、何？」

佐伯はひそひそと真人に耳打ちをする。

「ああ、いつものことっすよ」

真人は苦い顔してトレーナーのしわを払った。

「真朝が絡むとね。……テユは真朝が好きだから」

「まじ？ つきあってんの？」

「いや、まだみたいっすね」

「なるほどねー」

頷きつつ佐伯はニヤリと微笑んだ。

「お前も大変だなあ。……つか、真朝ちゃん、ここにいの？」

「さあ、どうなんすかね。でも俺、真朝を送る途中だったし、いるかもしれない」

「じゃあ、探してみないとなあ」

「え、手伝ってくれるんすか？ 鉄二さん、真朝と会った事ないのに」

「いや、あるよ」

「え？」

真人は思わず佐伯をまじまじと見た。佐伯はきまり悪そうに真人から目をそむけると、

「まあ、ちよつとした知り合い、かな」

「へえ……。接点なさそうなのに意外」

その後二人は沈黙し、やがて申し合わせたように女に絡むテュを眺めた。

「おい、答えろよ！」

「うるさいぞ小僧、邪魔だ！ 私はこれから忙しい」

女はいきり立つテュを後目に、スタスタと部屋の中央に向かって歩いていく。

「待てよ、結婚式って誰と誰のだよ！」

テュは女の肩をつかみ、引き止めようとした。しかし、すぐさまその手は振払われてしまう。

「小僧には関わりない事。お前はしばらく待機だ。邪魔するな！」

「言えよ！ 真朝ってあの真朝？」

「私はその“真朝”を知らん。……言っておくが、お前に構っている暇はない」

「いいから誰が結婚すんのか言えよ！」

「くどい！ 言ったはずだ。お前ごときに関係はない。これ以上話しかけるな！」

ギリギリと歯噛みしたテユは、するどく女を睨みつけ、

「てめえ、人が下手に出ればいい気になりやがって」

「何だと小僧……」

負けじと女の瞳も鋭さを増していく。

二人には、互いに一步もゆずる気配はない。

「君たち……」

見かねたアーサーはやれやれと溜息をつき、対峙する二人の間に割って入った。

ガラハッド

「GalahadもNimueも、もう少し落ち着くべきだよ。大切なのはrelaxする事。リラックスイライラは何も生み出さないよ。Peaceを心がけてみようか」

身ぶり手ぶりで、平和の二文字をアピールする。

(……うぜえ。何言ってるんだ、こいつ)

テユは華麗に言葉を見殺した。一方、女はといえば、ふつつつと怒りを募らせていく。

「だまれ！ 勝手に変な名前をつけおって……。どいつもこいつも邪魔だ！ 何度も言わせるな、私は忙しい！」

同時にくしゃくしゃとヒステリックに髪をかきあげると、口をもごもご動かし始めた。

ふいにテユもアーサーも何が始まるのかと不思議に思ったが、次の瞬間、彼女は頬を膨らませ、プツと何かを吹き飛ばす。

吹き出したもの。――それは無数の黒塗りの針。

勢い良く飛ぶ針は、テユ、そしてアーサーの影を、同時に固く縫

い止める。

「——っ！」

自由を奪われてしまった二人は、そのままの状態で立ち尽くす事となる。足はもちろんのこと、手や顔さえも動かない。話すことさえできない。微動だにしない。

「悪く思うな。しばらくそうしていてもらうぞ？ 私は急ぐ」

女はテュとアーサーを交互に見やると、背を向けて、その場にふわりと胡座をかいた。

それから目を閉じ、胸元で両の手を組み、親指と小指をそれぞれ合わせて突き立てる。

——またもや、“印”。

「ハハハ！ なにしてんだあの女。……つか、あいつらもどうかしてるぞ。何やってんだ？」

一部始終を見ていた佐伯は、声に出して笑い始めた。

彼の目には、女は大仏。後ろのテュとアーサーは、付き従う“使徒”に見える。

あまりの滑稽さに、可笑しさを止められない。

その様子に隣の真人はただ首を傾げるばかり。

「え、何？ 何かあったんすか？」

眼鏡がなく視界がぼやける真人は、目を思いつきり細めてみた。しかしなにも把握する事はできない。

「……さっぱりわかんねえし」

呟きながら、まず探すべきなのは、真朝より眼鏡なのではと考え始めた。

0058＊ 手伝おうか？

——時は遡^{さかのぼ}り、少し前の出来事。

「う……」

仄暗い部屋では、ひとつ、小さなうめき声が上がった。
部屋の中央部では朧銀^{ろうぎん}の燭台に、蠟燭^{ろうそく}が一本灯されていて、チリと炎を舞わせながら辺りをぼんやりと浮き上がらせていた。
床は固く、冷たい紫檀^{したん}。それは艶やかに磨きぬかれ、上にあるものすべてを鈍く映し出している。——蠟燭然り、人然り。

天井には黒光りする野太い梁^{うっぱり}が堂々たる様で架かっており、大きな古民家、庄屋屋敷を思わせる。天井は高いのか、梁以外は闇に飲まれ、他、把握する事は不可能だった。

左右にあると思われる壁も然り。遠いのか、黒く塗りつぶされていて、確認できない。

広い、あまりにも広い部屋。

聞こえるのは、蠟燭がジジジと芯を焦がす音。

「……ここ、どこ？」

口を動かし、言葉を紡ぐ。しかし、問いに答える者はいない。
声は部屋にこだまして、静かな空気に飲まれて消えた。

「たしか私は……」

頭を捻る。捻り出す。

その際、頭をかすめる不可思議な砂嵐。不気味に光る、二つの赤い目。――赤い宝石、ピジョン・ブラッド。

ひるがえる黒いマントは永遠の闇を思わせて、首元でカチカチと鳴る勾玉の首飾りは儚い月を思わせた。

次第に脳裏に浮ぶ映像。ひらりひらりと揺れる彩絵檜扇^{さいえひおうぎ}。それは雅びやかに輝いて、悪夢のごとき残像を残す。

「そういえば……！」

一際大きな声が響く。

スーツに身を包んだ女――浅田ミチルは、急いで上体を起こし始めた。

……そう、彼女は思い出したのだ。

不気味なエンジン音を轟かせ、現れた地獄の使者のごときハーレー
ーダビッドソン。

光る錫杖^{しゃくじょう}は太陽の光を反射して、あまりの眩しさに彼女は固く目を瞑った。

そして。

おそろおそろ開いた眼^{まなこ}に見たものは……まさに壮絶、妖しい大鳥居に吸い込まれていく人々。中には彼女の雇い主、アーサー・ギース・ギャロットの姿もあった。が、瞬間、彼は彼女に向けて微笑んだ。

……放心するしかなかった。あまりにも信じられない光景。そして、謎のアーサーの笑み。

あの時、どのくらい放心していたのだろうか。

彼女がようやく意識を取り戻した時――。すでに乗っていたハイエースのドアは開かれていた。

「ねえ、ここは危険だよ。死にたくないなら早く出テ？」

黒いマントに身を包む、兎面はゆっくり歌うように告げた。
贅のかぎりをつくした面は、光を受けて輝いていた。

……

「そういえば……。そう……。いえば……。街が砂漠に変わってしまったのよ！」

ミチルは叫ぶ。

声は広い部屋に、ぐわんと余韻を残しつつ——消えた。

（どうなってるの？ 砂漠にいたはずよ。……。でも、今は違う。何が起きたっていうの）

すくりと立ち、ミチルは辺りを見回してみる。

しかし見える範囲は狭すぎて、疑問はますます積もるばかり。

足元にはしくしくと冷たさを伝える黒い床。そして着用したスーツは湿っており、直に体温を奪っていく。

腕を組むようにさすってみても、あまりにも寒く、気休めにもなりはしない。

彼女の自慢の形の良い唇は、紫色に変色し、カタカタと小刻みに震え出していた。

（考えるのよ、考えなければ。今、出来る事をやるしかない。出来る事は必ずあるはず）

ミチルは思案する。

檻に入れられた動物園のトラのごとく、ぐるぐるとその場を落ち着きなく歩き出す。

それは寒さのせいもあるが、彼女の癖であるともいえた。

「――そうだわ」

彼女は歩みをぴたりと止めた。

「私以外に人がいたはず。……女の子。そう、白いワンピースを着ていた子。彼女はどこに？ ……それに……それにあのお面の黒いマントの奴。あいつはどこにいるのかしら……」

ミチルは手を伸ばし、蝋燭がチリチリと燃える燭台を握りしめた。手にはずつしりと重厚な重みが伝わってくる。

震える手。

鼓動を速める自らの心臓の音は、ますます彼女を緊迫させた。

彼女は勇気を振り絞り、辺りを照らそうと上に灯を掲げた――――途端。

【手伝おうか？】

ミチルの肩は盛大に飛び跳ねる。

「だ、誰!？」

突然頭に響いた声に、冷えきったミチルの体温は急激に上昇する。それは低く、自信をうかがわせる男の声……。

【お前はこれから白い女と黒いマントを探すのだろうか？ 思いは違えど目的は同じ。俺が手伝ってやるよ】

「あなた、誰？」

【誰？ か。……こうしよう。俺はお前で、お前は俺。……今は、な】

「意味が分からない！ 何なの！？」

【分からなくていい。深く考えるな。……ところで邪魔な奴らはいないようだな】

「邪魔な奴らって……？」

【だから深く考える必要はない。安心しろ、俺はお前を守ってやるよ。……今は、な】

ミチルには何が何だかさっぱり分からない。常識はいとも簡単に覆されている。

彼女は目を落ち着きなく泳がせてみたが、人の姿、そして気配は全くなかった。だが、声は鮮明に彼女に届いている。

【おや、兄上が始めるようだ】
「は……？」

怪訝にミチルが顔をしかめた時――

『ピン、ポーン、パーン……、ポーーーーン』

聞き覚えのある声。

『ただいまより、ボクとマアサの結婚式を行なっちゃうヨ！』

0059* 取引き

「この声……！」

ミチルは驚きの表情で黒い空間を素早く見上げた。

空気は重く留まっでいて、圧迫感さえ感じられる。

その先、黒いマントが嘲笑うかのようにひらひらと揺らいでいる気がして、彼女は口を閉じるのも忘れ、ただただ上を見続けた。そしてミチルがようやく開けっ放しの口に気づいた時……

——ククク

さも地獄の底にいと錯角しそうな、姿なき者の不吉な低い笑い声。それはミチルの全身隅々にまで反響し、彼女はあまりの息苦しさ胸を押さえつつ、暗い面持ちで左右を見回してみた。が、目に映るのは、変わらず仄暗い蠟燭ろうそくの灯の向こうに広がりを見せる闇。人の姿はやはりない。

【女、気づいたか。お前は正しい。声は黒いマントの声。探すのだろうか？ ……とりあえず左へ行け】

ふてぶてしい命令に、ミチルは拳を固く握った。彼女にとって、納得できるものではない。

「何なのよ」

呟き、突っ立ったままで頭こうべを垂れた。

【何をしている、早く行け】

しびれを切らしたのか、男はさらに低い声色で催促する。しかし彼女に左へ向う意志は毛頭ない。

「何なのあなた、偉そうに。あなたが何者かも分からないのに、素直に従うはずないじゃない。それよりあなたはどこにいるの。その前に姿を見せてくれる？」

彼女は床を睨み付けている。寒さか怒りか定かではないが、手どころか体さえも微かに震え始めていた。

【……深く考えるなど言ったはずだが？】

「あのね、深く考えるに決まってるでしょう？ 私は今、右も左も分らない状態なのよ！？」

【だから左へ行けと言っている】

「そういう意味じゃない！ 何がなんだか分からないって言ってるの。言っておくけど私、説明されるまでここを動く気ないわよ？ あなたのこと、全く信じられないの」

——ククク

再び聞こえる嘎れた笑い声。男の思惑は皆目見当つくものではない。ミチルは探るのを止め、眉をひそめながら、またもや周囲を見渡してみた。が、依然その姿を捉えることは叶わない。

【俺は親切心から言ったのだが？ お前を手伝う、と】

「それは嘘ね」

鼻で笑い、ミチルはその場に正座した。その行為は徹底的に、一歩たりとも動く気はないという強い意思表示だ。

【ほう……嘘、と？ お前は断言するのだな】

「断言出来るわね。あなたは先程、私と目的が同じと言ったわよね？ それってあなたも探したいってことだわ」

【そうだが。俺達が向う先は同じ。だから手伝ってやると言っている】

ミチルはおもむろに首を振る。そして長い睫を静かに伏せた。

「手伝う？ 親切心？ ……違うわね。あなたは私を利用したいのよ」

【何故そう思う？】

問いの直後、顔を上げた。その瞳は意志のこもった強い光を宿している。

「あなた一人で行けるのなら、あなたはとっくに向ってるはずよ。役に立たない私にわざわざ声をかける理由は？ 私には、あなたが私を助ける理由がわからない。何の得もないじゃない。だとすれば理由はひとつ。思うに私がいないと向かえないんじゃないかしら？ あなたは手伝いたいんじゃない。逆にどうしても私の手助けが必要なのよ。ここはあなたにとって、知りつくしているけど、不都合が多い場所なんじゃないかしら。……違う？」

——ククク

三度。得体の知れない、底知れぬ不気味な声。

ミチルは平静を装っているものの、内心は穏やかではなかった。実際、その腕にはびっしりと鳥肌が立っている。寒さからともいえるが、それだけではない。

【……お前は喰えない女だな】

ミチルは不敵に笑ってみせた。しかし握りしめた燭台は小さく震えている。それは紛れもない、恐怖のためだ。怯む事なくはつきりと言葉を伝えているとはいえ、相手の正体は全く不明であり、つかみ所は一切ない。その上男は、心臓を鷲掴みにされている感覚に陥る程の、ただ者ではない威圧的な存在感、凄まじいオーラを終始放ち続けている。そんな中、彼女の腰は今にもぬけてしまいそうだった。にもかかわらず、彼女はそれをおくびにも出さない。それは無礼な奴に負けたくはないという確固たる意地、プライドだ。

「忘れないで。あなたは“手伝おうか”と私に聞いたけれど、私はまだ返事をしてないの」

【俺の助けがなければ、お前は動けないが？】

「あなただって、私の助けがなければ動けないんでしょ？」

やがて一拍の間をあけ、

【人のくせに面倒な奴。……ならこうしよう。俺と、取引きをしな

いか？」

ミチルは満足げに微笑んだ。

「取引き？ 悪くないわね。利用されるよりずっとマシだわ」

燭台は、揺れるのをやめた。

0060＊ 龍の宝珠

……ジジジ……

炎は踊るように、赤、黄、橙、青、白、様々な色に変ぼうしなから周囲を明るく照らしている。

何とも形容し難い美しい光はたいそう興味をそそるもので、手持ち無沙汰な真人はしばし火に釘付けとなっていた。

火は足元に置かれている豪華なろうぎん臙銀杵の四角い行灯内あんどんで揺れているのだが、行灯の四隅には重厚な龍の彫刻が施され、それまた真人の目を奪うに充分たるもの。

細部にわたりリアルに表現された艶めく鱗、王者のごとく堂々たる様で突き出た鹿角、見るもの全てを畏怖させるであろう鋭い鬼眼……。

中でも特筆すべきは龍がその手に持つ宝珠。ほぼ球体にブリリアントカットされた大粒のダイヤモンド。ハリー・ウィンストンクラスのものといって過言はない。

（すげえ。こんなん、いくらすんの！？　なんだここ、大金持ちの家？）

興奮し、ちらり隣の佐伯に視線を移すと、彼は女の方角を見続けていた。

話しかけようと思ったが、声をかけず、代わりにひざを折り曲げ腰を落とすと、龍の宝珠を間近で見つめた。

その見事なこと。

宝石内に進入した光は内部で複雑な屈折を見せ、計算されつくした美しい煌めきを発している。

そしてそれを力強く握る鋭い五爪。

真人は無意識に手を伸ばし、指先で宝珠をつんと突いてみた。

ポロツ。

「……あ」

——なんと、龍の宝石はいとも簡単に取れてしまった。

真人はごくりと唾を飲み、あわてて畳に転がる直径20ミリ大の宝珠を拾い、必死で龍の手に戻そうと試みた。……が、うまく握ってくれやしない。

（やっべえ、壊した！）

咄嗟に女の方を見ると、ぼやけてうまく見えないが、未だ座り続けている事だけは確認できる。

とりあえずまだバレていないことに安堵しつつ、

（は、早く今のうちに治さないと怒られるぞ、やべえ……）

素早く龍に向き直ると、当然ながら龍は宝珠なき今、鋭い爪でむなしく虚空を掴んでいた。

（まじでやばいって！ これってピンチすぎだって！）

焦りつつ、震える指でもう一度龍の指にトライしようとした時。

「なあ、真人」

呼びかけられ、瞬間、びっくりと飛び跳ねた。1cmは浮いただろう。

佐伯はただ声をかけたただけなのに、驚きすぎな真人が可笑しくて、

「ちよっ、お前、何ビビっちゃってんの？」

噴き出しながら、白い歯を見せ、肩を小刻みに震わせた。

「や、あの、べ、別にビビってないっすよ？」

真人は取り繕い、後ろ手に見られぬよう、宝珠をジーンズのポケットに忍ばせた。後でこっそりと時間をかけて治そうという腹づもりだ。

佐伯はニヤニヤと笑いつつ、しゃがむ真人を見下ろしている。と思いきや、急に真面目な顔つきになり、「な、あれ、変だと思わね

「？」と、女の方を指差した。

「え、何すか」

真人はゆっくり立つと、佐伯の指先を目で追ってみた。

視界に入る、胡座をかいた女と立ち尽くすテュたち。……やはりぼやけて状況を細かく把握することは不可能だ。

佐伯の目に映る光景――

印を結び続けている女。奇怪なことに、室内は無風であるにも関わらず、女の長い黒髪はそよぎ、しなやかに波打っている。

そしてその後ろ、動く素振りを全くみせずに立ち続けているテュとアーサー。彼らはまばたきひとつせず、表情すら変えず、その様はまるで人形、マネキンのような。

佐伯はいくばくか心臓の鼓動を速めながら、首を動かし、真人を見据えた。

「な、おかしいだろ？　おかしすぎちゃうだろ？」

「いや、さあ……。あの、よくわかんない……」

期待はずれの返答に、佐伯は顔に苦笑を浮かべた。

おまけに真人の眼を覆うゴーグル、ヘアターバンからはみ出した手入れなしのボサボサ頭、毛玉のついたよれよれトレーナーは、やる気のかけらも見えず、少なくとも佐伯の目には緊張感などゼロに映った。

「……お前さあ、いくらなんでもそのトレーナーはまずいだろ。貧乏くせー。それって寝間着ねまぎじゃん。で、何その頭」

呆れながら言う。

「いや、だって俺、もともと車から出るつもりなかったし。……つか、鉄二さんの制服もやばいって。サイズあってないじゃないっすか。おまけに何すかその色。どんな昔っすか。俺のほうがまだましかも」

負けずに真人も言い返す。なるほど、佐伯の青と紺のどっちつかずの色した制服は、長身の彼にはサイズが合っておらず、腕や足な

ど寸足らずだ。その上ひっそりと入った肩パット、ダブついたシルエットは野暮ったさこの上ない。

「うるせー、俺っちだって好きでこんな着てるわけじゃねー！それに来月南極に旅立つし、こんなの今月でおさらばだぜ」

「南極!？」

ニヤついていた真人は笑いを消した。

頭に浮ぶ、ペンギンとアザラシ、吹き荒ぶ凍てついた氷の世界。

「え、鉄二さん、南極行くんすか？ 寒くないんすか？」

「バカ、寒いに決まってるだろ！ でも行きたいんだよ。俺っちの長年の夢だからな」

佐伯は得意げに言うが、はたと話がそれている事に気づき、

「つか、こんな場合じゃねえ！」

「……え？ どうしたんすか」

「いいからちよつと来い」

言うど真人の腕をつかみ、佐伯はどんどん女に近づいていった。

――が、その時。

向かう先、音もなく、女ははたりとその場に倒れた。

それはさながらコマ送り。

「わっ、やべ、……何!？」

二人は女に駆け寄った。

「お、おい、大丈夫か？」

佐伯は女の肩を揺すってみた。しかし何も反応はない。

後ろで様子を伺っている真人は、

「あれ、これって……」

ふと思っただ疑問を口にする。

「ん、なんだよ」

「……いや、このライダーズ、テユのだなと思って」

ゴーグルを押し上げながら言った。

女の着込んだライダースは、度々家に来ていたテユがよく着ているもの。ユーズド加工されていて、細部にわたってスタッズがついている。なかなかいい味を出していて、こういうの欲しいなと思っていた事もあり、真人はよく覚えていた。

「坂下真人、それを外すなど言っただはすだぞ。何度も言わせるな！」聞き慣れない、低く渋い男の声。

「ええ!？」

真人はあわててゴーグルを着けなおし、ぎこちなく振り向いた。そこにはベージュ色のジャケット姿の男が、腰に手を当て、仁王立ちに立っている。

(だ、誰だよ!)

「あ、あなたは……」

佐伯は女を揺らすのをやめ、見覚えのある男にぺこりと一礼をした。

切れ長の目のシャープな顔だちの男。

彼は佐伯が自転車屋『笹本サイクル』で出会った青年医師、勝浦俊太郎であった。

0061＊ 良い子

「えっと、あの……」

佐伯は俊太郎を前に、言葉を探した。「こいつと知り合いだったんですね」

顎でしゃくった方向は、真人のほう。

「や、俺、全く知らないっすよ!」

俊太郎よりも早く、真人は否定してみせた。それは見知らぬ男が自分のフルネームを知っていることが腑に落ちないといった風貌。

俊太郎はといえば、涼やかな目元も手伝って、相変わらずクールに佇んでいる。しかしながら眉は歪み、肩はため息をついたのか、わずかばかり落ちていた。彼の茶色がかった黒い瞳は、現在佐伯に抱えられている女を映している。そして視線は佐伯のほうへ。

「佐伯、私に触れるな。いやらしい」

「あの、私って……? いや、ちよっ、あの、ええっ!？」

俊太郎の発した言葉に佐伯は愕然とし、意識せずとも細い目をうんと見開くはめとなった。隣で聞いている真人も驚き、女と目の前に立つ男を、顔を動かし交互に見つめた。

「あ、あんた……一体……」

「説明するのは面倒だ。聞くな」

言いながら、俊太郎は足音を立てずに二人に近づき、畳に落ちていた刀を大切そうに拾い上げると、元の位置——刀掛けにそっと掛けた。そして柏手かしわでを打ち神を拝した。

「天之尾羽張の命……あめのおはばり。渡来人の、そして我が無礼、なにとぞお許し下さいますよう……。我が名にかけて、平にお詫び申し上げます」

両手を胸の前で合わせ、深々とお辞儀をした。

「な、何してんのかな?」

佐伯の言葉に、真人は「わかんないっす」と首を振る。

俊太郎は顔を上げると、くるりと振り返り、すぐさま二人のほう

に戻ってきた。浮いていると錯角する程、スムーズな動き。音は全くしない。

「貸せ」

にべも無く佐伯に言う。

「ええ!？」

「いいから貸せ」

貸せとは佐伯が抱える女を指す。女は固く目を閉じたまま。白い頬には長い睫の影が刻まれていて、当分の間、起きそうにもなかった。

俊太郎は手を伸ばし、佐伯から女を無理矢理離すと、軽々と持ち上げた。

横抱きに抱えられた女の髪はなめまかしくさらさらと落ちて揺れ、さながら映画の中の騎士と姫君。俊太郎と女の容貌も、状況も相まって幻想的に見えた。女の着る、微かに発光する七色のうす布と細やかなヒダのついた裳がそう見せるのかもしれない。

「俺っち、こういうシーン、久々に見た」

「俺も」

佐伯と真人は惚けながらも俊太郎を目で追った。

「ジロジロ見るな!」

舌打ちし、俊太郎はあらん限りの目力で、二人をギロリと睨み付ける。

が、動じず、佐伯は顔前で手を振りながら、「いやいや、俺らの事はお構いなく。続けて下さいよ」

「だまれ! 私は見られるのは好かん」

女を床に下ろし、壁に立てかけ、座らせながら言う。その時手を組ませ、さも瞑想しているかのようにみせていた。

「何してんの?」

真人の問いにピクリと反応し、

「問うな、見るな! 私は忙しい!」

ヒステリックに言い放つと、俊太郎はろう人形と化しているテュ

とアーサーの前に立ち、一度大きく手拍子を打った。女が施した呪に対する気付けた。

ようやく自由を得たテュは、ぎりぎりど歯噛みしながら、勢いよく俊太郎の襟元を掴んだ。

「……てめえ！」

俊太郎はすました顔で、されるがまま。そして冷ややかに、

「ほう、まともや影ぬいされたいのか？ 私にかまわんぞ。何度でもやってやる」

「うるせえ！」

「だめだよ」

咄嗟にテュを止めたのは、優美な外国人、アーサーだ。ピアノス
トと見紛う麗しい手は、テュの肩に添えられている。

「Gal^{ガラ}ahad、もう少し落ち着いてみようか。争う心は何も生
み出さないよ。熱くなり過ぎてはいけない。常々冷静沈着を心がけ
たほうが、結果として良いほうに転ぶものなんだ。それに Lam^{ラモ}
orak……いや、Ni^{ニミ}me プライオリティに刃向かうのは得策じゃないよ。
priorityを決めてみよう。ここはひとつ、僕に任せてみな
いかい？」

テュはうぜえとばかりに顔を歪め、俊太郎の首元から荒々しく手を
離れた。

（なんだこの外人。わけわかんねえ事ペラペラとしゃべりやがつて）
無視しようと思ったが、肩にあるアーサーの手を払い退け、

「何言ってるのか、さっぱりわかんないんだけど」

アーサーは自らの唇に触れながら、優しく優しく微笑んだ。

「例えば何が分からないんだい？ 僕には全ての質問に答える用意
があるよ」

「……（言わなきゃいけないのかよ）」

テュはめんどくさすぎると思い、深く息をついた。そして渋々質
問を考え、絞り出した。

「ガラハッドって何」

「君の事だよ」

「……は？」

テユは不機嫌に眉をつり上げた。

（わけわかんねえ）

「他に質問は？ 言ってごらん」

促すアーサーに、テユは眉間にしわを寄せるしかなかった。質問する気など、初めから微塵もない。正直“ラモラック”と“ニミユエ”についても分からないが、くだらない答えが返ってくることは確実。そこで、無難な質問を選んだ。

「プライオリティって」

「それはね、優先順位の事だよ」

テユはあきれ顔で「あ、そ」と呟いた。

（初めから難しく言わずに、そう言え！）

「他に質問は？」

テユは無視し、佐伯と真人のほうを向いた。もうこれ以上アーサーと話す気になどなれなかった。

「お前も大変だなあ……」

真人は苦笑いと共にテユをねぎらった。テユは頷き、

「もうやってらんねえ。わけわかんねえし。それより真人くん、真朝を探しに行こうぜ」

「うん、そうだなあ」

真人はテユに同意した。

「さっせんぞ」

俊太郎はすぐさま二人に割って入る。

「なんだよ、俺らにかまうな」

あからさまにテユはイラついて言う。

「勝手は許さんぞ。お前らはここに待機だ」

「うるせー！ 真朝がいるかもしれないのに、じっとなんかしてら

れるかよ!」

テユは声を張り上げた。

「小僧、貴様ごときがここで何ができる？ 迷子になることくらいが関の山。それを探す身にもなってみろ。分かったら手を煩わせる行動は謹め、阿呆」

続いて俊太郎は真人をも見る。

「小僧だけに言ったのではないぞ。坂下真人、お前もだ。おかしな行動をすれば、またあれをやるぞ」

「……へ？」

いきなり話を振られて、分からず真人は素っ頓狂な声を出す、意地悪く上を見上げる俊太郎を見、何をされるか理解した。まざまざと蘇る、目と鼻の先に広がる天井。埋め込まれたふんだんな宝石の数々。再び浮く自分を想像し、頭につけたターバン内では、汗がじわりとにじみ出た。

「おかしな行動はしないっす」

背筋をぴんと伸ばし、宣言する。

「真人くん、何言ってるんだよ!」

憤慨するテユを後目に、俊太郎はにんまりと笑った。

「良い子だ」

0062* 君の名前は

「どういうことだよ!？」

真直ぐ射抜くのは、黒橡くろつるばみの瞳。

詰め寄るテユに、真人は困り顔で頭をぎこちなく掻いてごまかした。何と答えて良いのか分からないのだ。

「真朝はどうすんだよ。それでも兄かよ!？ そんなに奴が怖いのか。アンタ、そこまで意気地なしだったのかよ。何とか言え、この“良い子”！」

「ちよっ、待てよ。少しは押さえろよ」

黙って見ていた佐伯は、耐えきれずに助け舟を出した。

「許してやってくれ。真人は死ぬほど高所恐怖症なんだ。ここだけの話、前、高層ビルで失神しそうになってるしさ。飛行機だって、怖くて窓側の席は絶対座れないんだ。俺らにとってそうでもなくても、真人にとってはマジ地獄なんだよ。死活問題。少しはそこを分かってやってくれ」

テユは苦虫を噛み潰した表情で、顔をひくつかせながら聞いているた。

「くだらねえ、分かりたくも無い」そして続ける。「せいぜい怖がつてろ！ 俺一人で探す」

テユはどしどしと足音を立てながら、豪奢に蓮の装飾が施された、重厚な観音開きの扉を目指した。

「小僧！」

俊太郎は声を荒げてテユを呼び止めた。が、時同じくして、テユを小走りで追う真人を捉えた。

「くっ、坂下真人！ 何をする気だ!？」

真人は怖じ気付き、一度は立ち止まろうとはしたものの、
「待って、俺も行く」

唾を飲み込みながら、逆らう事を決意した。

テユは真人を一べつすると、悪戯っぽく小さく笑んだ。

「おかしい行動はしないんじゃないかなかったの？」

「いや、あれはその……」

真人はきまり悪そうにはにかみ、鼻をすすってごまかした。「冗談ってやつ？」

「あ、俺っちも行くよー」

佐伯も同調し、二人の後に続いていく。

「貴様ら……」

血がにじむくらいに、俊太郎は拳を固く握りしめた。こめかみには、青筋がまざまざと浮かび上がっている。やがて結んだまま両の手を胸元に運ぶと、指を組み、素早く“印”を結んだ。言わずもがな、女独自の孔雀明王印と良く似た印相。

みるみるうちに俊太郎の瞳は血色に変わり、妖しい光をたたえ始めた。赤の中の赤、猩々^{しやうじやうひ}緋。――途端、真人の体はふわりと浮いた。

「うわあ、またきた！ やべえっ！」

青ざめ、じたばたと手足を動かした。

「真人くん！」

「わっ、真人！」

テユと佐伯は同時に声を発し、あわてて真人の体を押さえつけた。テユは肩を、佐伯は足を。しかし印の力に勝てるはずもなく、真どころかテユと佐伯さえも、それぞれゆっくりと畳を離れてしまう。「おお、すげえなおい。どうなってんだ？ これってどういう仕組み？」

佐伯は嬉しそうに自らの足をぶらつかせた。丁度足のつかないプールのような格好だ。

対し、足をつかまれている真人はたまらない。佐伯の足に合わせ、体は揺れる。

「ちょっ！ な、なにやってるんすか鉄二さん。危な……ゆらさないで！ まじキレるっすよ！？」

真人は佐伯を見ずに言う。顔からは鈍くいやな汗がふきだし、目は下を見るまいと固く閉じている。

「へえ、真人ってキレることあんの」

「もうキレまくりっすよ！」

テユは無言で真人の肩にしがみつきながら、

「ちょっとアンタ！ 助けてよっ」

アーサーを凝視した。

「やれやれ、僕自慢の騎士達も、Ni^ニme^ミには適わないようだね」
優雅な手つきで髪をかき上げつつ、アーサーは俊太郎の横に立った。当然、俊太郎は鋭く睨み付ける。

「何のつもりだ渡来人」

アーサーはモナリザを思わせる微笑を浮かべた。

「Ni^ニme^ミはもう少し優しさを覚えるといいね。ほら、見て。彼らは困ってるよ。慈悲を与えて欲しいと僕は思う。……だめかい？
それに君は La^ラmorak^{モラク} の体に移って、これからどうするつもりなんだい？ 良ければ僕に教えて欲しい」

「だまれ！ わけの分からぬことをうだうだと。お前はとにかく五^う月^る蠅^さいわ！ 私を変な名で呼ぶなど言っただろう。何度言ったら分かるのだ、この馬鹿め！」

瞳をさらに濃く、墨まじりの赤に変色させ、俊太郎は印を振り解いてアーサーを突き飛ばした。

——即。

ドスン！

大きな音とともに、真人とテユと佐伯は畳に打ち付けられた。落下だ。

「痛てえ！」

「いきなりかよ！」

三人三様、うずくまっている。

「なかなかNi^{ニミ}me^{ムエ}は手荒いね」

突き飛ばされてもめげず、アーサーは何も無かったように、スーツの皺を正している。仕立てや生地が上質のものだけあって、元の形に美しく整うのはわけもない事。すぐに貴公子然たる風采は保たれた。誰も不様にしりもちをついていたとは、考え及ばないだろう。

「その名で私を呼ぶなと言った。なにがニミュエだ、しつこいぞ！五の部の首長である私が、そんなくだらん名であるはずがない！」肩で息をする俊太郎を、アーサーは目を細めて見守った。

「で、君の名は？」

俊太郎は静かにアーサーを見た。

そして、再びアーサーはゆっくりと問う。「君の名前は？」

「……私の名は」

俊太郎の瞳はみるみる本来の黒に近づいていった。

「^{アメノウズメ}天宇受賣だ」

0063* 君の名前は 2

アーサーは、透明感のある白肌をほんのりピンク色に上気させた。それを見、俊太郎は露骨に嫌な顔をした。

「気色悪いぞ渡来人。何を照れている」

「今の名前……本当なのかい？」

「たわけ。嘘などついてどうするのだ」

アーサーはスーツのポケットをごそごとと探り始めた。そして取り出したのは、ボイスレコーダー。

「なんだそれは」

「何でも無いよLady^{レディ}」

電源を入れ、俊太郎を真正面からじつくりと眺めた。その目は幾多の女性を虜にしてやまない、アクアマリンの“キラー・アイ”。アーサー得意の武器のひとつ。

「貴様、見るな！」

「君にお願いがあるんだ。聞いてくれるかい？」

「断わる」

「簡単な事だよ」

「断わる！」

俊太郎は煙たげにそっぽを向いた。聞く耳はもたずといったところだ。自慢のキラー・アイも形無しである。

それでもアーサーは、言葉を紡ぐ。

「君の名前は？」

「貴様……」

俊太郎は畳を力強く踏みしめ、声をオクターブ低くした。「言っただけだ！」

「うん。聞いたけど、ちゃんと証拠が欲しいんだ」

「何の証拠だ！？」

「もう一度言ってくれないかい？ 君の名前、うまく聞きとれなか

ったよ」

「貴様は翁か。耳が遠すぎるぞ！」

アーサーは再度聞く。「君の名前は？」

俊太郎は盛大にため息をついた。

「お前のように間抜けでくだい男は初めてだ。……私は天宇受賣。
もう二度と言わんぞ、分かったか！」

「OK」

満足そうに、アーサーはボイスレコーダーを切った。

「Ni^ニme^{ミュー} の声じゃ無く、La^ラmo^モra^{ラク}k の声という所が残念だけど、重要な資料になるよ」

言いつつ、今度はスーツの内ポケットから手帳を取り出すと、いつの間にか手に持つ万年筆で、【天宇受賣／AMENOZUME】と書き記した。さすがに外国人なだけあって、ミミズの這ったような文字。綺麗とは決して言い難い。

覗き込んだ俊太郎は、首を傾げるばかり。汚すぎて読み取ることができない。

「ところでアメノウズメという名前は、どこがfi^フrs^{アース}t^{スト} na^{ネー}me^ムで、どこまでがfa^フmi^{ファミ}ly^{リー} na^{ネーム}me^ムなんだい？」

「なんだそれは」

「Sorry。分かりやすく言うと、苗字と名前を知りたいんだ。どこで切るんだろう？」

「知らんわ！」

俊太郎は付き合いきれないといった面持ちで、アーサーから離れようとした。「くだらん会話に付き合う暇などないわ。私は忙しいのだ」

そしてテュや真人、佐伯のいる方向を見る。

「な……!?!? や、奴ら……」

たしかにそこに彼らはいたはずだ。が、姿は見あたらず、もぬけの殻。代わりに金と銀で加工された蓮の扉は、豪快に開け放たれている。

「奴らめ、勝手な事をしやがって。……どこへ行った!？」

俊太郎は畳に無造作に縮こまっている羽衣を拾うと、再び瞳を紅に染めた。

羽衣は、先刻女がテユのライダーズを着る際、投げ捨てたもの。

「どうしたんだい Nimue^{ニミユエ}、落ち着いて。冷静こそ最大の――
「阿呆、だまれ! 貴様のせいだぞ渡来人。貴様がくだらんことで私を足止めするから、こうなるのだ!」

吐き捨てるように言うと、俊太郎は踵を返し、猛烈なスピードで扉の向こうへ消えて行った。

残されたアーサーは、ぬるりと輝く銀の万年筆――ペリカン社のマジエスティ^{あま}を、器用にくるりと回転させた。

「天の石屋戸^{いわやと}、そして天孫降臨^{てんそんこうりん}……。まさか僕の“湖の乙女^{ニミユエ}”が、かの有名なアメノウズメ……。神様だったなんてね」

ささくれなどない長くしなやかな指で、金の髪を耳にかける。

「素晴らしいよ。……素晴らしい」

声は余韻を残し、消えた。

0064＊ 洞窟の友

「何の用じゃあ…」

独特な、節のついた歌舞伎や能楽を思わせる声。噎れ、腹の奥底からしみ出た音は、えも言われぬ迫力を伴っていた。

声はごつごつと鋭い岩がむき出しの、だだっ広く入り組んだ洞窟内に轟いて、不気味にあらこちらにこだまする。

その振動で蝙蝠こうもりの大群はおのおのが驚き、出口を求めて一斉に羽音を響かせ始めた。

暗黒色に包まれた洞窟はさらに漆黒の帯に染められ、バサバサと幾重にも重なる音は、聞く者の不安を駆り立て、助長し、震撼させてしまう。

それは訪ね来た国津神くにづかみ、猿田毘古サルタヒコとて例外では無かった。腕にはびっしりと鳥肌が立っていく。

「ガハハハ。お主、怖がっておるのか。意気地のない奴め。そんな事では天宇受賣アメノウズメに愛想つかされるのも時間の問題じゃあ」

声の主は息が荒いのか、側で灯された二本の蠟燭ろうそくは煙をあげてかき消えた。辺りはただ闇が広がる。

「おっと、いかんいかん。また消してしもうたわい」パチリと指を鳴らすと、同時に火は再び灯った。

「ぬぬぬ……」

サルタヒコは不躰に妻を引き出され、立腹していた。しかし身につけた天狗面は、その怒りをすべて包み隠している。

「怖がっておらぬぞ！」もう一度、心の底から言う。「怖がっては
おらぬ」

サルタヒコが対峙するのは、でっぷりとした腹をさすりつつ、体にあわなない小さな円座に鎮座する大男。手には特大の大盃をしっかりと持ち、中には酒がなみなみと入っている。

「ふん、強がりめ……。して、世間話をしに来たわけでもあるまい。こんな辺鄙へんぴな所にわざわざ来おって、一体何のようじゃあ」

またたく間に恰幅かつぶくよく酒を飲み干し、言った。

「玉祖殿タマノオヤ。拙者が水晶玉で話しかけた折、何故答えてはくれなかったのか。何故通信を切ったのか。拙者はやむなしに、渋々ここへ参ったのだ」

タマノオヤは尻を浮かして屁をこくと、はだけた上衣を整え、足をボリボリと豪快に搔いた。爪の後がまざまざと残っている。

「何故、じゃと？ ふん、当然の事。儂は玉ころなんぞで用事を終わらせようとする不屈きな輩は大嫌いじゃあ。用があれば訪ねて来い。そして用があれば儂は行く。顔を合わせる。これが儂の基本ルールじゃあ」

「ぬぬ、言っている事は正論に聞こえる。しかし、さて。……では急を要する時、どうするのだ。やはり水晶では答えぬのか」

「無論じゃあ」

（む、こやつ、まったくもって迷惑な！ ここに来るまでどれ程遠いと思っておるのだ）

サルタヒコは鼻息荒く、頭上こづもりの蝙蝠の大群しやくじようを錫杖を用いて追い払った。時折、蝙蝠たちは『ギィ』と鳴く。いら立っていることもあり、彼の手つきは至極荒い。が、多勢に無勢、特に効果は見られなかった。虚しくシヤラシヤラと音のみ響く。

タマノオヤは滑稽な様に「ガハハ」と笑いつつ、空の盃に酒を注いだ。

「お主も飲まんか？ 久しい再会を祝おうぞ」

「そのような暇は生憎ない。して、タマノオヤ殿、拙者は邇邇ニニギ芸殿の遣いで参った。五の部の首長に召集命令だ」

「ほう、珍しい。何事じゃあ」

サルタヒコは話すかどうか迷ったが、

「夜尊がご結婚を決められたのだ。我らは全力で止めねばならぬ……」

…らしい」

自信なげに言う。というのも目の前の男、タマノオやは、夜尊と懇意な間柄。言い難い話である。

一方サルタヒコとて辛かった。ニニギに忠誠を誓って長いが、同様に夜尊にも長年仕えてきた。

しばらくの沈黙の後、タマノオやは酒をすすると、おもむろに目を閉じ、ごくりと飲んだ。

「夜尊……ツクヨミのみこと月讀命、か。夜尊と名乗ってどのぐらい立つのか。自分の意志で結婚もままならんとは、哀れなお方じゃあ。あの方は何よりもただ自由を求めておられる。なのに、籠の中の鳥。……不憫ふびんじやな」

サルタヒコはぐっと拳を握りしめた。

「して、どうされるのだ？」

タマノオやは、ふうと酒臭い息をもらした。

「どうもこうもあるまいよ。儂は行く。……儂は五の部の首長じゃあ。それに……わざわざ来てくれた、お主の顔も立てねばな」

盃を足元にドンと置き、サルタヒコに背を向けた。

「支度する。時間がかかるゆえ、お主は先に夜之食国よるのおくにに行くといい」
サルタヒコは片膝をつき、拳を床に押し付け、心から頭を下げた。
タマノオやは、目配せをする。

「伝令、御苦労じゃったな」

0065* 黒光りする棘

——樹海。

それは神々の住まう天上の国、高天原たかまがはらの西の辺境に広がっている。黒々とした緑という緑が層を成し、群生し、年々その規模は着実に広がりを見せていた。

高くそびえ立つ樹木は、雨は通すが太陽の光を決して通そうとはせず、おかげで下に広がる大地は湿度を払拭できず、泥土と化してしまっていた。森、全てが湿原である。

地どころか空気までもがはじめじめと湿気を帯びたその土地を好む者は無く、事実、幾多の天津神あまつかみは一樣に“呪われた海原”と呼び、忌み嫌って近寄ろうとはしなかった。が、好んでその土地に住まう者もいる。変わり者と名高い玉祖タマノオヤだ。

タマノオヤの住居は、樹海のほぼ中央、唯一存在する滝の向こう側にある。激しくなだれ落ちる水をくぐった目と鼻の先、黒い口をぽっかりと開けた大きな洞窟。滝がカーテンの役目を果たしていて、一目で住処が見つかる事は無い。誰も滝の中に洞窟があるとは思わないだろう。

「それにしても、何たる不便で薄気味悪い所。何故このような所に住んでおるのだ」

幾匹かの蝙蝠こうもりと共に洞窟を出、すぐさま否応無しに滝に打たれて、ずぶ濡れとなってしまった猿田毘古サルタヒコは不満げに呟いた。

「糞。滝に当たらねば出入り出来ぬとは、何たる仕掛け。これでは修行僧ではないか。何故拙者がこのような……」

首を動かし、総髪を思いっきり振り動かした。辺りに多量の水滴が飛散していく。

「風邪をひいてしまうではないか」

サルタヒコは錫杖をぬかるみに差し込み、目を閉じると、左手の

人差し指を立て、右手でその指を握りしめた。――彼独自の印相。光熱によって瞬時に水を吹き飛ばそうという魂胆だ。

しかし、同時にサルタヒコの懐にある水晶玉が微動したことにより、思惑は中断を余儀無くされる。

「に、^{ニニギ}邇邇芸殿……」

水晶を目の高さまで持ち上げ、言った。

――『ひどくのんびりですね、サルタヒコ。いつまで待たせるつもりなのです』

水晶は眉目秀麗の男をぼんやりと映し出している。優しげな顔には似合わず、声は怒りでうち震えていた。

「い、いや、あの、……五の部の首長とは、まこと気難しくもあり……手こずり、

――『黙りなさい！ 言い訳など聞きたくありません。どれほど刻を重ねれば気がすむのです。未だに誰一人私の元には現れていません。これはどういう了見です。遅いにも程がある。そのように汚らしく泥にまみれる暇があるなら、直ちに全員連れてこちらへ戻って来なさい！』

ニニギは怒りにまかせて言葉を綴った。

「いや、しかし。……お言葉ですがニニギ殿。^{アメノウズメ}現在、天宇受賣よるのおすく以外は全員高天原におわします。あまりに夜之食国は遠い故、皆、時間がかかりますのは致し方ない事……」

――『あなた方はそこの神ではありません。皆、太古の昔より名をなす神。呪でこちらへ来るなど、わけもないはず。何故そうしないのです。もう一度、皆に良く伝え聞かせなさい』

「……御意」

サルタヒコが言い終わると同時に、水晶玉は沈黙した。

「タマノオヤ君。会話、聞こえた？ ニニギ君は急いで来い！ だつてさ。で、どうすんの？」

ゆったりとしたズボン状の絹褌きぬばかまを膝元で足結あゆいしながら、タマノオヤは訝しげに顔を上げた。洞窟内にいる彼に、外の会話が聞こえるはずはない。

目の前にいるのは、質素な麻の衣を纏った、おかっぱ頭のみすばらしい子ども。つい先ほどまで誰もいなかったのだが、いつの間に現れたのか、生意気にも大人さながら足を組み、ずっといました風に岩に腰掛けている。一見、男児なのか女児なのか、見分けがつかない。

「悪い童わらしじゃあ。また来おったか。……して、何の用じゃあ」

「別に。これから面白い事が起こるから、だから来ただけ」

子どもは顔全体で笑んだ。不浄なものは何も無い、幼い者特有の純粋な笑み。そこに混じり気などなかった。

「出てけ。儂は支度中じゃあ。お前になんぞ、かまってられん」

「それより知ってる？ これからすごい事になるんだよ」

両足の足結あゆいを終えたタマノオヤは、今度はボサボサ頭のまま、とかさず、長髪を半分に分けて適当に美豆良みずらを結び始めた。正直、見ていられない程へたくそだ。

「なんじゃ、すごい事とは」

タマノオヤの問いに、子どもはクルクルと表情を代え、「あはっ

「ゲヘッ」「ぶふっ」と、意味不明に声を出した。

「ええい、いらいらする。早う言わんか！」

「言わな―い。自分の目で、耳で、これからの事、確かめるといい。

……うひひひ」

つり上げた口元からは、牙状のするどい歯が数本覗いた。すきつ歯だ。それは全て黒光りしている。

「相変わらずわけの分からん童^{わらし}じゃあ。儂が怒る前に、早う去れ」
タマノオヤはジェスチャーを交え、煙たそうに追い払う。しかし、逆に子どもはすれすれにまで近づいてくる。

「ところでタマノオヤ君。一体、誰が勝つと思う？」

歯をわざとカチカチと鳴らしながら言った。その後ぎよろりとした目で、タマノオヤを舐め回すように見る。瞳の色は、琥珀。

「何の話じゃあ。さっぱり分からん」

「でもさ、皆、ことごとく馬鹿だよね。誰も本当の事に気付いちゃいない。分かって無い。……でもいいんだ。これで、いい」

話が噛み合わないのは、今に始まった事では無い。いつも子どもはわけの分からない事を口にする。

タマノオヤは溜息まじりにおかっぱ頭をむんずと掴むと、わざと顔に向かって多量の酒臭い息を吹いてやった。が、平然としている事から、あまり効果はなかったようだ。

「童^{わらし}。じゃあ聞くんが、お前は一体誰が勝つと思うんじゃあ」

子どもは笑った。だが、目は笑っておらず、研ぎ澄まされた刃のよう。

「あの人が勝つんじゃないかな。……嫌だけど」

ひとつ、まばたきをする。それからタマノオヤの耳元でぼそぼそと囁いた。

「ひとり、死ぬね。いや、正しくはもう死んでいるのかも」

0066＊ 千里眼

「物騒な童わらしじゃあ。……胸くそ悪い」

タマノオヤ
玉祖は鼻をほじり、丸めて子どもの顔に投げ付けた。見事当たるが、子どもが気にする様子はない。むしろ喜んでいるようにも見える。

「誰が死ぬんじゃあ」

子どもは答えず、肩をすくめた。わざと目を左右に転がし、おどけてみせる。

「ええい、早う言わんか」

「うひひひ、ひひひ……」

返ってくるのは笑い声。ガタガタと並んだ黒いすきっ歯の向こうには、真っ赤な舌がチロチロと動き、それは蛇や蜥蜴とかげを連想させる。舌はパツクリと先端から中程までに割れた、スプリットタンだ。

「笑うな。お前の口内を見ていると気分が悪うなる」

言われて子どもはさらに口を大きく開けた。

「タマノオヤ君も一緒。父母と一緒に。皆と一緒に」

「何がじゃあ」

サルタヒコ
「猿田毘古君がここに帰ってくる」

ふいに話題を代えた。今度は小さく、「サルタヒコ君が来る」

琥珀の瞳は奥に広がる闇を映していて、墨がまじっている。「彼に会う事は出来ない。会ってはならない。絶対に」

タマノオヤは去ったサルタヒコが戻るわけがないと思いつつ、子どもの言葉に首を傾げた。

「なぜ会う事が出来んのじゃあ」

子どもはタマノオヤを一べつし、

「彼の事はけっこう好き」目を伏せた。「だから会えない」

「ふん。好きだと会えんのか」

子どもは黙って頷いた。

「だったら僕は……僕に会うという事は」親指を立てて、己おのれを指す。
「お前はちよくちよく僕に会いに来るが、僕を嫌いなんじゃないな。……嫌いか？」

「もちろん」

即座の即答に、タマノオヤは鼻を鳴らした。

「僕もお前が大嫌いじゃあ」

「でも、タマノオヤ君を好きになる可能性はある」

子どもはタマノオヤの膨らんだ腹に触れた。

「僕はお前になぞ好かれようとは思わん」

「そうだとしても」

手を腹から腰に移動させ、両手でタマノオヤにしがみついた。身長身長の低い子どもの顔は、腹にすっぽりと埋まっている。

「気色悪い。離さんか」

子どもの抱きつく手に力が入った。

「ねえ、あれが欲しい。作って欲しい」

「なんじゃあ、お前の頼みなどお断りじゃあ」

筋肉ががつつりをついた毛むくじらの腕で、子どもを振り解こうとした。が、あまりの力に、タマノオヤは低く唸った。それは幼い者が出せるような力ではない。彼に子どもの手を解くことはできない。

腹に顔を埋めたまま、子どもは話し始めた。

「伊邪那岐イザナギが禊みそぎのときに天照に授けた御倉板拳みくらたなが欲しい。三種の神器あまのいわと、天の石屋戸ニギハヤヒの石屋戸あまつしるしみずたからとくさ隠れのときに作られた八尺瓊勾玉やさかにのまがたまが欲しい。

邇藝速日ニギハヤヒが持つ天璽瑞宝あまつしるしみずたからとくさ十種の瑞宝が欲しい。……月讀ツクヨミの首飾り……

……あれと良く似た、あれよりもっとすごい勾玉の首飾りが欲しい」

タマノオヤは目を見開いた。子どもが挙げたのは、いずれも彼の自信作。彼が作ったものの中でも傑作とされる名高い勾玉。彼は“

勾玉の神”タマノオヤ。

「童わらし……なぜ僕がそれらを作った事を知っておる」
「さすがのように、子どもはタマノオヤを見上げた。」

「アマテラスの首飾りが欲しい」

さらに手に力を込めた。

「ツクヨミの、夜尊の首飾りが欲しい」

タマノオヤの背後で、わらじの土を踏む音が聞こえた。微かに錫杖じょうの揺れる音も聞こえる。

「タマノオヤ殿？」

呼ばれて、恐る恐る振り返る。「……サルタヒコ」

タマノオヤは驚愕していた。子どもの言うとおりにサルタヒコは戻ってきた。

「童わらし」

下を見る。——いない。腰に巻き付いていたはずの子どもがいない。残されたのは微かな温もり。

次いでサルタヒコを見る。暑苦しい仮面はつけているものの、佇まいは涼しげだ。

「お主……ここへ来る時、童わらしを見たか？ おかつば頭の憎らしい奴じゃあ。見たか？」

いささか声に焦りが含まれている。

サルタヒコは顎に手をあて、

「はて、誰も見ぬぞ。気配も感じておらぬ。どうかしたのか？」

タマノオヤは置き去りにした酒の入った盃を持つと、目を固く閉じ、くいと飲んだ。そして思いっきり頭をふる。脳裏に浮ぶのは、子どもが現れた時の言葉。出鱈目だと思っていた言葉。——「タマノオヤ君。会話、聞こえた？ ニニギ君は急いで来い！ だつてさ。で、どうすんの？」

サルタヒコを見据え、唾をぐくりと飲み込んだ。

「お主がここへ戻ってきたのは、邇邇芸ニニギの命みことの言伝か。急いで来い

とでも言われたか」

サルタヒコは驚いたのか、じりじりと後ずさりする。

「これは面妖。なぜそれを？ 拙者とニニギ殿の会話が聞こえたか。

……千里眼の持ち主か」

タマノオヤは、ため息をついた。

「童^{わらし}は千里眼の持ち主じゃあ」

サルタヒコに聞こえぬように、小さく小さく呟いた。そして、続ける。

「だとすれば。……一体誰が死ぬんじゃあ」

0067* 彼女の望み

「死ぬほど寒いわ……」

ガタガタと歯音を立てながら、ミチルは呟いた。唇は紫色に変色している。

よるのおすくに

夜之食国の寝殿内、彼女はひたひたと忍び足で歩んでいた。足音を極力立てるなど指示されていた事もあり、速度は非常にゆっくりである。

泥棒のようにこそそするのには気の強い性格も手伝って納得がいくものでは無かったが、そうせざるを得ない重厚でござる霧囲気を建物全体が醸し出していた。歩いていると、ひどく自分がちっぽけな存在に思えてしまう威厳ある所。

和風だが、突き出た梁や装飾は彼女の見知った形ではなく、その様式は知らないものだ。新しくも見え、古くも見える、不思議な所であると言えた。

最初にいた暗い部屋とは異なり、目に映る情景は全て感嘆に値するほど、言葉では表せないほど素晴らしかった。が、それすらもどうでも良くなるくらいに寒さが彼女を襲っていた。

無理もない、身につけたスーツは未だに濡れたままである。

「寒い」

【我慢できないのか？】

相変わらずの低い声。得体のしれない男の声。彼女にしか届かぬ

声。【暖めてやろうか？】

（暖める？ こいつが？ 私を？ は。……ありえない）

ミチルは男に抱かれる様を想像して青ざめていた。必要以上に鳥肌が総立ちしている。しかも彼女の思い描く男の姿は目もあてられないくらいに不細工だ。

「結構よ」

外見を重視する彼女は、そっぽを向く以外、ジェスチャーでも拒否のポーズを取った。男の容姿は勝手な想像に他ならないが、寒さ以上、上乘せで寒気がした。

【お前に風邪を引かれると困るのだが。万全の体調でいてもらわねば】

「風邪なんかひかないわ。滅多にひかない」宙を見やり、もう一つ。「なぜ私が風邪をひくと困るの？」

答えはなかった。どうやら答える気はないらしい。

腕をさすり、ミチルは前のみを凝視した。

彼女の前方に広がるのはだっ広い回廊。天井には所狭しと、文様、七宝つなぎの鳥櫓とりだすきが描かれていて、柱には幾重にも塗重ねられた黒光りする漆。京漆器を思わせる。そこには洗練された繊細で優美な蒔絵が展開されていて、回廊全体を気品高く見せている。落ちて着いた色合いは見事な相乗効果を生み出していた。

彼女はいつも隣にいたアーサーを想像し、彼がいたなら喜んだのに……と、しんみり思った。

【アーサー・ギース・ギャロット、か】

ミチルは驚いて飛び跳ねた。訝しげに眉をひそめた。「な、なぜ彼の名を？ 知り合いなの？」

——ククク

不気味に笑い声が頭に響く。ミチルは底知れぬ恐怖を感じていた。

【そう驚くな。驚く必要はない。知り合いのはずがない。お前の思考を軽く読んでみただけだ】

笑いを押し殺しながら、男は続ける。

【お前の雇い主、アーサーはこの館の中にいる。東の対屋にいる。お前の望みはアーサーだろう？ 会いたいのだろうか？】

「は？ 何を——」

【取引きの中身を今決めよう。お前はアーサーを望んでいる。心から。そして俺の望みは今すぐここで自由を得る事だ。それにはお前の助けがいる】

ミチルは目を見張るしかなかった。雇い主、アーサーに対する気持ちなど、望んでいる事など、誰にも言った事はない。それが易々と男の知るところとなっている。しかも会ったばかりの、存在すら見えない男の。

ミチルは生唾をぐくりと飲んだ。

何度アーサーを誘惑したことか。だが、のらりくらりとかわされ続けてきた。

アーサーは美を集結したと言えるほどの美しい男。おまけに彼は古くから伝わる、栄華を極めた貴族の家系。彼の家は歴史ある重厚な城。貧富の差があまり感じられない日本では、考えられないほどの富と栄誉を持っている。風の噂では、社交界においてソシアルダンスも相当な腕前だと聞く。

打算的に彼女は考えた。利己的に考えた。アーサーを手に入れる事は、彼女にとって願ってもない事。それだけで彼女の将来はキラキラと華々しく煌めくものとなる。夢のような生活を想像するのは造作無い事。エルメスのバーキンをいくつも持つ事など夢ではなくなる。そればかりか数々の店で上顧客として扱われるだろう。パリコレにだって招待されるだろう。

ミチルはアーサーにエスコートされてワルツを踊る自分を想像した。優雅にステップを踏む自分を想像した。何なら紅の衣裳を纏ったアルゼンチン・タンゴでもいい。彼女は完全に夢の世界へ旅立っていた。

【お楽しみ所、悪いが】

夢の中に割り込む男の声は即座に彼女を現実に戻した。

【俺はお前にアーサーを与えてやろうと思う。代わりに、お前はしばらく俺の忠実な部下となれ。悪くは無い話だろう？】

ミチルは腕を組み、顔をしかめた。しかしそれは演技だ。彼女の答えなどとくに決まっている。

「うーん、どうしようかな」

しらじらしさを残しつつ言う。

【小賢しい女だな】

「何よ、私だって悩むわよ。あなたはとても怪しいし、信用なんかしてないわ」

【だが、すでに答えは決まっているのだろう？】
不敵にミチルは頷いた。

「ええ。あなたが私に彼を与えてくれるなら」

彼女はピンと背筋をのばし、スーツを正した。「で、私は何をすればいいの？」

【とりあえず真直ぐ進め。さらに奥へ。まず言っておくが、俺の指示は全て従え。何があっても】

ミチルはきゅっと口を結んだ。

「わかったわ。……でもその前に」

【何だ】

「あなたの名前は？ 姿を見せてくれないんだから、名前くらい教えてくれてもいいでしょう？ それとも何、名前すら秘密なの？」

沈黙がしばし続いた。ミチルはイライラと足を動かした。

やがてボソリと男の声がミチルの頭に響いてきた。

【建速須佐之男だ】
タケハヤスサノオ

0068* 八俣の遠呂智

「タケハヤスサノオ？ どこかで聞いた事がある名前ね」

ミチルはしばらく考え込んでいたが、思いついたように顎をついと上へ上げた。両の足は足音を立てずに未だ前へ進んでいる。

辺りは静かで、音はといえば、足に合わせて微かに鳴る床の軋みのみ。

彼女は静けさに遠慮することもなく、女にしては少しばかり低めの声で話を続けた。

「タケハヤスサノオ……スサノオ。そういう名前の神様、いたわね。ヤマタノオロチと戦った神様。童話だったかしら？ 昔読んだ事がある」

【ほう、お前は俺を知っているのか】

ミチルは鼻で笑い、呆れながらも腰に手を当て、

「馬鹿ね。私があなただを知るわけじゃない。会ったばかりなのよ？」

【まあそうだが】

「私が知っているのは神様のほうのスサノオ。あなたなんかじゃないわよ。それにあなたはタケハヤという苗字があるでしょ。スサノオはスサノオなの」

——ククク

男は笑った。相変わらずの不気味な声。けれどミチルは彼と契約を交わしたために余裕が生まれたのか、心乱す事はなかった。畏怖せず、すまし顔で聞いている。

【お前が知っている須佐之男スサノオとはどんなだ。言ってみろ】

「面倒ね。言いたくないわ」

【俺の指示には全て従えと言ったはずだが】
「そうだけど」

【アーサーが欲しくは無いのか？】

言葉につまったミチルは盛大にため息をついた。

「いやらしい男ね。いいわよ、わかった。言えばいいんでしょ」

咳払いを2度ほどし、顔を歪めて語りだした。

「むかしむかし、出雲の国におじいさんとおばあさんがおりました。二人は川のほとりで若い娘を挟んで涙に暮れておりました。そこを偶然通りがかったスサノオという名の神様は、二人に涙のわけを問いました――」

【止める。聞いてられん】

ミチルのやる気のかけらもない棒読みは、遮られてしまった。

「スサノオの事聞きたいんじゃないの？」

【お前は馬鹿か。それとも阿呆か。簡潔に言え。その脳みそを活用して短くまとめろ】

「何よ」

馬鹿や阿呆呼ばわりされるのは初めての事。

頬を膨らまし、渋々ミチルは物語の概要を説明した。

「簡単に言うと、おじいさんとおばあさんは、ヤマタノオロチに毎年娘を1人ずつ食べられていて、ついに最後に残った8人めの末娘も、もうじき食べられようとしていたから、彼らは泣いていたの。そこを通りがかったスサノオという神は老夫婦にわけを聞き、娘を妻にもらうかわりに、ヤマタノオロチを退治するという提案をして、見事退治したスサノオは、娘と結婚して、そしてめでたしめでたしというわけ。これで話はおしまい。……まあ、何のひねりもない、どうってことないありきたりな昔話ね」

声は怒りで若干上ずっている。鼻息も少々荒くなっている。

【お前が知るのは八俣の遠呂智の退治のみか？ 他は知らないのか？】

「知らないわ」

イザナギ

みそぎ

みはしらのうずみこ

アマテラス

【伊邪那岐の禊で生まれた三貴子は？】

天照とスサノオの誓約は？

うけひ

「何よそれ、知らないわよ。何の事？」

【……お前はスサノオについてどう思っている？】

特別スサノオという神に、いや、神自体に思い入れのない彼女は、質問に対してイライラを隠しきれず、形の良い爪を噛んだ。

「何とも思っていないわね」

【スサノオは強いと思わないか？ 八俣の遠呂智やまた おろちは恐るべき大蛇だ。

それを倒した。並の神では到底不可能な事。すごいと思わないか？】

ミチルはあまりの馬鹿馬鹿しさに押し黙った。

【どうなのだ？】

うんざりし、さらに顔を歪めてみせた。顔には影が色濃く落ちて
いる。

「知らないわよ。強いんじゃないの？」

やけくそで言う。

【「強いんじゃないの」ではなく、強いのだ。スサノオは強い。……誰よりも。アマテラスよりも】

「ふうん」

それ以降、男の声は止んだが、男の満足な心がありありと伝わってきて、彼女は辟易した。姿は見えずとも、男の満たされた気持ち
がこれでもかと感じられ、もう一度ため息をつき、肩を落とした。

「くだらないわ」

顔にかかる髪を耳にかけ、気難しげに目を細めた。

（どうして男というやつは、こうも自分の持論を振りかざすのかしら。人に押し付けるのかしら）

歩む足を止めずに腕を組んだ。

（それに引き換え、アーサーはそんな事はしない。彼は生まれながらの貴公子。どこをとっても、どう見ても素敵だわ）

うっとりとしてアーサーを想うと同時に、彼女は彼の通訳として働く自分を誇らしく思った。彼に今すぐ会いたいとも思った。

そしてアーサーの名を秘かに呟こうとした時――後ろからどやどやと物々しい足音が聞こえてきた。

「な、なんなの!？」

不安に駆られ、ミチルは冷汗を垂らした。心臓は早鐘を打ち、頭に血が急速に昇っていく。

【冷静に立っている。何があっても取り乱すな。上手くあしらえ。それからスサノオとは一切口にするな。……いいな?】

「何が来るの?」

彼女はそわそわと足踏みをした。落ち着きを取り戻すことはできない。

【おい、冷静でいろうと言っただろ。頭を使ってやり過ごせ。それから……しばらく俺に話し掛けるな。少々厄介なやつがこちらへ向かってくる】

ミチルは男の話もろくに聞かず、踵を返し、もといた部屋へ戻ろうとした。

【お前、殺すぞ】

ぴたり。ミチルは足を止めた。正しくは止めざるをえなかった。緊張のせいかな、恐れのせいかな、ちりちりとこめかみが痛んでいる。男の声は本当に殺しかねない殺気を伴っていた。

「じ、冗談よ……冗談……」

震える声で言い、そそくさと背筋を伸ばした。

「言う通り、待つわ。冷静に立ってる。……冷静に。……上手くあしらってみせる」

語尾が消え入りそうなほど小さくなってしまい、あわてて言い直した。「上手くあしらうわ」

彼女の耳にはうるさすぎるほどの鼓動が響いていた。心臓は壊れてしまいそうだった。

0069* 疾走と遭遇

「やっべえな。道、別れてるし」

坂下真人はゴーグルごしに、二股に別れた渡殿わたりのを見、立ち止まった。

東の対屋たいのやからこっそりと出て以来、俊太郎に――女に追いつかないよう走り続けていたため息は荒く、肩は上下に動いている。

先頭が急に止まったせいで後に続くユン・テュは真人にぶつかりそうになったが、すんでのところで止まる事が出来、ひっそりと安堵の息をもらした。が、長身の佐伯鉄二は真人とテュに遠慮なく豪快にドンとぶつかってしまう。

「おわっ」

前のめりになり、真人は素頓狂な声を出した。テュはといえば、舌打ちをしている。

「悪い」

佐伯はきまり悪そうに頭をかくと、

「考え事してた」

照れ笑いを浮かべた。

真人は意外だと言わんばかりに佐伯の顔をまじまじと見た。

「おい、なんだよ。俺っちだって考え事ぐらいするって」すかさず言った。

「いや、俺、何も言っていないっすけど……」

「お前単純だから顔に出んの」

テュはうんと頷き同意する。「真人くんはすごく単純だよ」
苦々しく真人は笑った。

「まじで？ 自覚ないんだけど。つか、むしろ俺って複雑だし」
それからさりげなく話題を変える。本来聞きたかった事。「廊下が2つに別れてるけど、どっちに行く？ 俺、眼鏡ないから良く見えない」

テュは右側に続く回廊を見やった。

仄暗くて風がビョウビョウ鳴っている。不気味に冷たい風がこちらへ流れてきているようにも思う。続く先は濃厚な闇に包まれていて見えない。

そして視線は左側の回廊へ。

右側と代わり映えのないものが見えた。風も同じく流れてきていると感じる。しかし心なしか若干明るいように思われた。

「俺は左かなあ」

心理的に少しでも明るい所を目指したいというのもある。けれど確信は持てず、自信なさげに首を捻っている。

「そうだなあ、俺っちも左だと思うぜ。赤いすだれが見えるし、何か部屋があるんじゃないか？」

テュは佐伯の言葉にぎよつとした。

「^{すだれ}簾？ そんなもの見えねえぞ。どんだけ目え良いんだよ」

「ああ、俺っち2・0だし。それにちよつとは勘もいいんだぜ。これでも副業冒険家だからな」

得意げな佐伯をべつし、テュは軽く頭を振った。

「いや、2・0とかそういうレベルじゃないだろ。俺、目え悪くないけどマジ見えねえし」

「鉄二さんは人間離れしてんだよ。きつと5キロ先にいるシマウマでさえ、すぐに見つけられるぜ」

そんな真人の言葉に佐伯は吹いた。

「シマウマって……」

「まあ原始人並ってことだろ」ニヤニヤと笑いつつ、テュは左の回廊——渡殿を指差した。「それより早く行こう」

ふに落ちないといった表情の佐伯は呟いた。「原始人って……」

先ほどと同じく、率先して速く走ったのは真人だった。

最初に走り出したテュはあつという間に抜かれてしまい、驚きを隠せずにいる。

テュ自身、運動が得意な事もあり、足は速いほうである。だが真人に続くのは、相当必死にならない限り困難だ。

普段やる気のなさそうな真人がこれほどまでに足が速いとは思ってもみなかった彼は、なんともなしに佐伯に軽く目配せをした。同じ事を考えていたのか、佐伯は片目を閉じて合図してきた。

「真人、はりきってんなあ。速く走りすぎ。つか、このペース……マラソンかよ」

「今日のやる気は異常だよな。珍しすぎ」

走りながら話すため、二人の声は揺れている。

「あんなに妹思いだったとはな。……いつもは邪険にしてくせに」

佐伯はにやりと笑い、続けた。「ま、そこがあいつの良い所」

テュはスイッチが入ったのか、スピードをぐんと上げはじめた。

佐伯の言った、妹思いという言葉に触発され、真朝を探したいという気持ちが一層強まったのだ。

「ちよっ……」

佐伯はお前もかよと口にしたが、声にはならなかった。

「……しょうがねえなあ」

佐伯とテュの前方。

先を行く真人はスピードを緩める事は無く、ひたすら疾走を続けていた。

彼の中で、真朝を探したいという気持ちは確かにあったが、それよりもなお、部屋をこっそりと出てしまった事が女にバレるとただではすまないだろうといった恐怖心や不安感が勝っていて、募る焦燥感は純粹に彼の足をただ速く前へと突き動かしていた。

つかまりたくはなかった。宙高く浮きたくはなかった。真人は逃げ足だけは人一倍速い男――。

一種の興奮状態であるため、疲労感、苦しみといった、己の身体の限界を感じる事はなく、真人、そして後続のテュ、佐伯の間には、

ますます距離が生じていた。

と、その時。

前に人陰が見えた。

真人の目は悪く、完全にぼやけてしまっではいるが、それはたしかに人であった。確信できた。

目をおもむろに細め、スピードを緩めて止まり、

「……誰？」

息のあがった、聞き取り難い声で問うた。

が、彼の声は言葉にならず、伝わらず、相手が答えることはない。真人は膝に手をつき、屈んで肩で息をした。普通に立ってはいられなかった。

「あ、あなた……誰？」

相手から。おずおずと震える声。低めではあるが、女の声。

真人の目は女を追っているが、口から出るのは荒々しい息ばかり。答えたたくても、話したくても、未だ声は出せずにいる。

女はもう一度問いかけた。彼女の顔色は血の気を感じられぬ程に青ざめていて、今にも倒れるのではないかと思えた。

「あなた、誰なの？」

言い終えた時。

突如女は目を見開いた。彼女の脳裏に低い声が轟いたのだ。

【これは面白い。この人間、オオクニメシ大国主に瓜二つではないか。……面白
い】

「オオクニヌシ？ 瓜二つ？ ……誰よそれ」

女は宙に目を泳がせていた。女はこうして返答を待っているのだが、男の答えはいくら待てども返らない。しびれを切らした。

「答えてよ！」

苛つきを伴って云う。

そのさまに、真人は眉をひそめ、早々に立ち去ろうとした。あきらかなる独り言。正直、大きな独り言を堂々と言う危ない女とは、関わりたくはないのである。

女は今にも走り出そうという真人を横目でとらえ、先手を打って彼の毛玉のついたトレーナーをむんずと掴んだ。獲物を逃してたまるかといった心境だ。ハンターに似ている。

真人の身体はびくりと飛び跳ね、盛大な驚きを表現した。

「わっ、ちょっ、何……、するん、すか」

未だ息は荒すぎて、声は途切れ途切れになってしまふ。彼は胸に手を当て、極力息を整えようとした。

女はようやく手を離すと、じっと真人の目を見て言った。先ほどと同じ言葉を。

「あなたは誰？」

真人は苦しそうに、変わらず肩で息をしている。

「坂……下、真人。ハア、苦し……」

「え？」

聞き直す女をめんどくさそうに睨み、もう一度言い直した。今度は続けて。「坂下真人」

「あんたは？」

「浅田ミチル」

ミチルは咳払いをひとつした。

「ねえ坂下君、オオクニヌシって知ってる？」

「は？」

あからさまに苦々しい顔をし、首を振る。「何すかそれ、知らないっすよ」

「そうなの……私も知らないの。あなたに瓜二つらしいんだけど」
「は？」

真人は何度も目をしばたいた。

（何だ、わけわかんねえ。つか、俺はあいつとなら似てるかもしれないけど……）

双子の妹である真朝を思い浮かべた。

（でも瓜二つとまではいかないな。全然違う。第一性別ちがうし）

「ではここがどこだか知ってる？」

ミチルは手を周囲に向けて大きく動かした。

「私、気づいたらここにいたのよ。だからわけがわからないの」
「……も」

真人は言葉を発した。が、うまくミチルに伝わらない。

髪をなめまかしく耳にかけ、ミチルはあらわになった耳を真人に突き出した。

「何？ 聞こえない」

「俺も」

「え？」

「俺も気づいたらここにいたから、わかんない」

真人の答えに目を伏せ、ミチルは肩を落とした。

「そう、そうなの。あなたも同じなのね」

顔には影が落ち、彼女の落胆を表していた。

近づく足音とともに、ようやくテユと佐伯は真人に追いついた。
気づいたミチルは二人に対して会釈するが、二人とも、特にテユは怪訝にミチルを頭の前からつま先までじっくりと見ている。いか

がわしいといった目だ。

「誰？」

テユは警戒を怠らない。テユと考えが同じなのだろうか、佐伯の面持ちも釈然としない。

「えっと」

真人はミチルの前にのそりと滑り込み、二人にミチルを紹介しようとした。しかしながら、ここで行動を止めてしまい、自らの頭をぼりぼりとかいてごまかし始めた。

「ちよっと、何やってるのよ」

ミチルは真人のトレーナーを引っぱった。

真人はきまり悪そうにミチルのほうを向き、

「あの、名前何だっけ？」

「浅田ミチルよ」

呆れたミチルは真人を介さずにテユと佐伯を交互に見つめた。笑顔とともに。「私は浅田ミチル。あなたたちは？ 坂下君の友だち？」

テユと佐伯はこくりと頷いた。

「アンタ、なんでこんな所に？」

テユは不躰な態度だ。それは暗い回廊で一人佇んでいる女を怪んでいるに他ならない。最も、心を許した相手以外には常々ひどく無愛想なのだ。

「私は……」

答えようとし、ミチルは言葉をぷつりと切った。そして目を宙に彷徨わせ、

「ねえ、私はなぜここにいるの？ 私たちどこに向かっているの？ 黒いマントの所？ それとも……」

誰もいない空間に問いかけた。その有様は奇妙すぎて、テユはもちろんのこと、真人も佐伯もぞっとし、示し合せたように顔を見合わせた。

三人の顔は「この女絶対やばいって、危ないって」と語っている。

言葉を発する事なく、その気持ちはそれぞれが十分すぎるほど理解することができた。

誰からともなく合図し、ミチルのもとを走り去ることを決めた時――。

その時、後ろから不気味に声がこだました。

「貴様るらあ、許さんぞー！」

巻舌だ。大層怒りを含む声。男の声。

まだ遠くにいるらしく、声は四方に広がっていく。

「奴だっ！」

まっ先に走り出したのは真人。恐れおののいている。

あわててテユも走り出した。

残された佐伯は焦り、

「おわっ、ちょっ、お前ら待てよ」

言いながら、急いで彼らの後に続く。彼としては奴よりも病んでそうなミチルのほうが怪しげで怖い。不気味だ。「俺っちを置いていくなー」

「や、ちょ、ちょっと、待ってよ！」

ミチルも三人の背中を追いかけた。

しかし、その時気がついた。タイトなスーツを着ているのに、やけに足が動く事。その上足がスカスカする。

立ち止まり、下を見た。

なんとスカートがぱっくりと裂け、見事にスリットが入っている。

下着が見えるぎりぎりのラインだ。

「きゃあ！」

慌ててスカートを押さえつけた。それでも生足を隠す事はできない。

ミチルはこの現状に、大いに男を怪んだ。頭のなかに響き渡る声の主を。

ギリギリと歯噛みし、彼女の全身が怒りでみるみる満たされた。

【……言っておくが、俺ではないぞ】

「うるさい、この変態！」

ミチルはヒールで床を大きく蹴りつけた。タップダンスを幼少の頃から習っているだけあって、必要以上に大きな音。男を威嚇しようという魂胆だ。

「人のスカートを破いて何をしようとしたのよ。このっ、汚らわしい！」

【馬鹿め、だから俺ではないと言っている。俺のせいではない】

男の声を聞かずに、何度も何度も床を蹴る。全身の筋肉を用いるため、ますます音は大きく速くなっていく。知ってか知らずかりズミカルだ。音にはビートが効いている。リズムタップだ。

「うるさい、あんたはやましいクソ野郎よ！ それにこのスーツ、いくらすると思ってるんのよ。ただのスーツじゃないのよ、それを破くだなんて。ふざけるなっていうのよ！」

【黙れ。これは猿田毘古サルタヒコが悪いのだ。彼奴きゃつが邪魔するからこうなったのだ。だいたい彼奴が――】

「黙るのはあんたのほうよ！ それよりなによ、サル……？ っていうか、人のせいにするってどうなの！？ 呆れた。あんた、腐りきってるわね！」

当然ミチルの脳裏に響く声は周囲には聞こえない。

ミチルの独り舞台を見、闇の向こうよりゆるりと現れた一人の男は首を捻った。切れ長の目のシャープな顔だちの男。

手には羽衣。足は微かに地から浮いている。「何だお前は」口を動かした。

はつとし、ミチルは男に視線を移した。そしてあわてて破れ目を隠す。殿方を前にし、女としての恥じらいだ。

男は足に目もくれず、顎に手を当て、妖しく目を光らせた。

「お前、人外か。……何者だ？」

「え？」

0071* 紅い瞳

ミチルは耳を疑った。それは自分に向けられた問いとは到底考えにくいもの。人外——人ではないなどと、言われる道理があるわけではない。

「どういうこと？ 私が人ではないとでも言いたいのか？」

涼しげに男は目を細め、閉じた。

「そうだ」

「私が？ そんなのありえないわ、何言ってるのよ」

「もしくは人ではないものが宿っている」

男はおもむろに目を開けた。すかさずミチルを真直ぐ射ぬく。

鋭い眼光に、ミチルは体を強張らせた。倒れそうになる。理由は眼力だけではない。その色だ。

目の前にいる男の瞳は、もはや黒ではなかった。睫に縁どられるのは、言うなれば血より濃い赤、猩々^{しょうじょう}緋。白目の中で煌々と映え、際立っている。

ミチルの心臓は尋常ではないほどに音を立て、彼女の冷静さや確固たる意志は全て残らず飛んでしまった。

「その顔、よもや私が怖いのか」

男は一言一句ゆっくりと言い、にんまりと笑ってみせた。意味深な笑み。「人ではないのはそっちのほう」とでも言いたげだな」

ミチルの頭は恐怖で占められ、男に返答することは叶わない。

かまわず男は言葉を続けた。

「その通り、私は人ではない。体は人だが。……お前もそんなところだろう。人ではない」

ミチルは必死に宙を仰ぎ、助けを求めた。男の赤い瞳が恐ろしく、これ以上は見えていられない。彼女の目は涙で揺れている。

やがて、渋るように。

【……糞、手強いな】

くぐもった声。ミチルの中でずんと響いた。

【変わらず厄介な女だ】

ミチルはぴくりと反応した。「……厄介？ 私？」

【馬鹿か、お前ではない。お前など厄介であるはずがない。小物風情が自分を買ひ被るな】

「な、なによ……」

少々むくれ、彼女は恐れながらも対峙する男を見つめた。男は悠々と腕を組み、ミチルの出方をうかがっている。自信に満ちあふれた顔つきだ。

【所詮お前ごときのレベルでは天宇受賣^{アメノウズメ}はあしらえんな。期待しすぎたか】

「アメノウズメ？」

ミチルは続けざまに“アメノウズメ”とは何かと問おうとした。が、その瞬間、目の前の男は素早く彼女に詰め寄った。

「貴様、なぜ私の名を知っている。私はまだ名乗ってないぞ」

突然首元を掴まれ、ミチルは呻いた。「な、何す……」

「なぜ知っているのかと問うている」

男はさらに手に力を込めた。ミチルは苦悶の表情を浮かべ、「助けて」と呟いた。

首はキリキリと締め上げられていく。

【……仕方ない、助けてやる】

「仕方ない、助けてやる。か」ミチルの首に手をあてがったまま、

男は復唱した。

「聞こえたぞ。やはり何者かが潜んでいるな。お前、何者」

男はようやくミチルから手を離れた。彼女を見下ろし、髪をかきあげた。ミチルは恐怖を色濃く浮かべ、有無を言わさず男を見上げるはめとなる。目を逸らしたくても逸らせない。体が勝手に動いた。望まなくても。

【フン、相変わらず短気な女だ。自分こそ、その男に潜んでいるくせによく言う。名を勝浦俊太郎といったか。なかなか良い土台だな。体格は申し分なく、頭が良い男だ】

俊太郎は眉を吊り上げた。「なぜお前がこの男の名を知っている。私は取り憑くまで、この男の思考を読むまで知らなかったぞ」

【俺に知らん事はない。読めんのは兄上の事ぐらいだ。名を知る事などたやすいことだ】

「……お前の声には聞き覚えがある」

しばらく考えをめぐらせた後、俊太郎は真面目な顔つきでミチルの肩を驚掴みにした。

「しかし、まさかそんな。馬鹿な事があるのか。……この声、須佐^{スサ}之男……建速須佐之男の命^{タケハヤスサノオノミコト}」

ミチルは声を出そうとした。だが、微塵も出て来ない。体の自由は全く効かない。

代わりに。

『ご名答。驚いたぞ、見抜いたか。知られたくはなかったが、さすがに鋭いな』

野太いドスの効いた声が口から飛び出してきた。信じ難い出来事に驚いたミチルは己の唇が動くのを止めようと試みたが、無駄であった。塞ぎたくても手は微動だにしない。

『久しいな、アメノウズメ。俊太郎とやらの姿であるのが口惜しい。待っててやるから元の姿で出直して来いよ。可愛がってやる』

「恐ろしい方。遙か遠くの根堅州國^{ねのかたすくに}にあって、夜之食国^{よじけ}にまで手を伸ばすことが出来ようとは。貴方は本当に恐ろしい敵。目的は何なのです」

『目的？ お前には関係ないことだ。それよりお前も何か企んでいるのだろうか？ 五の部の首長が寝殿内でこそそそと、人に憑依してまで何をしようというのだ。……当ててやろうか？ 本来の姿で行

動できん理由を。大方想像がつく』

俊太郎は下唇を噛みしめた。

「それ以上申されるのなら、たとえ貴方でも……かの伊邪那岐命イザナギのみことが生みし尊い三貴子みはしらのうずのみこといえども……消しますよ」

『やってみるが良い。俺は傷ひとつつかん。痛くも痒くもない。この女が死ぬだけだ』

ミチルの手は勝手に動いた。胸へ。自分を指している。彼女の顔は蒼白となり、唇はかたかたと震え始めた。

——この女が死ぬだけだ——

間近に迫る死を思った。

【そう恐れるな。単なる言葉遊びだ。お前とは契約している。その間は誰にも殺させん】

ミチルを安心させようというのか、彼女の頭に声が響いた。それでもミチルの震えは止まらない。

そして。

——ククク

ミチルは笑いたくもないのに笑った。自由がきかない。どうしても止められない。肩が上下に動いた。目から涙が溢れそうになるが、実際こぼれる事はなかった。

『アメノウズメ、勘違いするなよ。そう意気がるな。お前など俺にとっては赤児同然。それは紛れもない事実。俺はお前よりかなり強い。消すなどと身の程知らずな事は考えんことだ』

「くっ、赤児かどうか、試してみるといいでしょう」

俊太郎は祈るように胸元で両手を組むと、親指と小指をそれぞれ合わせて突き立てた。

——印。それはアメノウズメ特有の印相。

『血気盛んなことだ。お前のような神楽の神は、戦いよりも舞っておれば良いものを。所詮戦い向きではない』

俊太郎は上目遣いでミチルを睨んだ。すさまじい形相だ。「私は五の部の首長ですよ？　なのに神楽を持ち出すとは。話を逸らして時間稼ぎを？　……赤兎同然である私を恐れているのですか？」

『そうではない』

「ならこちらから行きますよ」

言葉と同時に軽々とミチルの体は浮んだ。俊太郎によって。何が起きたか分からず、ミチルは心底怯えたが、声にも態度にもあらわれることはなかった。叫びたくても叫べない。気持ちとは裏腹に彼女の顔を覆うのは、人をくった不敵な微笑み。スサノオの。

次いでミチルを追うように、俊太郎の体も浮いた。彼は七色の美しい光に包まれている。羽衣だ。羽衣により輝いている。その美は形容し難いもの。あまりにも神々しい。

『美しいな、その光。……ところでお前は反逆を企てているのだろうか？　邇邇芸が気に入らないのか？　不等な扱いに我慢ならんのか？　それとも本来の主である天照と決別したか？』

俊太郎は天井近くのミチルを見上げた。その目は大きく開け放たれている。

「な、何を言うのです。何を根拠にそのような恐ろしい事を！」

『決別までとはいかぬとも、疑ってはいるのだろうか？　あいつに話を聞いたのだろうか？　……なあ、俺と手を組まないか。あいつではなく俺と組め。損はさせん。お前という駒を手に入れられるなら、俺は何でも叶えてやる。望むなら俺の妻にしても良い。悪くはない話だろう』

ミチルは俊太郎に向けて手を差し伸べた。が、彼はそれには目もくれず、

「黙っていただきますようか。私は反逆や決別など考えてはいません。疑っていません。そもそもあいつとは一体誰の事でしよう。存じません。貴方と手を組む？　冗談じゃない。それに私の夫は猿田毘古ただひとり。他はありえません」

ミチルは差し伸べた手で空を掴んだ。

『しらじらしいが……まあ、いい。お前はいい女だな。あいつが執着するのも頷ける』

言葉を受けて、俊太郎の表情は陰しさを増していく。

「私は貴方とこうして無駄話をする暇もつもりもありません。そろそろ黙っていただきます」

『落ちつけ。とりあえず俺を地に下ろせ。俺は元よりお前と戦う気などない。戦意のない者に戦いを挑むほど、お前は落ちぶれた愚かな女でもあるまい。それに先を急ぐのだろうか？ 兄上の件、手遅れになるぞ』

0072＊ 愚鈍な奴ら

風が簾すだれごしに入り込み、仄暗い部屋では蝋燭が二本、消えんばかりに揺らめいていた。合わせて円座に座する邇邇ニニギ芸の命の髪もさわさわと動いている。

髪は目にかかり、間より垣間見える瞳は鋭い眼光を放っていた。その場にいる者があれば、ただならぬ目力に怯えただろう。が、今はニニギは一人きり。唇を噛みしめながら水晶玉を凝視していた。

「馬鹿め。のろまな……」

映るのは、ひび割れた天狗面、猿田毘古サルタヒコの姿。そして不格好に美豆良ずらを結った大男、玉祖タマノオヤ。

二人は見るからに老朽化が進んだ建物の一室で、年老いたミイラのような者と向かい合っている。ミイラはかろうじて真つ赤な口紅をつけていることから、女であることが判別できた。ミイラは優雅に羽に覆われた扇子で顔を仰いでいる。タマノオヤに流し目をしながら。

——『伊斯許理度売殿、お急ぎくだされ！ ニニギ殿が待っておられる。こうして言われた通りにタマノオヤ殿を連れてきた。満足であらう？ もう文句は言わせぬぞ』

荒々しいサルタヒコの声。イライラと錫杖を鳴らしている。隣にいるタマノオヤといえ、興味なさげに酒くさそうな大欠伸をしている。

——『急げと言われても……妾わらわはこの通り年老いておる。足も腰も悪い故、やさしくやさしく背負って欲しい。サルタヒコ、お前ではないぞ。その、タマノオヤさまに』

姿に似合わぬ美しくも芳しい声。老婆イシコリドメはにんまりと微笑みながら、なめまかしく髪を指で梳いている。目は常にサルタヒコを素通りし、タマノオヤのほうへ。

——『やめんか、気分が悪うなる。なぜ儂がお主を背負わねばなら

んのじゃあ』

タマノオヤは手を付け加え、拒否をさらに強くした。

——『まあ、つれない事。だがそこが魅力的。妾の心をとらえて離さぬ罪深きお方』

コココと笑いがこだまする。耐えかねたタマノオヤは踵を返した。

——『……胸くそ悪い。儂は一足先に行く』

咄嗟にサルタヒコはタマノオヤの肩をつかんだ。

——『ま、待て。タマノオヤ殿がいなければ、イシコリドメ殿は頑として動かぬのだ。頼む』

——『離せ。頼まれてもお断りじゃあ。年寄りはおかん』

一連の様子を見、ニニギは大きく舌打ちをした。

「五の部の首長たる者が、揃いも揃って何たるさま。愚鈍な奴らめ、恥を知れ！」

眉目秀麗な顔は完全に崩れ去っている。彼らに物申すべく、水晶玉を持つ手は光を帯び始めた。

と、その時。辺りは物々しい足音が聞こえ始めた。

「まじで赤いすだれじゃん。アンタほんとに目えいいな」

「まあ目はいいほうだなあ。それより、中、どうなってんだろう」

「ちよ、て、鉄二さん、開かないでくださいよ。まずいっすよ」

外からは様々な声が届いてくる。荒々しい息づかいを伴いながら。

「何事」

すくりその場に立ったニニギは、左手を天に向けて振りかざした。同時に回廊側を覆う簾は、ことごとく上へと舞い上がっていく。

「わっ！」

簾の向こう側、突然の出来事に三人の青年がそれぞれ驚きの表情

でこちらを見ている。

ニニギはすぐさま冷静さを取り戻した。顔は一転、元の端正な顔だちに。

「人、か。……すでに目を覚ましたのですね。ところで何をしているのです」

「……アンタ、誰だ？」

怪訝な顔つきで、日本人離れた青年がぼつりと言った。

ニニギは青年をつま先から頭の先までなめるように見てとり、

「アメニギシクニ ユン・テユですね。私はニギシアマツヒコ 天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命。みこと あなた方の世界では、ニニギという名で知られています」

「……は？ 何言ってるの？ つか、なんで俺の名を知ってるの？」

ニニギは涼しい顔でテユの言葉を無視し、隣にいる青年達をもじつくりと眺めた。

「佐伯鉄二、それから坂下真人ですね。あなたたちの事は五の部の首長たるアメノウズメ 天宇受賣に一任しています。良く従うのですよ」

佐伯と真人もあつけにとられ、テユと同じ顔つきをしている。

「何だアメノウズメって……」

「さあ、元来た道に戻ります。東のたいのや 対屋に留まりなさい。これより先に進んでは、命の保証は出来ません。あなたたちは招かれた客。願わくば、勝手な行動により死んでいただきたくはないですね。他の者にも私の言葉をよく伝え聞かせなさい」

淡々と言葉を放つと、ニニギは手を下へと下ろした。ザンと音を立てて簾は閉じる。

「お、おい！ 待てよ、わけわかんねーよ！」

ニニギは構わず再び円座に腰を下ろし、水晶玉を凝視した。こめかみには青筋がくっきりと浮んでいる。

やがて部屋には大きく声がこだまする。

「サルタヒコ、タマノオヤ、イシコリドメ。何をもたっているのです！　くだらぬことをうだうだと……。直ちにここに来なさい、命令です！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8094d/>

名前のない街

2010年10月10日14時44分発行